
ドラゴンのフリル

金澤 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンのフリル

【Nコード】

N2786J

【作者名】

金澤 樹

【あらすじ】

ドラゴンが人の記憶から霞んでしまうほど、その存在が人にとって縁遠いものになっていたとある国のとある時代。

一匹のドラゴンが突然人の世界に現れた。

幼い少女の姿をしたそのドラゴンはいかにして人の世界で生きていくとするのか。

人はそのドラゴンをどう扱うのか。

ドラゴンのフリルの物語が今静かに幕を上げる。

ドラゴンの聖騎士において、一部設定の変更のため文章を削除しました。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

ドラゴンの飼育係・偏屈家のグロアー

「グロアー様……。」

ああこんな所を衛兵にでも見つかったら、いたいけで可憐な少女に不埒な行為をはたらいた不貞の輩と思われてしょっ引かれるんだろ
うなあ、やるせないなあ……。

たしかに私だってされるがままになってるんだから言い訳のしよう
がないっちゃないんですけど……。

それにしたってロリコンのいわれを受けて投獄されたくはないもん
です……ヨシンに知られたらと思うと顔から火が出て、そのまま
コロコロイドごと焼き尽くしそうですよ……。

しかしフリル、いちいち誤解を受けるような行動をとらないでほし
いもんです。

本当に迷惑だったらありやしない。

一体全体この行為にはなんの意味があるっていうんでしょうねえ。

こっちの常識なんて、そりやもう太陽が400回はおはようござい
ますとおやすみなさいを繰り返すくらいの時間を掛けて教え込んだ
っっていうのに。

いやまあ、たしかに恥ずかしがり屋さんで思慮深い私が、世の中の
黒い、もといグロイ部分について、少女の様相を呈しているフリル
に直接的な表現で持って叩き込まなかった事にも原因の一端はある
かとは思っんですけどね？

でもさ、無理でしょう？それこそ、そんな事を吹き込んでる現場を誰かに見られてもしたら、確実に強制わいせつ罪でぶち込まれると思うわけで――。

「・・・？あの・・・グロアー様？」

僅かに戸惑いをその瞳ににじませながら、フリルが再びか細い声で呼びかけてくる。

「ああーハイハイ、ちゃんと聞いてますよお。聞いてますから、人が気持ちよく太陽さんの日差しに感謝と感動をもってして昼寝をしている間に膝の上にまたがって、潤んだ瞳で、そりやもう息がかかるとかそういう距離を飛び越えてその顔を接近させてはいけません。おすわり、フリル。」

「・・・？・・・もう座ってます。」

「ああーごめんなさいフリル。私が悪かったですねこれは。ハッハアツ、こいつぁー一本取られました。私からおりて地面の上に座りなさいといったのですよお。フリルや。普通ホイホイと人様の膝の上なんかに座ってはいけないですよえ。・・・これは今までにも何度か教えた事のある件かとは思ったのですが？」

「・・・？ですから、グロアー様の膝に・・・。」

目じりにうつすらと涙を浮かべ、花のように可憐なその顔を泣く寸前の状態に仕立て上げて、フリルが訳がわからないといった困惑の表情を浮かべて見つめてくる。

どうでもよいが、・・・いやよくない、近い。

「・・・フリル、一つ聞いても良いですかね？」

「はい・・・。」

不思議そうな表情で小首を傾げてくる。

くそう可愛いじゃないか。

いや決してこれは私がロリコンであるからではないんですよ、エエ。

そもそも小さな少女に対して父性愛を持つ事すらも危険視するようになってしまった人間という種族が呪わしい、嘆かわしい。

何故不安に押しつぶされそうに震える、いたいけな少女の姿を呈している者に愛情を持って接してはいけないのだろうか。

愛とは一体何なのだ？

愛とはそもそも、同年代の異性や、つよい絆で結ばれた家族等の間にしか生まれてはいけないもののなのだろうか。

否、断じてそんな事はありません。

愛とは正義である。愛とは強い力である。愛とは芸術である。動物であろうと、植物であろうと、思想であろうと、無機物であろうと愛してやまない道理があるか。

そう、これはあくまでも父性愛、その容姿がせいぜい12か13にしか見えない少女への温かくも、美しい無償の感情である。

そうあって欲しいと願う防衛本能で、自分を糾弾しようとする不貞な良心を殴り飛ばした。

「ひよつとしてですけど、ヒト様っていう方がいるんだと思つていませんか？」

「・・・違つのですか？」

「オオ、神よ・・・。」

グロアーは芝居がかった動きで額の前で手を組むと、まだ頭上に高い太陽に向かつて祈りを捧げた。その様子を見たフリルは太陽とは対照的に、一瞬にしてその蕩けそうだった表情を曇らせた。

「・・・違つのですね。も、申し訳ございません・・・ヒクッ。」

「オオウワ！泣かないくださいフリル！良いですよ！私が悪かった！私の常識で物事を判断した事がそもそも浅はかだったのですよ！」

「グロアー様が浅はかであろうはありますがありません・・・。グスッ。私がグロアー様の言葉から多くの事を推し量れない愚か者なの、わるいのです・・・ヒグッ。」

「何を言うのですか。フリルはとても聡明ですよ！そりやもう私が今までに接してきた幾百幾千という人間たちの誰よりも。」

「・・・本当ですか？」

「本当ですとも！僅か一年足らずで、最初は言葉すらも理解できなかったあなたがこうして立派に私と会話できている事がその証拠です。アナタはとても賢い。私の誇りです！ビバフリル！」

微笑んで頭を優しく撫でると、フリルは涙の跡が残る顔を嬉しそうにクシャツと歪めた。

「・・・ありがとうございます、グロアー様。泣いたりなんかして申し訳ございませんでした。」

「ああ気にする事ではないですよフリル。・・・ふむ、ところで人様というのは個人的な名前に敬称を付けたというわけではないのですよ。大方、世間一般にいる人間の事を指してそういうのです。」

「・・・？」人間”と”人”というのは別のものではないのですか？」

「ああ・・・、言葉つて難しいですよねえ。そうなんですよ、一体全体なんのためだと言われると明確に返答する事は結構面倒なのですが、言葉には同じものを指していても違う表現をすることがままあるのです。」

「他にもあるのですか？」

「そうですねえ・・・。例えばこの地面、時には大地と呼ばれる事もあります。私が持ち歩いている剣も、ツルギといったりすることがありますねえ。」

「・・・難しいですね。」

フリルは眉をひそめ、不思議でしょうがないといった表情を浮かべる。その素直な態度に思わず頬がゆるんでしまう。

「人間はアナタ達よりも少し感傷にひたりすぎるくらいがあるのか

も知れませんか。言葉が違っただけで、一つのセリフの持つ響きがまったく違うものに聞こえる。そう考えると同じものを指しているからといって、同じ意味を成す言葉というものは存在しないのかもしれない。」

補足説明のつもりではあったのだが、余計にフリルは困惑した表情を浮かべるだけの結果になってしまった。

結局今は理解しようとする事を諦めたのか、しばらくクルクルとめまぐるしく動かしていた尻尾をパタリと地面に落ち着かせると、ふわりとグロアーの胸にその体を密着させ、両腕をその脇から背後へと回しやわらかく抱きしめてきた。

「フリル……。前にも言いましたがホイホイと人の事を抱きしめてはいけません。その行為は一般的には……。そうですね……。何と言ったら良いか……。生涯を誓った男女が行う神聖な、といったら大げさですが、とにかくまあそういったものですよ。」

「……。？では私はグロアー様に生涯を誓います。これでよろしいですか？」

キョトンとされて言われても非常にこまる。

「いえいえ、よろしくありませんよ。言葉で誓いあっただけではなかなかどーして、不完全なのです。まあ言葉が無くても駄目なのですね。」

「では、どうすればよろしいのですか？」

うつむ、セリフに疑問符の多い子ですねえ。

日常茶飯事の事なので慣れてはいるものの、具体的に返答が出来な

い、もしくは辛い質問が来ることしばしばですね。今回もいち説明できる自信がない方向に展開しそうな会話です。

「そうですねえ……。まあ愛が必要かもしれませんねえ。それも双方からの愛です。愛っていうのは、前に教えた大好きというのと似たような言葉ですね。病める時も健やかなる時も、お互いを支えあい、何よりもその相手を大事にし、慈しみ、愛し合う心が。」

「……？それなら私はグロアー様の事を愛しております。グロアー様も私の事を愛して下さいます。」

「ああ、神よ。私はどうすれば良いのでしょうか……。」

当然といわんばかりの様子で、きっぱりと言い切るフリルに、ただ天に向かつて神に答えを求めるだけしかできなかった。

別にフリルからの愛もフリルへの愛も否定するつもりは毛頭ないが、細かなニュアンスが伝わっているとは到底思えない。

言葉って難しいですねえ、と内心ため息をつきながら、グロアーはひっそりしがみつくフリルを引き剥がす為その後、1時間を要した。

「ところでフリル、これから行くチェンツという街の事は話したことがありましたっけ。」

「いいえ、グロアー様。」

「ふむ、今回の出発はまあ慌しかったですからね、失念していました。申し訳ない。チェンツという街は、そうですねえ・・・まあ一言で言えば商業街といったところでしょうか。活気に溢れた良い街ですよ。」

昼食の後の昼寝から目覚めて約2時間後、グローアとフリルは自宅のあるボルドから馬で10日のところにある街道沿いを、のんびりとで進んでいた。少し太陽が傾いてきていたが、それでもまだポカポカと暖かい。この調子なら特に急がなくても、日暮れ前までには目的のチェンツの街へ到着できそうだった。

「商業街・・・。お店がいっぱい集まっているのですか？」

「そうですねえ、ボルドにも商業区というのがありますよね。あれのでっかい版です。」

「ボルドの商業区よりも大きいのですか・・・。」

目を大きく見張り、フリルが感嘆の声を上げる。

「そうですねえ、街自体の規模もボルドより幾分大きいですし、お城だの公園だのもなくて、そのぶん大小のお店が所狭しとひしめき合ってるんです。」

「お城も公園もないのですか・・・。ではどうやって政治を行ったり、散歩をしたりするのですか？」

「政に関しては、うーん・・・そうですねえ、形式上は、昔ボルドも属していたダグラスという国から命が下る事になっているんですが、実際は自治組合という、チェンツの都市の有力者達が話し合っ

て決定するんですよ。散歩は・・・たしかにしくいかもですねえ・・・」

「散歩ができないのですか・・・。」

フリルの表情がにわかに曇る。散歩が大好きなフリルである。ボルドでの滞在に暗雲が立ち込めた事に、先ほどまでのフワフワした楽しげな雰囲気にとんと影がさしてしまった。

「いやいやっ、出来ないというわけではないですよおフリル。たしかにボルドのように大きな公園があるわけではないですから、いつもの様に動物をはべらして大行進するわけにはいかないでしょうが・・・。」

「・・・公園がなくて、どのように散歩をするのですか？」

「様々なお店をみて回るのですよ。ボルドにはたくさんお店がありますからねえ。全部のお店をじっくりみて回ったらそれこそ一月では足りないくらいです。たまにはお店をみてまわるのも面白いものですよお。チェンツンツには隣国のファルデルやゴラン、アルゼール山脈を越えた所にあるフェストから商業街道が繋がっていますから、そりゃもう様々な品物で溢れかえってワンダフルに楽しい街です。」

「でも・・・噴水も林もないのではないですか？」

寂しそうにフリルが呟くが、グロアーは微笑みながらその頭を優しく撫でた。

「そんな事ありませんよフリル。確かにボルドと違ってチェンツに

は街の中に林はありませんが、そもそもが広大な森を切り開いて作られた街なんです。ボルドほどすぐに行けるわけではありませんが、少し歩けば街の外は一面が木に埋め尽くされているんです。それに街の中心にはそれはもう立派な、ボルドにあるものよりもずっと大きい噴水が作られています。」

「森と、噴水があるのですか。」

頭に添えられたグローアーの手に柔らかく自分の手を重ね振り返り、キラキラとした目でフリルが見つめてくる。その様子に思わずグローアーも温かな気持ちで満たされた気分になった。

「ええ、それだけではありませんよフリル。街を縦に横断するように、アルゼール山脈を水源とする大きな川が流れているんです。元々が水運とそれによつて運ばれる木材を売りとしていた街ですし。きっとフリルが見たどの川よりも広い川幅のはずです。船という川に浮かぶ乗り物がたくさんあつて見ていて飽きないですよ。様々な種類の魚もとれるんです。おいしいですよ。ボルドの魚は。私はユグという名前の白身魚が好物です。シルルの実をグツグツに込んだソースをたっぷりかけて食べるのが最高です。甘酸っぱくて柔らかな食感に、十日間は食べ続けても飽きないほどですよ。」

「わ、わたしも食べてみてよろしいでしょうか!？」

ボルドを出てからの十日間、味気ないパンばかり口に使っていた事も手伝つてか、フリルにしては珍しく興奮気味に頬を上気させて尋ねてくる。

「当たり前じゃないですか!そらもうお腹がはちきれるほどにご馳走しますよ!」

「はちきれてしまうのですか!？」

顔に縦線を数十本は引こうかという勢いでフリルが青ざめた。

「ああいや!失礼!今のは例えです。それくらい、満足いくまで食べて構わないということですよ。」

「ご、ごめんなさい。また勘違いをしてしまいました……。グロアー様の優しいお言葉を……。私は……。私は……。」

「これこれフリル、すぐにそうやって自虐モードに入る癖は直しなさい。私の心がもたない。そりやもうグラスハートと呼ばれても差し支えない程に。」

「も、ももももうしわけ……。ありませ……。ヒクッ。」

「おう!?泣かないでくださいフリル!あなたがあまりにも聡明なので、つい私が思慮にかける言葉を選んでしまうのが悪いのですよ!あなたはまったく悪くありません!」

「グ、ググ、グロアーさまが……。グスッ……。思慮に欠けるはずがありません……。ヒクッ……。わ、わた、私が……。ヒグッ。」

「ほらフリル!誇り高いドラゴン一族であるあなたがそんなにメソメソしてはいけません!私はドラゴン好きなのですよ。大きいですし、強いですし、ブレスなんか吐いちゃいますし、空だってビュンビュンで、風まで操れちゃいます!もう地上最強!神様といっても差し支えない!憧れてしまいます。だからフリル。私が大好きなドラゴンである貴女が悲しんでいると私まで悲しくなっ

きてしまいます。お願いだからその涙を拭いてくださいな。」

「・・・だいす、き？」

フリルは俯いたままピクリと肩を震わせ、嗚咽を突然とめた。抱え込むようにして鞍の前に乗せているのでその表情はうかがい知れないが、長い髪の僅かな隙間からみえるその頬は真っ赤に染まっているようにも見える。

「え？ええ、ドラゴン大好き・・・オブツ！？」

訝しげに答えようとするグロアーは突然グワアと鞍の上で器用に反転し、抱きしめてくる、もといボディアタックと言った方が的確なフリルの抱擁にもんどりうって馬上から転げ落ちた。

「嬉しい・・・グロアー様・・・。大好きって、言ってくれて・・・。」

「ぐう・・・？あのう・・・フリル、あなたは何か勘違いを・・・。」

「大好きです、グロアー様・・・。」

おお、神よ・・・と呟こうとして、しかしまあフリルの山の天気より変わりやすいご機嫌が回復したなら、もう勘違いくらい構いませんか、と小さくため息をついてグロアーは天を仰いだ。

正面から張り付いたまま眠ってしまった器用なフリルをそのまま抱え、周囲の不審者を見るような視線に苦笑いと冷や汗を浮かべながらグロアーがチェンツへとたどり着いたのは、結局日が沈んで間も

ない時刻になってしまっていた。
もちろん門を守る衛兵に疑われ、厳しく身元調査を受けたのは言うまでもない事であった。

「これはこれは・・・グローア殿・・・なんともまあ、筆舌に尽くしがたい状況ですな。」

「・・・そうおっしゃらないで下さいバルガ殿。」

グローアの前の席にクツクツと笑いを忍ばせて座った男に、グローアは無然とした調子で答えた。チェンツにある小高い丘のその頂上に建てられた商業組合会館。その広大な木組みの会館の一室の中で、グローアはバルガと呼ばれる男と向き合った。

笑われるのもまあ仕方ないですけどねえ・・・。と、グローアは小さくため息をついた。重要な会談であるにもかかわらず、小さな少女が眠ったまま正面に抱きついたままやってくるなど言語道断。というか相手に怒られなくて僥倖であった。

「いや、これは失礼。・・・その少女が、例の？」

スツと微笑をしまい込み、それまでの柔らかな表情から一変してバルガが異様な光を湛えた鋭い視線でグローアに抱きつくフリルを見つめた。

商人然とした服装ながらも、どうしたらそこまで鍛えられるのか

不思議に思うほどの筋肉質で大柄な体。きれいに毎日剃っているの
であろうつるりとした頭。立派に蓄えられた口ひげ。相手を無意識
に圧倒しそうな外見をしたバルガがそんな表情を見せると、さすが
のグロアーでも身の縮こまる思いがする。

「ええまあ・・・。」

というか、どこからそんな話を聞いたんでしょうねえ、この狸じじ
いは？

「よく懷かれておられるみたいですね。ドラゴン是人には懷かない
と聞いていましたが。一体どのような経緯でそのドラゴンの子ども
を？」

「・・・バルガ殿、今日私が来たのは今年の麦の取引量に関しての
ボルドの意向をお伝えしに来ただけです。この様な無礼な状態でお
目にかかっておいて私からのお願いなど心苦しくはありますが・・・
この子の事はまた別の機会に・・・。」

「・・・ふむ、まあ少しくらいは良いではないですかグロアー殿。
こうして久しぶりにお会いする事が出来たのです。煩わしい金勘定
は抜きにした世間話の一つでも付き合って下さい。」

鋭い眼光を目の奥にしまい込み、バルガが僅かに微笑む。

「・・・。」

「しかし、本当にドラゴンというのは人の形を取る事が出来るもの
なのですな。実際に変化するところを見たわけではないのでまだ今
ひとつ信じられませんが。人間が失って久しい魔法とやら、使いこ

なす事が出来ればさぞや便利でしょうなあ。なんでも風を操ることすらできるそうで。」

「・・・どうでしょうねえ。聞くに成獣となつたドラゴンの知能と理性は人間のそれを遙かに凌駕する生き物だそうです。またその恐ろしい外見とは裏腹に、大変心優しいものだとも聞いています。我々等が使おうとしても、使いこなせるような代物ではないかもしれませんが。」

「

「・・・まあそういった用途に使うとする不貞な輩も現れてもおかしくはないですな。しかし人を殺す事にしか使わないなどとは、少し意見が偏りすぎではないですか。私が今思いつくものだけでも、船の航行速度の上昇や風車への利用。馬車にとつてかわる陸上の移動手段としても活用できるかもしれません。」

「ほほお、さすがはバルガ殿ですな。まるでもう既に計画が動き出しでもしているかのような素晴らしいご提案。」

「いやいやそんな事ございませんよグロアー殿。私など、世間一般には愚鈍で通つておる程度の人間です。いつ誰につけこまれるかと戦々恐々とした毎日です。」

「何をおっしゃいます。チエンツの発展はあなたがいるからこそ成し遂げられた。代々受け継がれてきた交易の中継地点としてだけの役割に、卸業を加える事によってこの十年でそれこそ目くらむほどの富を蓄えられたではありませんか。」

「ハハ、買い被りというものです。私は特別な事をしたわけでもありません。ただ偶々このような発展をする時期に、私が組合長とし

てこの街に従事する事になっただけです。」

「そんな事はないと思いますがねえ・・・そういえば最近その富に目を付けている王族がいるとかいないとか、不穏な噂を耳にしたことがありますね。まったくこの輩がそんな下衆な噂を流すのかわかったもんじゃありませんが、ゆめゆめお気をつけ下さいバルガ殿。一切の軍備を放棄するかわりにダグラスより与えられた数々の特権。そのような王族に攻め立てられては元も子もなくなってしまいますからな。いやはや、これだけの富を持ちながら軍備が出来ないというのも・・・。心中お察しいたしますバルガ殿。」

「・・・。」

しばし無言が部屋の中に充満する。

「ご心配痛み入ります・・・それでは楽しい会話の時間はここらへんにしておいて、今年の麦の取引量でしたな。本題に移ると致しますか。」

「よろしくお願いいたします、バルガ殿。」

あいも変わらずグロアーに引っ付くフリルだけが、その真つ青な長い髪を床へと垂らしながらスヤスヤと眠り続ける。

いい気なもんですねと内心ため息をつきながらグロアーは改めて気合を入れなおし、故郷の今年の潤いを決める会合へと気持ちを切り替えた。

1年前から出来るだけ考えないようにしてきた、フリルの事を利用しようとする輩との話し合い。ああぞつとしますねえ。

どいつもこいつも、本当にくだらない。

ですよねえフリル？

夜もどつぷりと更けた頃、会談を終えたグロアーとフリルはぐったりとした面持ちで宿へと転がり込んだ。ちなみにグロアーは気疲れであるが、フリルは変な格好で寝ていたせいで疲れていたただけだ。部屋へ着くと、限界だともいうようにグロアーはぐったりとベッドへ突っ伏した。

「ああゝもうやってられませんよ、こんなことなら今年は交渉役なんて断ればよかったですね。」

「お疲れですねグロアー様・・・、あの・・・マッサージでも・・・いたしましょうか。」

「フリル、マッサージは顔を赤らめて申し出るようなやましい行いではありません。胸を張って男らしく申し出なさい。」

「はぁ・・・。胸を・・・。」

不思議そうな顔をして、フリルは自分の胸に視線を落とし両手をあてる。まあ、年相応に、豊かではない。

「そこだけ強調してはいけませんフリル。私は男らしくの方に突っ込んで欲しくて今のセリフを吐いたのですよ。ましてやそんな所を男性の前で撫で繰り回してもいけません。ただでさえアナタと二人

で宿に入るときに宿の主人に相当不信がられたのです。なんだかいけないことを私があなたに強要しているみたいではありませんか。」

「はぁ……。」

予定調和とでもいえるフリルとのやり取りに一通り満足すると、グロアーはその外見に見合わない年寄りのような掛け声をかけてベッドから立ち上がった。

「さーてフリル、この宿はお茶がとくても美味しいのです。話した事がありますっけ？ハーブティーと言われているものです。飲んでみますか？」

「美味しいのですかっ。はいっ！飲んでみたいです！」

頬を上気させながらフリルは座っていた椅子から音を立てて立ち上がる。子どもらしいその反応に、思わずグロアーも疲れを忘れた様に相好を崩した。

「まあ好き嫌いの分かれる飲み物ではありますがねえ。とりあえず下に下りてみましょう。先程主人に食事の準備を頼んでおきましたし、お茶を頂いている間に良い頃合になるんじゃないですかねえ。」

「はいっ。はいっ！」

キラキラとしたその瞳をみていると、思わずこの少女が人とは決して相容れないとまでいわれたドラゴンの化身だとは思えなくなる。

「嫌ですねえ人間って、すぐに感情移入して、なんでも自分に都合

が良いものに捕らえようとしてしまう。くだらないですよねえ。」

「・・・？グロアー様？どうかされましたか？」

先に部屋の外へと駆け出したフリルが不思議そうな顔で尋ねてくる。

「いえいえ、フリルの純粋な食欲に、私も生物としての三大欲求が過剰なほど刺激されて感傷的になっていただけです。さ、いきましよう、ご飯ですご飯。」

「・・・？」

苦笑いしながら脇をすり抜けていくグロアーの姿に、なんだかいつもとは違う違和感を感じたものの、フリルには今ひとつそれがなんなのかは分からなかった。

でもまあ、とりあえずはご飯です。

とても楽しみです。ハーブティーも、どんな味がするんでしょう？
ご飯！

グロアー様と、ごっはっんっ！

「ひぐつ、ズズ、う、うええええ、ズズ、うえええええええん。」

「・・・。」

「うー、うー、ズズ、うええええええ、ズズッ。」

「・・・・・・・・。」

宿の一階へと移動したグロアーたちは、向かい合ってテーブルにつき食前のハーブティーを頂いていた。

しかし、件のハーブティーを一口すすった所でフリルの気体に満ちてキラキラと輝いていた表情が一変した。

ビクッと肩を震わせてカップから口を離れたその瞬間、グロアーは内心「あ、はずれでしたねえ」と呟いた。

完全にフリルの顔に「うわあ！？これ美味しくないです！なんですかこれすごいお薬くさいです！お薬嫌いです。不味いです！こんなものカップ一杯も飲んでしまったら私死んでしまいます！ああ・・・今火事でも起きてうやむやになってしまったらいいのに！」

と器用に感情が出たり引つ込んだりするものだから、思わずグロアーは嘔きだしそうになった。

やめればいいのに・・・と思う反面、反応が非常に面白いので下唇を噛んで笑いをこらえ静観する。

そしてチビリチビリと飲む事カップ半分、いよいよ外面も保てなくなってきたフリルはとうとうぐずりだした。

人一倍気遣いのあるフリルの事である。与えてもらったものを不味そうに飲むなどは断じて自分に許せない行為であろうが、どうやらあまりの不味さにもう自分が内心で泣いているのか、それが表に出てしまっているのかすらよく分かっていないようである。

「う・・・うー、うー、ズズ、ビエエエエエ、ズズズズ、ウプッ!?」

「クッ・・・。」

そのあまりの混乱ぶりが面白くて仕方がない、声をだして笑いそうになるのを下を向いて必死に堪える。

「う”う”う”う”、ズズ、フ、フウウウ、ズズ、ハアッハアッ、ズ・・・ウ”エエエエエ。」

「グウツ・・・！クツツツ！」

もうなんか色々と嘔き出してひどい有様である。グロアーはというとあまりに強く下唇を噛みすぎたせいで口の端から血がたれている。

片や泣き叫び、片や顔を覆って口の端から流血する不気味な二人に他の宿泊客がざわめいたが、フリルもグロアーも必死なのでまったく気がつかない。

「ブブブブブブ、ズ・・・ウブブブブブ！！ズズー。」

「ブーックス！・・・ク、ググググ。」

おお、神よ！！！！げ、限界です！いたいけな少女の我慢する姿があまりにもつばだったからと言って！こ、ここまでの困難を私に与える必要があるというのですか！？

ああ！というか笑っても別に良いんじゃないでしょうか！

そもそも何で笑うのを我慢していたのかすらも、もう思い出せない！よ、よし！笑うぞ！今から思いっきり笑うぞ！一生分笑いますとも！よおおおおし！三つ数えて笑いますっ！

いっくぞおおおお！

いーち！

にーの！

さ——「あのお客様・・・お料理が出来上がりましたが・・・。」

「うわあああああ!？」

突然掛けられた店主の声に度肝を抜かされたドロアーは、しかし笑うモーシヨンに入っていた顔の筋肉を驚きの表情へと完全に変化させる事ができないまま、驚笑(？)の表情で椅子ごと後ろにひっくり返った。

「お、お客様!？」

「ぐうつうつ痛ふふ、ふふふ痛ぐぬうつ!！」

痛い、痛いけど面白い。嗚咽と笑いがごちゃ混ぜになって口からもれだす。

「うつうつうつ、ず……ひぐうつ!……ず……。……えぶ?」

異常に気付いたフリル、不幸にも、店主が見つめたその顔には可愛らしい鼻ちようちゃん。

「え、え?あつつ」

パチンとはじけた瞬間、店主は顔を真っ赤にして口を必死に押さえた。

「お、おきやくさ……。フ、クツ、フフフ、ブ、ブーッ!」

「は……。ハハハハ!グワハハハハッ!」「キャ……。フフ……。フフフアハハハハ!」

店主がフリルを見て、堪えきれずに嘔き出したのを皮切りに、異様

な二人連れに注目の集まっていた宿の食堂の客達は大爆笑に包まれた。ドローも腹を抱えて泣き笑い、店主はあろうことか料理の皿を床にひっくり返した。それがまた可笑しくて店中がさらに笑いに包まれる。調子に乗った客が酒瓶を片手に声を大にして歌を歌いだす。笑いながら楽師達が楽器を鳴らし始める。めちやくちやな音程と旋律にこれまた大爆笑がおきて、もう宿のなかは何がおかしいやらさっぱりわからない状態に陥ってしまった。

「え・・・？ええ・・・？」

一人状況から置いてけぼりをくらったフリルだけが、涙と鼻水で顔をグシャグシャにしたまま訳が分からずにオロオロと慌てふためく。辺りは歌ったり踊ったりと完全にできあがってしまったている。

もうその姿があんまりにも可愛らしくて可笑しくて、正直な話グロアーは笑い殺されそうになった。

素晴らしい夜だった。

喧騒もさったあとに、喉が渴いたから分けてくださいといってフリルの紅茶の残りを飲み干してやると、フリルは顔を真っ赤にしたまま下を俯いていて、小さな声で「ありがとうございます」とつぶやいた。

いえいえフリル。こちらこそ、久々にこんなに笑わせてもらいました。

本当に、ありがとう。人間ってのは、良い所も悪い所も、一杯あるのですねえ。

一晩でその両方を味わった気分です。お得かもしれませんね？

お礼と言ったらなんですが、今度は果実の紅茶にハチミツをたっぷり落としてごちそうしますね。

紅茶がトラウマにでもなっていないければ、の話ですが。

それでは良い夢を。

おやすみなさい、大好きな、私の可愛いドラゴン。

願わくばアナタの進む稀有な旅路に、多くの素晴らしい出会いと、今日のような笑顔が満ち満ちて、いつまでもいつまでも、幸多からん事を。

翌日早朝——朝の見回りを行っていた衛兵が、街のはずれの森の入り口で、首を切り裂かれ死亡しているグロアーを発見した。

ドラゴンの守護者・槍術使いのファネル

あああああ！

もう！もうもうもう！なああんでこんなことにつ！くそうくそうくそう！

くそうあの占い師の婆さん！

なあにがアンタの前途は希望に満ち溢れているだつての！

ふざけんなつつの！前途多難だつつの！

希望どころか死の危険が満ち溢れてるつつの！ケガいてえつつの！血がとまんねえええ！やばい！やばいしやばいしこれええええ！流しすぎ！流しすぎたよ血い！！

あーもー素人かつつの！！止血止血！包帯あつたつけ！？ない！？ないつつの！

ああああくそう服やぶくかああああ！？

たまんねー！先週買ったばかりだよこの服！大会用の正装だったのにいいいいい！

ちくしょうこのガキ！ブルブル震えてんじやないつての！

こちらら失血で手えガクブルだつつのおおお！巻けよ！お前が巻けよ包帯！アタシに！

甘えてんじやねえぞクソガキ！！

てめえの保護者でも近くにいなけりやお前だつてただの一人の人間なんだよ！！

子どもの特権ふりかざして心とざしてるんじやねーよっ！クソッ！だああああ！ま、ままままけねえええ！片手じやまけねえええ！どどど、どーすんだつけ、腕・・・腕どーすんだつけ！？

あ！歯か！歯あつかやいいんか！やべーやべー動揺してるよ動揺してる！落ち着けアタシ！あ、くそちげえ目え霞んでんじやん！？ふざけんなコラア！頭に血いたりねーだけじゃねえか！

・・・ていうか口も殴られてんじやんそういえば！？

あーもーなきてええええ！どーすんだよ！

ああああこれでも村一番の美人とかちやほやされてたんだぞコラ！
ちくしょうアイツ！！よくも可愛いあたしの顔なぐりやがって！！
ぶっ殺す！！もう殺したけどもつかい殺す！

ああああほんともうやべーよ！だああちくしょう！！

もうしかたねーガキたよるか！！

あーもおおおやなんだよ子どもつかうのはよおおお！嫌いなんだよ子どもおお！

ちくしょうちくしょうちくしょう！！

助けなきゃ良かった！

あーもーまじでたすけなきゃよかった！

おいこら餓鬼！！！！間違えたくそガキ！！！！いや一緒に？
てめえこれ押さえてろ！

・・・俯くんじゃねええええ！！！！

わかる！？アタシあんたの命の恩人なわけ！？

んでしかもテメエ助けたせいで死に掛かってるわけ！！

布の切れ端押さえるくらいなんだっての！？

甘えんなよこらガキ！！

・・・そうだよコレもってりゃいいんだよ！

てめえ力なさそうだから両手でもってろ！

ゆるゆるじゃ意味ねえからアタシもおもいつきし引つ張るかな
！？

少しでも恩義を感じる一般常識身につけてんならゼツテー力ゆるめ
んなよ！？

うううううう！あー！！！！くそイツテエ！

あ！こら！歯あ食いしばれガキ！手はずれそうになってんだろが！

・・・フルフルじゃねーよボケエ！！

強がつてる場合かばけえ！・・・いやもつと強がれガキ！！

ああもうちくしょう！！

・・・よ、よっしゃ！こんなもんか？こんなもんだよな？大分止ま

つたたる血？

おいこらガキ！・・・いちいちびくついてんじゃねーよオメエ・・・。

おし、その切れ端こつちよこせ・・・あ？

何してんだ？ああ？手えはずれないっておめえ・・・。

あああもう！弱虫！毛虫！腰抜け！糞ガキ！もういいからその槍とれ！

・・・足使え馬鹿！！伸ばせば届くだろうが！！

そつだよそつそつ！おめえこつちの切れ端啜えてろ！はなすんじゃねえぞ！

うつうつうつ・・・っしや届いた！お前切れ端両方アタシの脇に挟め！
そつそつ！したらこの槍の柄啜えろ！

・・・何してんだおめえ。

あほか！もつとデケエ口あけるボケ！

ああもう手間とらせんなつての・・・。

おつしもう槍放していいぞ。ここを・・・こう・・・っしや！

できた止血！！これセーフ！？セーフだよねこれ！

とりあえず一命取り留めた感じじゃないコレ！？

ガッハツハ！ファネル様超すごいわ！

死の淵から見事生還！無敵！実際今日5人相手でも生き残ったし！！

やっぱアタシつえーじゃん！5人とかありえねーし！

普通2人相手でも死ねるし！！

あれ正規兵だろ！？全然雑魚ジャンぐあつはっは！

今日のアタシの武勇伝とか王にでもつたわんねーかな？

そしたら召抱えてくれんべえ？

あ、でもテメー正規兵に追われてたんだから、アタシ犯罪者とかの逃亡手助けしちやつたわけ？

ぐわああああ！！ありえねええええ！！！

だめじゃん！！

むしろ伝わったら首はねられんジャン！？

あああもうちくしょう！

・・・。

そっぴやてめー名前なんてーんだよ？

あ？

？

なんだそりや、ふざけた名前だなオイ。

どこのどいつがそんな奇抜な名前つけたんだオイ。

はあ？

いや、しらねーしらねー。

・・・がっかりスナよ！仕方ねーだろ！知らねえもんは知らねえんだよ！

あああもう！泣くなよおおお！

だから嫌なんだよ子どもってえええええ！

あ・・・やべ・・・意識切れる。あーまじこれボタンキューコース直行だわマジデ。

おいてめー火たくなよ？ばれっかな？

あーうー。

ああ、その木の洞はいんぞ。

ちよいわりーけどお姉さん少し眠るわ。

寝てる間にどつかいてもいいぞーむしろどつかいけー。

あーでもちくしょう。さみーなさすがに。おいてめーこっちよれ。

・・・おびえてんじゃねーよ！命すくってやったんだろっが！いまさら取って食いやしねえよ！

おう・・・。

ここはいれ。そうそう。あーちょっとはまし。

・・・ぐはははは！

・・・てめえモゾモゾすんじゃねーよくすぐってーだろうが！

そうそう大人しくしてろ。

ちよつと血生ぐせえけど我慢しろ。

・・・おめえも少し寝ろ。

・・・でもじゃねえ寝ろ。

あ？

あほかてめーこのていどでファネル様がしぬわけねーだろが。
このままポックリなんて冗談じゃねーよ。

ああ？

ああもう、誰か来た気配くらい寝てても読めるつつの！
安心しろこのボケ！カス！

地上最強ファネル様が守ってやってんだぞ！

テメエみたいなガキ一人くらい余裕綽々でまもつたるわい！！

・・・ああ。

・・・おう。

・・・ああもう！その口と目え閉じねーと強制的に昏倒させるぞこ
ら！！

あ・・・くそ叫んだから・・・。

あーもー。

マジ今日は厄日・・・。うらない・・・なん――

・・・・・・。。

おいこら、テメエまじかよ。

なんでこんな追っ手かかってんだよ！？

ああああもう畜生！

あの占い婆！！

ぜってえ今度ぶつ殺してやる！！

おまえなー・・・。

30人超えたんだぞ追っ手え！こら！？

なんでチャンツ領にまで入ってゴランから追っ手かかるんだよ！！
しかもその度に4〜5人でくるとかマジアリエナインデスケド！？
なんかファネルちゃん超強くなってる気がするんですけどぉ！！？
ひと一人切り殺すたびに強くなるって、ありゃあマジダネ！

普通に左手とかもうないけどね！！がはは！

それでも倒しちゃうんだから本当、伝説級だねアタシ！

んーもう最強！最凶！！英雄ファネルウツ！って感じ！？オホオホ
ホげふつごぼつ！

畜生なれない笑い方するもんじゃ・・・

あ、馬鹿コラそれ違うわい！！

それ食えねえっての！！

籠に混ぜんな籠にい！！！！

わかんねーのに自己判断すんじゃないやねえよボケ！！カス！！聞け！！
分かんなかったら聞けコラ！

ああああもう・・・ゴランからこんな離れちゃったよおおおお
お！

ファネルちゃん折角フェストから出てきてゴランで一旗たてようと
思ってたのにいいい！

まじでもうアルゼール山脈とか遠く霞んじやったんですけど！！

なんでまたボルドな訳！！？

どうしてよりによってテメエの保護者はボルドにいるわけええええ
！？

ゴランにいるよボケ！ナス！！

迷惑だっつの！！！！

なんでアタシがクソガキ引き連れてボルドくんだりまで出向いてや
らなきゃいけないんだっつの！！半年かかるわボケ！！

なんでテメエボルドどころかチェンツまでの道のりすらしねえんだっつもの！！

知ってるよ！！生まれた瞬間にわかってるよ愚図！！

そして勝手にトコトコいけてのアホウ！！

アタシなんかその点生まれたときから槍もってたかんね！？

いやまじ親父がおもちの代わりにもたせてたかんね！？

あぶねっつの！！

あほかっつのクソオヤジ！！

あ！ばか！そんな風に刃物もつなっつてんだろがボケ！タコ！

テメエの血い調味料にしたって滋養強壮なるかっての愚図！！

こうだよ・・・！

・・・。

ちげえよこうだっつの！！！！

そう。そうだよ。

おわああ馬鹿！！そこ食えるわ！！！！

捨てんな！！食べ物粗末にすんな！！罰当たり！！地獄に落ちろ力

ス！！

・・・うおらああああ！

教えてもらったらありがとうございますだろうが！！

アホウ！！

注意されたら土下座付きじゃないとリカバリーきかんわ！！

・・・よし、ゆるす。次は殺すぞコラ。

ほれ、さっさと作れ。作り方この前教えただろうが。

・・・お姉さんはちよつと小用たしてくらあ。

・・・。

・・・。

・・・。

こらばけえ！！！！材料いつぺんに投下すんじゃねえよ！！

それじゃ芋が煮え切らねえだろうがカス！！

あ？

別に・・・見てたわけじゃねえよコラア！！
ちよびつとしかでなかったんじゃコラア！！

・・・。

わ、わらってんじゃ・・・殺す！！！！ぶつつつつ殺す！！
そこになおれええええい！！！！

ちげーよぼけ！！こりゃ毒草だつっつたろぅが愚図！！殺すつもりか
！！

止血に効くのは双葉のほうだよボケ！！

あああああもう！！ないてんじゃねえよおおおお！！！！
大丈夫だつつのこの程度じゃ死にやしねえつつの！！！！

アタシの失血死タイムリミットはてめえがミスる事もしっかり計算
されて設定されてるんだつつの！！！！

そんぐらい朝飯どころか前日の夕飯前だつつのおおおお！！！！
すげえだろ！！！！くはははは！！

愚図ってねえでさつさと探して来い！！

うるせええええ！片目ぐらい無くたって！！！！

死にやあせんわカス！！！！弱虫！泣き虫！クソガキ！！

てめえは！さつさと死ね！！

あああああもう！！はずしてんじゃねえよおおおお！！

どうしてこの距離ではずすんだよおお!!!

今晚のおかすがああああ!!

ボケエエエエ!もう出てこねえぞアレエエエ!

掘れ!!てめえほれあの巣穴あ!!!

8バルぐらいほりやあ捕まえられるだろうよ!!

ああああもう畜生!!

ごめんなさいじゃねえボケカス!!!

畜生畜生!

仕方ねえテメエは芋でも食ってるクソガキ!!!

ああああ!?

この高貴で美しいファネル様に芋くえつつーのかてめえはああああ!!?

芋なんてテメエみたいな泥くせえガキの食いもんなんだよボケ!カス!

・・・でもだつてもねえわああああ!!

これしかねえんだから仕方ねえだろうが!!!

泣き言いうんならはずすんじゃねえええ!

真剣にやれボケ!!!

食料調達なめんじやねえぞコラ!!!

アタシはてめえと違って豊かな乳房にたあああっぷり脂肪蓄え

てんだよガキ!ガハハ!

2~3日食わなくなつてしにやあせんわ恐れ入ったかボケ!オオボケ!!

・・・おい。

・・・コラ!!!

本気で掘ろうとすんじやねえよオオバカ!!!

8バルだぞ8バルウウウウウ!二日かかるわあああ!

余計な体力つかうんじやねえよ衝動性猪突猛進型最終兵器クソガキ!!!!!!

ああもうわかつたよ!!!

くそおお！半分こな！！！半分こでいいだろうがボケ！！カス！！！！

・・・。

嬉しそうにすんじゃねええええええ！！！！

殺す！！！！ぶつ殺す！！！！クソガキ！！！！！！

がはははは！！きたきたあああ！！！！！！

何度目！？何人目！！！！

こりないねえ君たちいいいい！！

ていうか弱くね！？

弱すぎじゃね！？？

ファネルちゃんもう右腕右目左足くらいっすよまともなの！！？

なんで来るの！？馬鹿なの！！？

敵わないのわかんないのおおお！？

おう！？

ほらみて君たちい！

あのクソガキ隠れるのだけめっちゃ上手くなっちゃたああああ！

君たちじゃ絶対みつからないよあのクソガキ！！

がははは！！

やりやすうううい！！

まあ君たち位クソガキいても5分だけどおおおおお！

あれ？8人？おおくね？

アタシひとりに？

・・・。

・・・。

•
•
•
○

うははははははは！！！！！！！！！！！！！

最初からそうしてろよ童貞ども！！！！！！！！

ごめん5分言い過ぎた！！！！

がははは！

まじワリイ！！！！！！

5分20秒!!!!!!

きやあぁあ！青筋たてちゃってこわいいいいい！

ぐはは！

•
•
•
○

•
•
•
○

•
•
•
○

……おらちつちとじによ下衆ども。

泣いても叫んでも

てめえらなんかゆるさねえ。

ぶつ殺す!!!!!!!!!!!!

内臓ぶちまけながら後悔してろ鬼畜ども!!!!!!!!!!!!!!

ああ！？

こらボケ！何で泣くんだよ！！

折角あれだけ冷たくしてやっただろうが！！！！

だから嫌なんだよ子どもはあああああ！

めんどくせえええええ！

お前ここまでアタシがしてやったのに裏切って泣くんじゃねえよコ
ラ！！！！

アタシの計画ではアタシがしんだらてめえは「キャハッ」とか言
いながら走り去ってくんだよ！！

命助けてもらつたという人様の壮大な素敵計画ぶち壊してんじゃねえ
よコラがき！

ああああもういやああああ！

たすけなきゃよかったああああ！！

わざわざ泣かせるために助けたわけじゃネエエエエエ！！

笑えクソガキ！！！！

オラ！ワラエイ！

笑わないとぶつ殺す！！！！

まあその前に確実にアタシが死ぬけどな！！がははははは！！！！

ああ？

どうして笑えるのってそりやおめえ。

ああああもう！！！！

察しろよなああああ！！？

だからガキは嫌なんだよ説明しねえとわかんねえからよおおお！

なんで！！？なんでアタシは死ぬ間際まで辱め受けなきゃいけないわ
け！！？

お前それわざとなの！！？ていうかわざとだろ！！？

そうか！嫌がらせしてんだなテメエ！

あながちアタシの計画は失敗してなかったんだな！！？

だよな！！！！

あたしってば地上最強完全無欠のファネル様ですもの！！？オホホゲ
フツゴホツ！

ちくしょう！なれねえ笑い方したもんで・・・！

ああもううつせえな！！！！

悲鳴あげてんじゃねえよ可愛くねえよガキイ！！

血ぐらい普通に吐くわ！！！！

マントはいだら内臓ドラッダラだわボケ！！！！

死んじやイヤダじゃねえボケ！カス！！こんなん確実にしぬわ！！

！アホウ！！！！！！

うっさい！！泣き叫ぶなお迎えはやまる！！！！

いいかこらガキ！！よく聞け！！一回しかいわねーぞ！！つか一回しかいえねえぞ！ガハハ！

ここら一帯にはズビの木がなっつからその実い食って飢え凌げ！遠見した感じてめえの足だと二日くらいでズビの木なくなっから、2日目に鞆なかにありったけ実いつめる！10日分くらいは入んだろ！？

あ！種くうんじゃねえぞ！！？結構噛み切れちまうけど腹壊すからな！？

殻かてえからアタシの槍もってって割れ！そのままじゃ目立つから柄をおってからもってけよこら！？

あの山みる！あれ！ちがうぼけ！あのとんがってんだ！！そう！あれ！

あの方角目指してひたつすら歩け！！昼間にあるくんじゃねーぞこら！？半月くらいでボルトだ！

5日間分くらい自分で食料さがして食え！ボルト周辺ならヤルグが巢うつくつてるはずだから探して捕まえろ！あんなん生でも食える！内臓食うんじゃねーぞ！より分ける！やりかたわかるな！？よし！夜こわくても火いたくんじゃねえぞコラ！！！！木の上のぼって寝ろよサルらしく！ウハハ！

あとアタシの外套もってけ！まださみーから意識なくなるまで着させてろ！マジサミイ！！震えとまんねえ！！！！

ああ！？できねーじゃねーよクソガキ！

くっだらねえ！！死体に着物なんていらねえんだよボケ！！

死んだら全天候対応できるわいボケエ！！

ああくそっ！

くそつくそつくそつくそつ！！！

泣くんじゃないフリルつつ！！！！

良いんだ！！！！

てめえは謝らなくていいんだ！！！！

子どもは謝らなくていいんだよつつ！！！！

我俣や甘えで泣いたっていいけど悲しくてないちゃだめだろうがつ
！！

てめえの育て親はそんな事も教えてねえのか！

俺はテメエのために死ぬから！お前も大人になったら子どものために死ぬ！！

それでチャラだろ！？ちげーのかよ！？

アタシは頭わりーからわかんねーよ！

あのなあフリル！

正規兵5人に突っ込んだ時点で！

もうあの時点でアタシはこの命をくれてやろうって、そうすべきだ
って事だけはちゃんとわかってやったんだよ！！奇跡的にあの時生
き残れてただちよつとだけ付き合いが長くなっちゃっただけ！

アタシも昔そうやって救われた！！

同じ事をした！！

だからお前もアタシのように生きる！！

槍なんか出来なくていい！別の道を探せ！

ただひたすら笑って生きる！！

子どもを笑顔にさせながら生きる！！

わかったか！？

フリルツ！！！！

歯あ食いしばって、悲しけりや笑え！！！！

・・・・・・・・・・。

ああむかつくなあ

子ども　　って

お　　い　　こ　　ら　　フ　　　　　　リ

ル

てめ

え

泣くんじゃねえぞ？

ドラゴンの聖騎士・ゴラン騎士七の団、団長ジェムド

幼い頃、母に読んでもらった御伽噺に出てくる騎士に憧れた。

騎士はいつも真つ白な甲冑にその身を包み、背には真つ赤なマントを羽織っていた。

腰に下げる剣には、細かく美しい紋様がこれでもかと言うほどに刻み込まれ、日の光を複雑に跳ね返してキラキラと輝いていた。

騎士には思いを寄せる姫がいるのだが、ある日突然、姫はその美しさ故に竜によって攫われてしまうのだ。

凶悪な怪物たち、襲い掛かる幾多の罟と困難を潜り抜け、それでも純白の輝きを尚失わない騎士は、ついに竜に立ち向かい勝利する。

人々は歓喜に沸きあがり、その騎士を勇者として称え、惜しみない賞賛を送る。

そして、その歓喜の渦の中、騎士はそつと姫に囁くのだ。

「貴女がその儚くも温かな笑顔をこの国に湛え続けるのなら、今は戦いの傷跡が残るこの国も、千の昼と千の夜を越えたその日に鮮やかに復興を遂げましょう。川は再び透きとおり、魚は太鼓を打ち鳴らしながら戻ってくる事でしょう。緑は再びもえあがり、鳥達は貴女を称える歌を声高らかに歌うでしょう。街のあちこちに市が立ち、軒を連ねた店の棚には豊かな品物で溢れかえる事でしょう。何よりも人々の表情には笑顔が満ちみちて、空気は喜び、大勢の笑い声で震えることでしょう。だがしかし、姫よ、そんな未来が例え私の目に映ることが無かったとしても、この命の続く限り、あなたが空に瞬く数多の星のように微笑み続けてくれる限り、私はありとあらゆる悲しみから、必ず貴女を守りましょう。願う事はただひとつ、金でも地位でも名誉でもありません。ただ、貴女の笑顔を誰よりも近くで見たいのです。姫よ、私の今までの全てを捧げ、今ここに、私は貴女のためだけの騎士として生きる事を誓いましょう。騎士としての誓いです。ただの一度しか口に出来ませぬから、心してお聞

きください姫よ。私は、貴女をこの世で唯一の、誰よりも貴い人として、この命燃え尽きるまで、守り続ける事を誓います。どんな困難にその道を阻まれ、どんな災厄にこの身をむしばれようと、この魂が空に還るまで、御身のそばに寄り添う事を誓います。姫よ、私は、貴女を愛しております。この世の生きとし生けるもので、誰よりも、ずっとずっと、永遠に、誰よりも、誰よりも強く。」
優しく語りかけると、騎士は姫に竜の血を分け与えるのだ。
竜の血には不思議な魔法がかかっており、騎士も、姫も、その美しい姿を永遠に保ち続け、幸せな国を築き、幸せに暮らしたのだという。

読み終えた母の目には、いつも涙が浮かんでいた。
自分はどうかっただろう。

泣いていた様な気もするし、目を輝かせていた様な気もする。
ただ確かな事は、心のうちに淡く燃える憧れが、いつしか自身の夢へとその姿を変え、その後の進むべき道を決めた事か。

例え、守るべき美しい姫がいなくとも。
悪役然とした、敵がいなくとも。

英雄に、なれなくとも。

一生を剣に誓い、誠実に生き抜く、ホーリーナイトになるのだと。

一刀のもとに切り裂いた男の喉から噴き出した血は、一定のリズムを持ってしてジェムドに降りかかってきた。

降りかかるその血しぶきは、漆黒の鎧に取り付いて尚赤い。

昨日から降り始めた勢いの強い雨に流されながら、その男の体を中心にして八方へと鮮やかな川を生み出した。

しかし、そんな光景には目もくれず、ジェムドは男が声にならない声をあげながら地面に倒れこむのを、冷めた目つきで見つめていた。

しばらく姿勢を維持した後、男が確実に息絶えたのを確信すると、それでも念のため、再度喉元に深々と剣を突き立てた。死んだはずの男の体が一度だけビクンと跳ね上がるが、何が起きるでもなく、再び物言わぬ屍へと化した。

ジェムドはさして感慨も沸かぬ表情で男の肩に足を乗せ、力を込めて剣を引き抜くと、一振りして大方の血を払い飛ばした。

その場でしゃがみ込み、足元の長い草を一掴み千切り、一心不乱に刀身につく血糊をふき取り始めた。

本当はやわらかい布でも欲しいところだな、と思い、一瞬、殺した男の衣服に目をやるが、結局無言のまま草で刀身を磨き続ける。

作業も半ば、といった所で、目標の追走に向かわせた部下の一人が息も絶えだえに走ってくる音が聞こえてきた。

ジェムドは、やはりさして感情のこもらない目を上げ、報告を聞くべく、刀身むき出しの剣を片手に億劫そうに立ち上がった。

「ジェムド様！」

ぜえぜえと大仰な息をはきながら、なんとか姿勢だけは直立を維持する律儀な新兵の顔には、抑えきれぬ興奮こそ見えているものの、翳りは見当たらない。

いい報告が聞けそうだ、と思いながら、ジェムドは部下に「ご苦労」と一言だけ声を掛けた。

「は！遅くなり申し訳ありませんっ。先程、逃げ出した目標を捕ら

え、現在馬車へと移動させております。また、途中行商人に目撃されましたので、その場で処理いたしました。現在東西へ向かわせた小隊へも伝令を走らせております。遅くとも半刻の内には出立できるかと。ただ目標が――」

「・・・。」

「・・・？」

自分の報告に反応を見せない上司を、その新兵は訝しげな目で見つめたが、ジェムドは特に気にした様子もなく虚空を見つめていた。

『行商人に目撃されましたので、その場で処理いたしました。』

その言葉を聞いた瞬間、不思議な感覚がジェムドを覆った。罪の無い一般人を、隊長の許可も無く殺害した事に対する憤りではなかった。

どうせ指示を仰がれたところで、ジェムドが出すそれだって変わらないものなのだ。

だから、むしろ適切な処置を独断で行えた事に対して賞賛する事はあっても、怒りが沸くような心根は持ち合わせていない。

そうゆう風に、鍛えられてきたのだ。

ただ、不思議な事に、そういえば、自分はいつからこうなのだろう、という思いに突然襲われていたのである。

幼い頃、正義を具現化したような絵本の騎士に憧れ、目指していた姿は決して今のような自分ではない。

齢12を超え、七の団の騎士の養成所に入る試験に合格したときも、

これから自分が守る街の人々を眺めては、誇りに胸がはちきれそうになったものだった。

本当に、いつからなのだろうか。

初めて人を殺したときからなのか。

10人目を、20人目を、100人目を、500人目を、1000人目を……。

50年前に終結した大戦の5年後に生まれたジエムドは、戦争らしい戦争こそ経験していなかったものの、7つある騎士団のうち、もっとも実働する機会の多い7の団に所属した事により、それこそ暴動の鎮圧から、暗殺まで、人の命を奪う計画の中に身をおかぬ日がほとんど無かったといって差し支えないほどであった。

初めは信仰で、人を殺した。

己が振るう剣は正義である事が前提であったから。

体を包む鎧は、憧れていたものとは正反対の漆黒に染められていたものの、自分の内面さえ、あの御伽噺の騎士であろうとすれば良いのだと思っていたから。

自らの行いは必ず幸せへと繋がるのだと、信じてやまなかった。

だけどある日、命じられるままに一人の、まだ10にも満たない少年を切り裂いた時に、信じていたものが見えなくなった。

そしてやがて命令に唯々諾々と従う習性を植えつけられ。

命じられるままに人を殺すようになった。

その時には、もう人を殺す事に対してさしたる感慨は沸かなくなっていたようにも思う。

押し殺していたの間違いかどうかは、定かではないが。

今は・・・

何の為に人を殺し続けているのだろうか？

「団長・・・？」

恐る恐るといった様子の部下の呼びかけの声で、ジェムドの意識はようやく引き戻された。

時間にしてどれくらいであったのだろうか。

時間が長引けば長引くだけ、奴らに見つかる可能性も大きくなる。直接見られてしまえば、今後の言い訳が非常にしづらくなってしまう事を考えると、ジェムド達にとって、今は時間が何よりも惜しい。

その中で物思いになど耽っている自分に、怒りを覚えると同時に、かなりの驚きを感じながら、ジェムドは部下に声を掛けた。

「ああ、いやすまん、・・・少し体調が優れないようだ。気を引き締めよう。」

「あ、いえ、・・・。」

普段、ジェムドが謝罪の言葉など口にしてるところ見た事が無い上に、どうみても風邪など引きそうにない印象を持つ上司の言葉に、兵士は素直に戸惑いを顔に表した。

「チェンツ側に目撃される前に急いで出発することしよう。今まで築きあげた関係を、私たちの首を謙讓してまで壊したくはないからな。すぐにいく。お前は先にいつている。二人よりは、一人で動

いたほうが目立たないだろう。」

「は、はいっ。」

ジェムドの言葉の内容に、その新兵はさつと顔から血の気を引かせると、まるでそこから逃げ出すかのような勢いで疾走を始めた。

・・・あれでは逆に目立つだろう、と眉をひそめたものの、ジェムドはその背中に声を掛けるでもなく、静かに自分も馬車へと移動し始めた。

なるほど、あの新兵が息せき切って走ってきたのはこのせいもあつてか。

しばらく歩みを進めたところで、再びジェムドは眉を僅かにひそめる事になった。

それにしても、口に布を押し込むなり、猿轡をかませるなり、静かにさせる方法などいくらでもあるだろうに。

なされるがままに騒がれている部下達の軽率さに頭痛をこらえながら、ジェムドは馬車の幌をくぐった。

「いやああああ！！近寄らないで！！！！近寄らないでっっ！！！」

「・・・なるほど。」

「だ、だんちょう!」

馬車の中では一番奥へと逃げ込み、喉もとへ剣を当て、大きく震えている少女を、それを取り囲むようにして四人の若い兵士が、困惑した表情を浮かべて遠巻きにしていた。

わざわざチェンツくんだりまで攫いに来た目標である、その手に収めておきながら死なせたとあっては、下手すると打ち首を免れない。万一隠し通せたとしても、多大な報奨を失い、重要な任務の責任を負わされその出世には暗雲が立ち込める。

しかも傷物にせずにつれて帰れとのご命令だ。

図らずとも、その少女は一番厄介な方法でもってこちらを敬遠する事に成功していた。

ジエムドは小さくため息をつきながら部下に尋ねた。

「剣を取られたのはだれだ・・・。」

「わたしです、団長。」

一人の精悍な顔つきの若者が、その顔を己を恥じているかのように真っ赤に硬直させ声をあげた。

「・・・おまえか。何をしているんだ一体・・・。」

「も、申し訳ございません。弁解のしようがございません。どのような罰でも受ける覚悟でございます。」

「・・・まあいい。それよりもこんなに囲んで・・・。余計に怖がらせてどうするのだ。お前達はもういいから外に出ている。」

「しかし・・・！」

「いいから、手間を取らせるな。」

有無を言わせぬジェムドの言葉に、部下達は一様に押し黙ったまま、俯いて幌をくぐって外へと出て行った。

ジェムドはため息と共にその後姿を見送ると、いまだ大仰に震える少女へと向き直り、再び小さく嘆息した。

「お嬢さん・・・、いや、フリル、殿、だったか？」

「——っ！」

少女の瞳が、恐怖のために一層大きく見開かれる。無理もない、すくなくとも自分の外見が、誰かを落ち着かせるような、柔らかく品の良いものであるとはこれっぽっちも思っていない。

それとも、名前を知られている事への驚きか？

今更それもあるまい、と思ひ直し、ジェムドは少女に話しかけた。

「この度の無礼の数々、許してくれとは言わないが、ひとまずその剣を下ろしてはもらえないだろうか。そのような震える手で喉もとに切っ先を突き立てられては、危なっかしくて見ていられない。貴女が本気で喉を突く気など毛頭ないにしても、な。」

少女の肩が一層激しく震えだす。

今までの恐怖とはまた少し違った、嘘がばれた子どものような瞳の戸惑いの色が浮かんだ。

「少なくとも我々はあなたに危害を加えるつもりはない。このような行為に出ていて信じてくれるとは思わないが。事実、私たちはフリル殿が喉に剣を突き立てるだけで、身動きも取れなくなってしまうのだよ。」

「……。」

「私たちはゴラン騎士団は七の団の者だ。聞いたことは、あるかな？」

僅かにフリルは首を左右へと振る。その姿にジェムドは、素直で純真な娘なのだと少々の驚きを覚えた。まさかこんなにも早く、会話が成立するとは思っていなかった。こんな形で対面しなければ、簡単に相手を信頼してしまう性格なのだろう。

だからこそ、彼らは人里から遠くはなれ、一生の殆どをその姿をかくすようにして、静かに暮らしているのだろう。その力を利用しようと目論んで近づく輩の事を、信じてしまわぬように。

「このたび、王の命により貴女をお迎えに参った。チャンツの輩が貴女の力に目をつけ、よからぬ企みごとにあなたを利用しようとしているとの報を受けたのだな。保護と言ったら聞こえも都合も良すぎるが、少なくとも命を受けた時にはそのように仰せつかっている。余計なお世話、といった所ではあるだろうが。」

「あの……。」

ジェムドの話が一区切りしたのを見計らって、フリルは消え入りそうな声をあげた。

「・・・なにかな？フリル殿。」

声をあげたものの、その先が上手く声にならないらしい、こみ上げる嗚咽を必死に堪えながら震えるフリルを、ジェムドは静かに見守った。

「グ、グロアー様は・・・どうされたのでしょうか・・・。」

「グロアー様？」

「私と一緒に居た方の名です。」

「ああ・・・グロアー、というのか、あの男。」

「・・・。」

「つかぬ事をお聞きますが、フリル殿。そのグロアーという方は、どのような御関係でいらっしゃるのだろう。」

どのような関係、と言われると、フリルは上手く当てはまる言葉を見つけれないようで、困惑した表情を浮かべた。

「・・・では、貴女にとって大事な方だったのですかな？」

「はい。」

間髪いれずにフリルが即答してくる。一瞬にしてその目に表現したい意思の光が灯った様子に、ジェムドは一瞬目を奪われながら、一方で内心大きく舌打ちをしていた。

情報が間違っている、その様な男の話など、聞いていない。恐らく

先程殺した男が、件の「グロアー」なのだろう。

帰った時に、役に立たないどころか作戦に支障を与えてきかねない情報を押し付けた諜報隊に怒鳴り込む算段をたてながら、ジェムドは不自然にならないようにフリルの目を見つめた。

この少女の目の前で無かった事が幸いした。

信じやすい性格も手伝って、だます事は容易だろう。

少女を逃がされた時には面倒な事になった、と思ったが、今はそのグロアーという男に感謝した。

「グロアー殿を、チェンツの手のものと私が勘違いしていたために、少々剣を交える事となった。多少の手傷を負わせる事になってしまったが、あれでは死ぬ事はまずないだろう。安心されると良い。」

そうグロアーが無表情のまま嘯くと、フリルの体全体の筋肉が一気に弛緩する様子が伝わってくる。

「貴女の大事な方だというのならば、今すぐにでも部下をやって保護する事にしよう。代わりといってはなんだが、まずは、その剣をこちらに渡していただけるかな？」

「……。」

僅かに逡巡した後、フリルは柄をこちらに向けて差し出してくる。

「結構、部下が手荒なまねをしたのだろうか？どこか痛むところはあるか？」

剣を受け取りながら、フリルを安心させるように穏やかな目つきでジェムドは尋ねた。

「い、いえ。大丈夫です。」

「そうか、チェンツの輩に見つかるわけにはいかないの、すぐに
出立する事になる。少々時間のかかる退屈なたびにはなと思うが、
辛抱してくれ。」

「グロアー様はどうするのですか？」

自分がこれからどうなるかは聞かないのだな、と思いながらも、そ
の方がやりやすく助かるが、と思い直してジェムドは不安げにた
ずねるフリルを、努めて安心させるように穏やかな声で答える。

「グロアー殿は私との戦いで多少の手傷を負っている。あなたの身
内だとわかっていなかったとはいえ、申し訳ないことをした。私の
部下が保護し、ケガの手当てをしよう。回復した後に、貴女の行く
事になるゴラン王の城へと正式に招待することになる。しばらく離
れる事になるが、命と引き換えにするわけにもいくまい？」

「・・・はい。」

良い子だ、と、昔母がよくやってくれたように少女の頭をやさしく
撫でると、ジェムドは背を向けて馬車から出て行った。

馬車の中には、フリル一人が取り残された。

「・・・グロアー様。」

フリルは目を閉じ、安堵と不安が混じったような表情で、呟いた。
荷馬車の幌にあたる雨の音が、出発をつげるジェムドの声を遠くへ
かき消そうとする。

その雨の音に、どうしようも無い不安を掻き立たせられながらフリ

ルは、ただただうなだれ、グローアの安否を案じることしかできなかった。

やがて、御者台に数人の人が乗り込む音が聞こえ、ゆるやかに、馬車が動き出した。

道中の三ヶ月間、ジェムドはよくフリルと言葉を交わした。この少女が何を考えているかまではよく分からなかったが、まるで懐いてでもいるかのように、ジェムドの姿を見つけると小走りにやってきて微笑みかけてくるのだ。

自分を攫った集団の長に向かって、悪い冗談でもあるまいに。その度にジェムドはなんとはなしに居心地の悪さを味わう事になった。

どうやらこの少女は自分の事を良い人かなにかと勘違いしているのかもしれない。

確かに初めて言葉を交わしたときに少女を落ち着かせたのは自分だ。道中でも気を使い、丁寧に扱うようにしている。

だがそれはあくまでも、この少女が王の所望するモノであるからだ。決して自分が礼節を重んじる性格なわけでも、少女の事を大事に思っているからでもない。

しかしそんなジェムドの内心とは裏腹に、日に日にフリルがジェム

ドと話そうとする機会が増え、ひと月を超える頃には同じ馬車に乗って欲しいとまで言い放ったのである。

部下の手前でいい恥を掻かされて、ジエムドには堪ったものではなかったが、しぶしぶ了承し、日がな一日フリルの暇つぶしの相手をさせられることになってしまった。

「では、ゴランの方々はパンがお嫌いで食べないのですか？」

「ああいや、そういう訳ではない……。要するに小麦よりも米を作る事のほうが、土地に合っているんだ。自然、実りの多いほうが食卓に並ぶ機会が多くなるだろう。」

「パンを食べないわけではないのですねえ。」

「そうだ……。」

「では、お米と一緒にはどういったものを食べるのですか？」

「……。あー、そうだな、ゴランは海に面しているからな、海産物の消費量が比較的多いかもしれん。」

「魚……。ユグなどですか？」

「ああ、いや、あれは川魚だからな、ゴランでは馴染みが薄い。」

「どういった魚が馴染み深いのですか？」

「……。あー、そうだな、ツブーワという魚はよく食べられるな。買っにしても安いし、非常に美味い。環境の変化に弱いので、水樽にいれて遠くの街へ売りに行く事もできんし、ゴラン付近

でしか食べれないなじみの深い魚と言ったら、ツブーワだろう。」

「ツブーワ……。初めて聞きました。」

「……。」

「それで、ツブーワはどの様にして食べるのですか??」

「……………」

旅を始めてからというものの、絶えずこんな感じでフリルはありとあらゆる事でジェムドを質問攻めにしてきた。

その知りたがりな所は、我慢強いと部下に評判のジェムドでさえ辟易させるほどであった。

知識欲が強すぎるな……。とジェムドは毎日ため息をつかせられる羽目になってしまった。それともドラゴンというのは、皆このようなものなのだろうか。

そうだとすれば、よくこれだけ知りたがりで里まで降りてきてしまわないものだ、と思うと同時に、このフリルとやらはまさにそれが原因で人と共に暮らす事になったのではないだろうな、と思わず考えてしまう。

ひょっとしたら、人間に関する知識を集めてどうにかするつもりなのかと勘ぐってみるが、目をキラキラさせてジェムドの話を聞くフリルを見ると、そんな事を考える自分のひねた性格に頭痛がしてくる。

正直な話、ジェムドには未だにこの少女がドラゴンだという実感が

いまいち沸かなかった。

もちろん、普段は膝上までのスカートの中に隠しこんでいる尻尾を見たときは驚愕した。

しかし、この少女、自身がドラゴンに関しての知識を殆ど持っていないのだ。ドラゴンは風が操れると聞いていたものの、私にはできません、と言い切られてしまった。隠しているのかとも思ったが、話してみた感じだと嘘を言っているようにも思えない。

確かに穏やかで優しい性格はしているようだが、そんなもの人間にだってごまんという。

じゃあドラゴンの姿に戻って見せれるかと聞いてみても、困惑した表情を浮かべるだけである。

本人は記憶の限りでこの姿以外には、なった記憶が無いようであった。

フリルの話によると、どうもグローアとやらが初めて会った時にはドラゴンそのものの形をしていたそうだが、今となってはその男に話を聞くことも叶わない。

本当に、この少女で間違いあるまいな。

無邪気に話をする少女を見つめながら、ジェムドは不安を覚えずにはいられなかった。

そんな不安を胸中に抱きながら、

チャンツを出発してから丁度100日目の夜遅く、

ジェムド達はゴランの王都へと到着した。

王の城へと到着し、謁見の間でフリルを御前に跪かせた時の王の喜び様は異常なものだった。

思いつきのように東方の領地を与える旨を与え、望むのならば騎士団総長の位すら与えると言い渡し、異例とも言える王との食事まで許された。

あのような姿をしている少女を目の前にして、疑問も持たずにいきなりこれだけの褒美を与える王の対応に、ジェムドは少なからず驚きを覚えた。

「ジェムド！本当にこの度は素晴らしい仕事をしてくれた。余は心からそなたに謝辞を述べねばならんな。」

豪勢な食事を前にし、ゴラン王がその顔に満面の笑みを湛えて何度目かの賞賛をジェムドに送る。

「ありがたいお言葉、私などの為には本当にもつたいのうございます。王の喜びの為に働かせて頂けた幸福に、私の方こそ礼を言わせて頂きたくて仕方ありません。」

「何を言うか！余が即位してからの40年、この度のそなたの働きこそが最も大きい喜びを余に与えてくれたのだ。宰相と子細示し合わせた上、十分な褒美を与えるからな、期待して待っているが良い。」

そういう王の顔は確かに嬉々としており、世辞を言っている訳では無さそうだった。

「は……。至上の喜びでございます。」

「それにしてもジェムドよ。そなたにならば話しても良いだろう、何故チェンツも余も、これほどまでにドラゴンに執心するかは、わかるか。」

「・・・いえ。」

「至極単純な事だよ。この世に生きるものであれば誰もが、そのドラゴンの姿の中に願う事だ。そうでなければいかん。余の様に人の上に立つような者も、薄汚い路地裏でもがく乞食どもも。誰もが一度は願い、手に入ればどれだけ良い事かと羨望する。」

「・・・。」

「しかしどうだ、チェンツの奴らは。あのドラゴンの本当に大事なところには目もくれず、馬の代わりにもその力を利用しようとしている。なるほど、確かに自在に風が扱われてしまつては戦においても有効な戦力となるう。船は一時もせずに敵国の奥深くまで侵入し、火を用いれば焼くも消すも思いのまま、我々などは突風で津波でも起こされてはたまつたものではないな。野戦でも自軍の矢は兵など飛び越え司令官へと突き刺さり、敵軍の矢はにらみ合う両軍の中ほども超えることは叶わないだろう。戦などしなくても、雲の流れでも操つて太陽の光を遮るか、逆に吹き飛ばし続けてしまえば作物の出来高さえも管理できてしまう。余の前に並べられる食事さえも、その内に見る事すら叶わなくなつてしまふかもしれないな。」

口を開けて王が愉快そうに笑う。

その、立場に相応しいとは到底思えない下卑た笑い方が、いやにジェムドの耳に張り付いた。

出来る事ならばさつさと家へと歸つて気楽な酒の一杯でも浴びたい

ところだった。が、ジェムドはじつと王の饒舌に耳を傾けるフリをしてその場を耐えた。

「ドラゴンの特徴は知っておるか？ 風を操る、人に姿を変える、稲妻を吐く、空を飛ぶ、というのは有名な話だ。心を読む、未来を予知する、人のそれを遥かにした知能を有する、成獣となれば身の丈30バレルは越すといわれる巨大な体に、剣も通らぬ硬い鱗、鉄すら切り裂くという鋭い爪と牙。・・・なんともまあ想像に難い生き物だな。余ですら実際に目にした事はこれまでなかった。」

顔を醜く歪めながら王が微笑する。

「しかしな、ドラゴンの最も尊いところはな、不死に最も近い存在であるという事だ。」

「・・・不死。」

「そうだ、不死。多くの権勢者が望み、捜し求めたものだ。過去にもドラゴンのその特徴に目をつけ、なんとかその秘密を探る事が出来ぬかと苦心した者は数え切れないだろう。だがな、そもそもが人目につくことを極端にさけるドラゴンだ。目にすることが出来ただけでも幸せであつたと言わなくてはならない。その生態も未だに謎だらけだ。不死の秘密に辿りつく前に息絶えるものが殆どであつた。」

「殆ど・・・とは・・・。」

「いたのだよ。ドラゴンの不死の秘密に行き着き、その人生を大幅に変えることに成功した者が。」

「……。」

王の言葉に、ジェムドは暫く考えを巡らせ、自分の記憶の中に当てはまるものをみつけると、ハッと息を呑んだ。

「お前も読んだ事はあるか？この国に昔から伝わる御伽噺になっているだろう。グルバドル王の物語だ。」

「まさか……実在したのですか……あの騎士は……。」

「そうだ、民草には、完全な創作物だと信じられているようだがな。あれは史実をもとに作られた話なのだよ。かのグルバドル王が何年生きてその権勢を誇ったと思うかね？」

「……。」

「実に300年だ。」

「300……。」

「そうだ、ただ話に出てくる姫に関する記述は今は殆ど残っていないので、なんとも言い難いがね。もちろんあの御伽噺自体には過大な脚色が付け加えられているのだろうが。それでも300年の長い時を生き続けた事は間違いが無さそうだ。かつて我が国を侵略しようとした国の記述など、おいそれと公開されてなどいないがな。それにグルバドル王が崩御してからの僅か50年足らずで、あの国も歯車がかみ合わなくなり、今から500年前に歴史からその姿を消している。」

「……。」

「余計な話が過ぎたな、どうだジェムドよ、実感がわいたかな？」

「・・・はっ。」

「お前は・・・本当に素晴らしい働きをしたのだよ。」

口の端を吊り上げる王の顔は、何故だかとても恐ろしげに見えた。どうしようもない不安と、目を輝かせて自分に纏わりついてくる純真な少女の笑顔が、心の中でグルグルと渦巻いて吐き気が催しそうだった。

その身分をこの一月で王直属の騎士団総団長へと昇進させ、その身辺警護の一切を引き受けることとなったジェムドは、しかし、日ごと寝不足とひどい頭痛にその身をやつすようになった。

夜毎に聞こえてくる悲鳴が徐々に自分の心を蝕んでいくのを感じる。

最初は、こんな事になるとは思ってもいなかった。

こんなに凄惨ではなかった。

僅かに血を抜いたりする事はあっても、その目的はあくまで王の不

死のためであつた。

しかし王は知ってしまった。気付いたのだ。

切っても、刺しても、どんなに傷つけても

少女の傷が、一瞬で消え去る事に。

行為は徐々にエスカレートした。

興味が、もとより不安定であつた王を完全に狂気へと駆り立てた。

最初は研究所に身をおいていた少女はいつしか王の部屋へと移され、豪奢な、皮肉にみちた檻に入れられた。

そして王は、少女の髪を引きちぎった。

爪をはぎ、指を潰し、切り落とした。

目を突いて、つぶした。

耳を素手で引きちぎった。

歯をへし折った。

喉から手を押し込み、体の内側をかき回した。

体中を文字通り切り刻んだ。

叩き潰した。

骨を折り続けた。

熱した油をその全身に浴びせた。

股から剣を串刺しにし、身動きできないように固定し、放置した。

壊した、

[illegible]

壊した壊した壊した壊した

壊し続けた。

しかし少女はその度に、最上の状態へと律儀に復活した。

昼間民にみせる温和な表情を、倒錯し、狂気に染まった笑みに塗り替えているであろう、王の凄惨な笑い声が自分の倫理をことごとく破壊していく。

剣をその竜の体へと貫通させこねくり回す際に、床なのか壁なのか、大理石にあたってはギィギィと神経をつんざく音を奏でる。

一つ息をするたびに、一秒が過ぎる毎に、少女の絶叫が響きわたる毎に、自分の精神が悲鳴を上げ、自傷行為に走るのを止められない。気付くと激しい歯軋りに歯はすりへり、どうしようもない痒みに掻き毟る頭からはバラバラと髪がまとめて抜け落ちる。

人は

死ぬべきだ

ゴラン王城から程なく離れた場末の安い酒場で、その日、ジェムドは一人の女と向かい合っていた。

ジェムドの表情は暗く翳り、二月ほど前に比べると驚くほどに頬がこけてしまっている。

酒を頼んだもののまったく口につけることが出来ず、米をブーロという動物の乳で煮込んだカユを食べている有様だった。

一方、女のほうは丈の長い外套に身をくるみ、頭だけはフードをは

ずしている。その顔を最大級に慄然とさせ頼杖をつき、足は、組んだまま軽快なリズムを刻んで上下させて暇つぶしに興じていた。一言でも声を掛けたら問答無用で襲い掛かってきそうな雰囲気をもし出している女の目の前には、既に空になった杯が6杯。店の者に下げて貰えば良さそうなものだが、女いわく「これはアタシの怒り度を表しているんだから勝手に下げんじゃねえ。」らしい。

「この通り、お願いする・・・。」

ジェムドは席から立ち上がると、両手両膝を地につけ、その女槍術使いに懇願した。

王の前ですら、片膝以上に自分を貶めた事はなかった。

「・・・。」

「到底ご恩に報いる事の出来ない、不躰な頼みごとだとはい百も承知している。ファネル殿の人生を狂わせる事に、貴女の人生を危険にさらす事になるであろう事も分かった上で、心よりお願い申し上げます。騎士団長としての地位も、剣士としての誇りも、全て関係なく、ただ一人の愚かであつまらない浅はかな男の、無礼な願いだ。貴女のために、あの子を託す事は考えられない。どうかお聞き入れ頂きたいつ・・・！」

「・・・。」

自身への怒りに震える声を響かせながら、ジェムドは額を地面に押し付けたただひたすらに言葉を吐き続けた。周りの視線も気に留めず、どよめく野次馬の嘲笑に心をざわめかせる事もなく。ただひたすらに、額から血が流れ出してもなお。

ファネルは貧乏ゆすりこそやめたものの、一層険しい表情でジェムドを睨みつけ、気持ちでも入れ替えるかのように、ものの数秒で7

杯目の杯を空にした。

「・・・プハッ、・・・なんだよおめえは。きもっちわりい。いきなり土下座してんじゃネエよアホかボケかクズめ！！しかもわけわかんねーんだよ！！！数年ぶりに便りがあつたと思つたら、いきなり一人女の子を引き受けてくれないだらうかじゃねえよボケカス！！その前に言う事あんだらうが！！いつもお美しいですファネル様！とか命令してくださいファネル様！とか愛していますファネル様！どうか私を下僕にしてください！とか色々あんだらうがつ！！」

「この通りだつ！！」

「・・・。」

「頼む・・・、ファネル殿・・・。」

「・・・。」

ジエムドの態度に氣勢を削がれたかのような顔をしながら、ファネルはため息を突きながら新しく届けられた杯をあおった。

「とにかく椅子にすわれよテメエはよお・・・。・・・それにしても、何年前だっけか最初にアンタとあつたのは。」

「・・・7年前だ。」

「・・・よく覚えてるなてめえ。・・・王の御前試合だつたな、良い試合だつた。」

「・・・ああ、まだあどけなさすら残る面影のファネル殿に、良い

ようにやられそうになったのを良く覚えてるよ。戦慄さえ覚える、
良い剣筋だった。」

「・・・てめえに負けたのはあれ一回だけだ。あとは全部アタシが
かってる。」

「そうだな、だが、ファネル殿があれ以来一度も御前試合には出場
しなくなってしまったのが、・・・少々寂しくはあった。」

「・・・っ！！てめえなあ！！どの口がそういうこと言う——っ
！！！！・・・くそっ！！」

ジェムドの言葉に、一瞬顔を怒りに紅潮させファネルは椅子から勢
いをつけて立ち上がったが、すぐに諦めたようなため息と共に座り
込んでしまった。

「・・・あの王の視線が気に入らなかったんだよ。あいつと目が合
った瞬間体中に鳥肌がたった。」

「・・・。」

「とりあえず、話すだけ話して見る。クズ野郎。」

「・・・かたじけない。」

フンと鼻を鳴らし、横を向くファネルの姿に、ジェムドは本当に久
しぶりに微笑む事が出来た。

バガン！と派手な音をたててジェムドの顔面に酒の入った杯が跳ねた。ちなみに9杯目である。

店内の客も何事かと振り返るが、それを投げた当の本人は気にする様子もなく、悪鬼のごとき形相でもって仁王立ちしている。

「てめえこらばけ！！！！死ぬ気だろう弱虫！！！！」

「返す言葉も無い。」

「逃げてんじゃねえぞガキ！！！！生き抜いてなんとかしろこの根性なし！！！！！！」

「・・・そう悠長な事もいつてられんのだ。」

「~~~~っ！！！！アタシより弱いくせにいきがってんじゃねえよボケ！！！！そんな事するくらいならアタシがひとつ走り行って首とつてきてやらあ！！！！」

「いくらなんでもそれは無理だろう・・・。」

「無理じゃない！！アタシに腕っ節で勝てるようなやつあこの世にいなえ！！！！」

「・・・というかな、それでは少女を逃がすときに守ってやれる人間がいなくなるだろう。私では・・・弱すぎる。捨て身の相手がきたら、3人程度で限界だろう。私の役割が達成されたとしても、もっと多くの数の追っ手がかかる。私が連れて逃げ出したら、それ以上に必死になって追いかけてくるのは目に見えている。」

「ぐはあああああ！！！情けなつつ！！！！キンモツ！！！！弱すぎ！！！！何ソレ悲痛な表情しちゃってさ！！！！嘘でも良
いから俺が守ってやるとかいつてみるっての！！！！！！テメエさては
去勢してんだろ！！？お！！？見せてみるコラ！！！！！！脱げ！！！！」

「俺も自分で言っていて情けなくなる。だが、僅かでも安全な策があるなら、今はそれにすがりたいんだよファネル殿。あの子を無事に逃がすためならば。」

「……。」

「俺も最近奴の前で繕えなくなってきたからな、正直なところ、大分疑われているかもしれない。おいそれと今の地位を変えるわけにもいくまいが、しかし今のように奴のそばに近づけなくなってしまう可能性は大いに考えられる。」

「……なんでだ？」

「……何についてだ。」

「何でそんなに、その少女とやらを助けようとすんだって聞いてんだよ。」

「……。」

「お前の柄じゃねえだろ、少なくともここ数年のお前にとってはな。」

「……耳が痛いな。」

「あほか、分かっててやってるくせによ。神妙な顔つきしやがって、陰気クセエ。少なくとも昔みた時はもーちよっと、キラキラしたムカつく目えしてたぜ。」

「・・・昔。」

「・・・そうさね、１０年くらいまえだわさ。」

「初めて会ったのは７年前じゃなかったのか・・・？」

「別に会っちゃいねえっての。例年通り盛況に行われている王の御前試合にテメエが出て、脳みそが筋肉で出来てる親父に連れられた、可憐な超絶美少女がその試合を見てただけだったの。」

「・・・１０年か。随分昔の事のようにだ。」

「・・・キモツ。浸るんじゃねえよタコ。」

「・・・その言い方はやめなさいファネル嬢。」

ジエムドの言葉に、僅かに頬を赤くしたファネルだったが、一瞬でもとの無然とした表情に戻る。届けられた１０杯目の酒を、今までとは違いチビチビとなめる様に飲みながらファネルは大きくため息をついた。

「・・・お前もな。」

「・・・。」

「未だに子供扱いしてんじゃねーよ。もうアタシだって、嫁に行くには遅すぎるくらいになった。お嬢さん扱いしてくんのは、近所の爺さんとテメエくらいだ。」

「……。」

「まあ槍振り回してる女なんて、どこの物好きが貰ってくれるんだって話だな。」

「……。」

酔いが回ってきたのか、ファネルが珍しく自分の話で饒舌になる。目はどこか夢げに揺れ、どこともなしに視線を漂わせる。

「それでも昔はお嫁さんに憧れてたんだぜー？自分でいつちやあれだが、器量だって悪くなかったはずだ。まあアタシん所はお家事情が特殊すぎたからな。逆に高望みって奴だ。あのクソ親父、無理やりアタシに野山駆けずり回らせやがってさ、教えてもらった事と言えば槍の使い方だとか罾の仕掛け方だとか、薬草の知識だとかよ、そんなんばっかだ。」

「……ファネル殿の御父上は素晴らしい方だった。今も俺の目指す理想の戦士だ。」

「フン、親としては失格だろあんな奴。まあ親父も本当は娘じゃなくて息子に育って欲しかったんだろうけどな。はやり病が気まぐれな奴だよ。上は皆殺したくせに、赤ん坊だったアタシだけ殺さなかった。」

「……。」

「槍の稽古のたびに、毎回毎回怪我して泣きじゃくったんだぜ。ひと月寝込むほどの大怪我した事だってあった。本気で困いの中に狼と放り込まれた事だって一度や二度じゃねえし。・・・アタシは槍なんて嫌いだった。」

「・・・。」

「本当は、他の子達と同じように母さんと一緒に料理を作って、繕いや刺繍を習って、洗濯と掃除を手伝って、家畜の世話をしながら、優しい夫に嫁いで暮らして見たかった。今でもな。」

「・・・。」

「・・・でもまあ手遅れだ。アタシに敵うやつがいなくなる位に槍は極めた。使わなくちゃもったいねーって感じか？」

大して面白くもなさそうに、ファネルは鼻で笑う。

何か迷いを振り切ったかのように、一気に酒をあおると満面の笑みを湛えてジェムドに向き直った。

「引き受けるぜその仕事。その代わり報酬は、そうだな、うーん・・・。」

「・・・ファネル殿。」

「あ、そうだ、出来るだけお前に苦しい条件のほうがいいよな！下手したらこの仕事で死んじゃうもんねアタシ！」

「・・・ファネル殿。」

「じゃあさ、お前、二人とも生き延びたらアタシを嫁に貰え！！ウハハ！！もうこれ最後にして槍折るわ！アタシは家でゴロゴロしてっからお前は蟻んこみたいに働いて稼いでこいよ！？」

「……。」

「家は……、まあどこでも良いか。ああ羊は飼おうぜ。夢なんだよ羊を追いかけて一日を過ごすのが。子どもはそうだな、まあお前がアタシにメロメロになる事は確定的だから、お前が枯れるまでは頑張っで生んでやるよ、うはは！！浮気すんじゃねえぞこの野郎！がはは！」

「ファネル殿！！」

ドン！と手に持っていた杯をテーブルに叩きつけ、ファネルは平手でジェムドの頬を張り倒した。

「ううううつつるせええええええええええ！！！！しんみり良いムードにするところだろうがこの木偶！！！！甘い言葉の一つでも吐いてみるカス！！！！！」

「……依頼は取り消す。本当にすまなかった。」

「ああ？何いってんだてめえ？夫つつーのは冗談だつつの。本気にすんなつつの。自意識過剰かつつの。そんなに嫌かコラア！！！」

「……俺は、どうも相当参っているらしい、視野が狭いとは昔から言われ続けてきたがな。今、ファネル殿のおかげで少し目を覚ましてもらった気分だ。」

「……。」

「……本当にすまない事をした。忘れてもらえるのなら、そうして欲しい。」

「……。」

「それから、ファネル殿。」

「……あんだよ。」

「貴女はもう、槍を折るべきだ。」

「……。」

「……それでは。そろそろ戻らねばいかん。……達者で。」

「……。」

ジェムドは静かにそう告げると、椅子から立ち上がり酒場の主人に多すぎる額の代金を支払ってから店を出て行った。

主人は恐縮していたみたいだが、ジェムドがファネルの方を見て何かしらを主人に告げる。

大方「もう少し飲ませてやってくれ」とでも言ったのだろう。それが余計にファネルの感情をいらつかせた。

「ほんとに、アタシも大概だけど……さ。はあ……。」

一人で呟いた言葉は、座る者のいなくなった向かいの空席に空しく

響き渡る。

酒がマジイ、とブツブツ文句を言いながら、ファネルはいつしか、そのまま突っ伏して寝てしまった。心配して様子を見に来た酒場の主人は、ファネルの目じりにうつすらと涙が浮かんでいるのを見ると、何も言わずに毛布を肩にかけ、その場から離れていった。

毎年恒例の、王の御前試合が執り行われるまで後七日。

街の警備に多くの兵が狩り出され、城内の警備が薄くなる日が、もう目前まで迫ってきていた。

腰に下げた剣を一閃のもとに抜き去り、走らせた斬撃は一瞬にして王の首を跳ね飛ばした。

少女は光を失った表情のまま、ただ呆然とその光景を見つめていた。

首が体から切り離されて尚、腐りきったその表情は不敵な笑みを失わない。

ジェムドが最も恐れていた事態、フリルのように首が一瞬にして復活するとでも信じ込んでいるのだらう。死に対して一切の恐怖を持たずに逝けるその姿は、ある意味幸せだと呼んでも差支えが無いのかもしれない。

しかし、その笑みに反して、王の首は鈍い音を立てて床に転がるま
まになった。

ジェムドは檻の鍵を急いで開けると、状況がよく把握出来ていない
ように虚ろな目をするフリルの肩を掴み、声を潜めて名前を呼ぶ。

この時点でようやくとフリルの目に恐怖の色が宿った。

今日の前にいるのが誰なのかも判然としないのだろう、無理も無い。
「フリル殿。お静かに、ジェムドです。助けが遅くなった。本当に
すまなかった。」

ジェムドの声に一瞬フリルの瞳に宿る恐怖の色がやわらぐ。

この少女は、これだけ極限の状態に置かれながらも自分の事を覚えて
いてくれたのだと思うと、えも言えぬ感情がジェムドの中で渦巻
いた。

しかし、ジェムドに何かを答えようとしたフリルの喉はかすれた音
しか鳴らさない。

その様子を見て、ジェムドは僅かに顔を歪めると、安心させるよ
うにフリルを抱きすくめ、背中をさすった。

体力の問題ではないはずだ、精神的なものだろう。

もしも体力も回復が容易ではないのなら、本当はファネルに護衛を
頼みたかった逃走を、一人でこなさなければならぬかもしれない
状況が非常に苦しいものになる。

「すぐに出るぞ。立てるか。」

コクリと僅かに頷くと、存外すっかりとした足取りでフリルは立ち
上がる。

その様子に、ドラゴンとはすごいものだたとジェムドは場違いにも
感心してしまった。

フリルをマントの中に隠しながら、廊下に人影が見当たらないのを確認すると、ジェムドは闇に紛れるようにして城内の移動を始めた。

王の部屋から外に出ると、長く、いくつもの曲がり角を経て進む廊下が続く。

そこを抜け出すと近衛兵の詰め所があり、出入りの際には身体検査を受けなければならない。

普通であれば王の元へ行くのには近衛兵が付き添わなければいけないのであるが、いまや一の団団長にして、近衛兵隊の総長であるジェムドは今回頑なに同行者を固辞していた。

今回の暗殺には好都合であったが、フリルの救出にはそうとも言い切れない。

数ヶ月前の突然の就任であったことが災いして、まだ隊の人心が掌握しきれていないのだ。

しかもここ最近のジェムドの急激な体調の変化は、周囲には強く印象に残ってしまっている。

そこにきて、今回の単独での王への訪問である。部下に疑いの目で見られる事は避けられなかった。

いくら隊長といえども、未だ人望が集まりきっていない状態では検査の顔パスなど到底許されないであろう。

今はマントで小柄なフリルを隠しているが、外へ出る際に受ける身体検査でその存在がばれる事は明白だった。

そこで、ジェムドはフリルをマントの中に隠し、何があっても声を立てたりせずに自分に掴まっているように強く言い聞かせると、片手に持っていた、王の血がべっとりとのこる剣で一思いに自分の片目を額から口に向けて大きく切り裂いた。

「ぐう……っ。」

マントの中でフリルが僅かに身をよじる。
何事があったのかと心配しているのだろう。

「大丈夫だ、静かにしているんだよ。」

マントの上からフリルの背中を優しく叩くと、ジェムドは廊下の入り口に向かってあらん限りの声で絶叫しながら走りこんだ。

「な、何事ですかっ!？」

その場で待機していた兵士達が顔面を血で染め、血相を変えて飛び込んできた兵隊長にぎょっとして振り向く。

「王が……!」

余計な説明はいらない。

彼らはいずれもが選りすぐりの戦士達だ。

ジェムドがそう一言告げるだけで、無言のまま一斉に王の部屋へと武器を抜き放って駆け出した。

「……兵隊長。ご無礼をお許しください。念のために剣をお預けください。」

その中でも特に頭が切れるとジェムドが評価していた部下三人が、ジェムドに疑いの目を向けたまま、剣の柄に手を当ててジリジリと迫ってくる。

「当然の警戒だ。待て、今渡そう。」

マントを捲り、その下に隠していた剣を一気に一番近くに居た兵士へと一閃させる。

警戒していた一流の使い手相手ではあったが、その兵士は一瞬、マントの下に隠れていたフリルに目を奪われ、それが命取りとなった。

「ジェムド隊長！！？」

声すらあげずに倒れこもつとする兵士を蹴り飛ばし、二人目を転倒させる。

混乱もせずに冷静に斬りかかって来た三人目の兵士の目の前にマントを投げ、その視界を奪うと、ジェムドはマントごと一気にその体を貫いた。

「ぎゃああああああ！！！」

「——っ！！！」

体にしがみついたままのフリルが声にならない悲鳴を上げる。

しかし、一向にその動きを緩めないまま、ジェムドは床でもんどりうっていた残りの一人に一気に剣をつきたてた。

ガタガタと震えるフリルの肩を強く抱き、足元に落ちた兵の剣を代わりに持ち上げ、再びジェムドは疾走しはじめる。

30メートル程走ると、そこにあつた部屋へと飛び込み、用意してあった縄梯子を手にし、窓を叩きわたると階下に向かって投げ下ろした。

「降りるぞ。」

フリルが怯えた目つきのまま、なんとか首を僅かに縦に動かす。

それを見るとジェムドは先に縄梯子へと手をかけ、一気に下へと降りた。

上を見上げると、不安定な足場に慣れないのか、おっかなびつくりといった様子でフリルがモタモタと降りてくる。

大丈夫だ、この程度は予想している。

焦る気持ちを表にはださず、いつフリルが手を滑らせて下に落ちてきても良いように気を張っておく。

フリルが城の裏手に降り立つとほぼ同時に、城の中が一気に騒がしくなる気配がジェムドに伝わってきた。

王の死と、ジェムドが近衛兵を殺した事が伝わり始めたのだろう。

どこかの団長が怒号を上げ、班を編成する指示が飛んでいる声が聞こえる。

時間がない、急がなくては。

ジェムドは城の裏手に流れる用水路に、フリルを背におぶったまま飛び込んだ。

このために今日は一切の重装備ははずしてきてある。

衣服に水がしみこみ、泳ぎ難さは並大抵のものではなかったが、海沿いの国ということもあってか、ゴランの兵士達は着衣での水泳訓練を嫌というほどに受けてきていた。

無理さえしなければ、移動にはそれほど苦労しない。

飛び込んで少し進んだところにある排水口へと静かに泳ぎを進める。しばらくいくと縦に、子ども通れぬ程の隙間でならんだ鉄格子が現れたが、事前に細工しておいた数本を、あっという間に抜き去るとジェムドはその中へと身を滑り込ませた。

鉄格子を一瞬で元に戻すと、そのまま無言で泳ぎを進める。

衣服に水がしみこむ重さに加え、子どもの体重とはいえ人一人を背負っているためか、息継ぎがあまり上手くできずに水を幾らか飲み込んで咳き込みそうになる。

背中の様子を伺うが、フリルは震えこそ収まらないものの静かにその身を背中に預けてきている。

本当に強い子だ、とジェムドは改めて舌を巻いた。

やがて、距離にして100メートル程泳ぎきったところで排水口の出口から、薄ぼんやりとした外の景色が見えるようになってきた。

「・・・がんばれ、もうちょつとだ。」

自分の言い聞かせるように、そうジェムドが呟く。

首筋にあたるフリルの吐息が異様に熱く感じられる。

大分体が冷えてきたのかもしれない。

排水口の出口までくると、入り口と同様に細工してあった鉄柵を数本抜き取り、その隙間から体をそとへとひねり出した。

その外は僅かな段差になっており、冷え切った体はなすすべも無くその下の水だまりに押し流される。

結構な量の水を飲み込んでしまうが、ジェムドはパニックに陥りもせずに浮上すると、落下の衝撃で離れてしまったフリルの脇から手を入れ、顔を水面にださせるよう気をつけながら岸へと向かって泳ぎだした。

「ケホッケホッ!!」

時折、フリルが苦しそうに咳き込む。

ジェムド同様、落ちたときの衝撃で水を飲み込んでしまったのだらう。

背中でもさすってやりたかったが生憎両手がふさがっていた。

その時ジェムドの耳に、何騎かの騎兵の足音が聞こえてきた。

「早い……。」

予想よりも早く追っ手が用水路に気付いたか。

いや、そういうわけでも無いのかも知れない。

聞こえてくる音は、雨に紛れてはいたが、まだ少し距離のあるその騎影は9騎と言ったところだ。

本命として搜索する班としては若干小規模のように思える。

恐らく城内の搜索にまだ本隊が残っているのだろう。

まだ城内の搜索をロクに行いもしない内に、万が一の可能性を考えて城の警備として不完全であつた用水路出口付近の搜索や、街道沿いの搜索と封鎖に小隊規模の班を割り振ったのだらう。

一の団の他に城内の警備に当たっていたのは、ジェムドと入れ替わりでその地位を落とされた元総団長である、現、二の団団長であつたはずだ。

その判断の早さには、さすが、といった感嘆の気持ちも浮かんでくるが、今回に限りその判断の早さがこちらにとって有利になった。

城内の探索に全力を割かれて、用水路の鉄柵の偽装を見抜かれてしまっていたら、それこそ小隊どころの追っ手では済まなかったはずだ。

ジェムドはフリルを一瞥すると、その体を排水口のすぐそばの茂みへと隠した。

本当ならば逃がすなり、もつと良い隠れ場所に隠してやりたいところだったが、チャンツへと続く森まではまだ距離がある。

今から走っても騎兵相手に逃げ切れるとは思えなかった。

しかも排水口の付近は非常に見晴らしが良い。

ジェムド自身も息を潜め、まだ確信を持っていない相手に奇襲をかけるほうが生き残る確立は高いように思われた。

ジェムドは排水口の裏手の影に身を潜め、息を殺して兵達が徐々に近づくのを待った。

「見当たるか!？」

「いえ!今から排水口を調べてみます!」

若い兵の緊張に張り詰めた声が聞こえてくる。

やがて、ジェムドのほぼ頭上に2騎程が馬を止め、慌しく下馬する音がガチャガチャと聞こえてきた。

大きな足音を立てて、兵二人が排水口付近へと近づく。

下が大きな水だまりになっている細い足場だ、二人できたものの、兵達は並んで歩く事も出来ずに、狭い通路で一列になったようだ。追う者の油断ではあるのだろうが、その不用意な足音で正確な間合いを測っていたジェムドは、自分の間合いに相手が入ったのを感じるや否や、一気に飛び出し先頭に立つ兵士に剣を抜く間も与えずに斬りかかった。

喉から鮮血を上げる兵士を蹴り飛ばし、後ろでなすすべも無く慌てる二人目の兵士ごと水の中へと落とす。

兵の悲鳴を聞きつけて、これもまた不用意に顔をのぞかせた部隊長

らしき男の顔面へと一気に剣を突き立て、そのままの勢いで蹴り飛ばして剣を抜き去る。

あっという間に二人が死亡し、一人が重装備のまま深い水だまりの中に落ちた。

その現状も把握しきれないまま、残りの兵達は口々に叫び声をあげる。

「いたぞ！！ジェムドだ！！」

「囲め！！」

慌てる兵たちが連携を取り始める前にジェムドは近くで剣を抜き放った兵の一人へと一気に間合いを詰め、防ごうとした盾ごと後ろへと蹴り飛ばす。

タイミングを合わせて背後から斬りかかって来た剣先を前へ飛んで前転でかわし、立ち上がる動作のまま倒れこんだ兵の喉下へと抜き身の短剣を突き刺す。

「あああああああああ！！！！！！」

喉元へ短剣が突き刺さったまま、言葉にならない悲鳴をあげて兵士が排水口の水だまりへと転げ落ちた。

その際に先程水の中へと落とした兵をもう一度巻き込んで水の中へと落としたようだった。

結構な衝撃でぶつかったはずだ、そう簡単に戦闘には復帰できまい。後、6人。

急いであたりを見回すと、混乱に手間取りながらも、兵士達はようやくジェムドをその全方向から包囲していた。

誰かが突出して切りかかる事も無く、ジリジリとその間合いを詰める。

よく訓練された動きだった。隙がまるで見つからない。だが、それでもジェムドは相手の出方を見ることなく、間髪いれずに一番近くの兵に斬りかかった。

「う、うわああああ!!」

返り血と、自身の顔面の傷によってさながら悪鬼のような形相で猛然と向かってくるジェムドに、実戦の独特の雰囲気によって極度に緊張していた兵は一気に混乱状態に陥る。

闇雲に剣を振り回すが、そもその力量がまったく違うのだ。一対一ではお話にならない。

易々とその剣先を上へと払われ、既に血糊で切れ味の落ちていた剣を無理やりに喉元へと刺し込まれる。後五人、いや、水の中へ落とした兵も含めると、あと6人。

しかし、そこまでであった。

無言でジェムドの背後から斬りかかった兵は、僅かにジェムドに身をよじられた事によって急所こそはずしたものの、その背中を衣服ごと一気に斬り裂いた。

「ぐっ!!」

身をよじった勢いで反転をしながら、今しがた刺し殺したばかりの兵の長剣をもぎ取り、背中から地面に倒れこむ。

一気に間合いを詰めようと迫ってきた兵の目の前に剣を突き立て、

束の間距離をとることに成功したものの、体の腱を切られたのだから、既に立ち上がる事も出来ないジエムドにはもう成す術が思いつかなかった。

視界がかすむ。

動脈まで届いたのであろう、傷から一気に血が失われていく感覚がジエムドを襲った。

兵達は深手を負わせた事を確信したのか、必要以上に斬りかかって来ない。

遠巻きに、ジエムドが息絶えるのを見守っている。

意識が切れそうになり、重みに耐え切れなくなった手から剣が滑り落ち、乾いた音を立てて転がった。

そのジエムドの様子を見ると、兵達は尚警戒を解かないまま、ゆっくりとジエムドのほうに近づいてきた。

ああ、終わった。

そうジエムドが思った瞬間、一つの影が一人の兵の後ろで翻ったかと思うと、一気にその兵の首が飛んだ。

何事かと一斉に剣を構える兵達の脇をすり抜け、ジエムドの頭の脇に仁王立ちすると、その影は不敵に笑い声をたてた。

「おいおいおい！ガハハ！なんだお前ら！ここにこおおおおんな良い女がいるってえのに寄ってたかってクソガキとむさいおっさんにご執心とは、変体趣味をお持ちの方の社交場かあここは！？しかも六人って！！ガキ相手じゃ壊れちゃう壊れちゃううううう！！うはは！！アタシならいけるけど！？チエンジする！！？はあ！！一人死んだから五人だった！！！！！！がはははははヨエエ！！おう！？おうおう！！よおおおおくぞ聞いて下さいました！！遠

くアルゼール山脈はさらに北！雪国フェストからはせ参じるは、超！絶！無敵！ていうか神です！！ファネル様とはアタシのことよ！！ぐあははは！！！！とりあえず！あれだ！5分以内に死ね！！！！鬼畜ども！！！！がはは！！！！」

「・・・オイオイ、格好良すぎるだろう。」

声になった自信はまったくなかったが、しかしその女槍術使いは、その表情をさらに吊り上げ凄惨にな笑みを浮かべる。

「てめえが格好悪すぎて、よりアタシが光って見えてんじゃねえの？うひ！」

「・・・そうかもしれん。」

死がすぐそこへと迫ってきたにも関わらず、ジェムドは笑みが零れ落ちるのを堪え切れなかった。

「なんだあおめえ！気持ちワルツ！！いい顔で笑うねえウヒイツ！！」

何故自然と頬が緩むのか、ジェムドにもはつきりとした事は分からなかった。

体温が失われていく以上に、体が震えるのかが分からなかった。

少女が助かるであろう可能性への安堵なのか、それとも、自らの意思でファネルがやってきてくれた事への喜びなのか、王を、国家を出し抜いてやったという爽快感なのか。

そのどれもが当てはまるようであり、まったく違う感情から湧き上がっているようにも思う。

・・・。

一瞬目を閉じ、その感覚を冷静に見つめてみたあと、力なくジェムドはつぶやいた。

「ああ・・・そうか。」

「あん？」

「・・・。」

幼い頃の自分が憧れた騎士の姿が、重さに耐え切れなくなって閉じた瞼の裏に浮かぶ。

憧れ、追い求め続けた騎士の姿が。

真っ白な鎧にその身を包み、誰よりも美しい姫を愛し、人生の全てを捧げる事を誓った純白の騎士。

人の為ではなく、まして姫の為でもなく、ただひたすらに、姫の美しい笑顔に惹かれ続けた純粹な騎士。

自分は騎士になることは叶わなかった。

なにものにも惹かれることなく、人を惹きつけるでもなく。

ただ唯々諸々と人を殺し続けた。

体を包む鎧は漆黒に塗り固められ、返り血で出来た染みがあちこちに装飾されている。

助けるべき愛する姫も無く。

信じるべき王もおらず。

悪を打ち滅ぼす程の力も持たず。

何より、何物にも捕らわれない望みを持つ事すらできなかった。

捧げるべき未来など持ちえるはずが無く、この命を差し出すことでは自分を保てなかった。

自分のそばに立ちそびえるこの女性に、自分の持ち得なかった全てを見たように。

羨望と、嫉妬と、悔恨と、本物を見た喜びに震えを留める事ができないのだ。

なんとも、格好悪い話ではないか。

最早笑い声すら立てる力も残っていないジェムドは

しかし、最後の力を振り絞ってファネルへと声を掛けた

「ファネル殿」

「ああ？」

「かたじけない」

本当に、かたじけない

「……。」

「その少女は――。」

「……。」

「――。」

「……心して引き受けた。この少女に、私の全てを捧げよう。だから――」

「――。」

「だから安らかに眠れ。騎士殿。」

フリル殿

貴女を守りきれぬ不甲斐なさも含め

この命をもってして

心よりお詫びを申し上げます

そして

貴女が

空に瞬く数多の星のように

静かに温かく

微笑み続ける日がやがて訪れる事を

誰よりも強く願っております

今この瞬間だけでも

誰よりも強く

どうか

どうかご無事で

フリル殿

——「無事で。」

ドラゴンの保護者、踊り子のシャルル？

「おいシャルル！そろそろボルドの領地だ、いい加減起きてシャ
ンとしてくれよ！」

騒がしいエポクの声で、浅く保っていた眠りから一気に現実へと引
き戻された。

まったく、どうしてエポクは一々ああ大きい声でがなり立てるのか
しら。そんなに大きな声で叫ばなくたって、耳無しじゃないんだか
ら聞こえてるわ。

そもそもエポクにはデリカシーってもんが無いのよ、デリカシーっ
てもんが。

乙女の眠りを妨げるだけでも万死に値するってーのに、不快なガラ
ガラ声で叫ぶもんだから、今私の眉間には確実に深いしわが刻まれ
ているはずだわ。この皺の落とし前をどう付けてくれるっていうの
かしら。

「うるさわねえ、エポク。そんなに大声で叫ばなくたってちゃんと
聞こえてるわよ。」

私の怒りが伝わったのか否かは定かではないけれど、馬車の幌の外
からはエポクのくぐもった笑い声が聞こえてくる。

「どうだかなあ！この間だって5度呼びかけたって起き上がってこ
なかったじゃないか。いい加減何かあったんじゃないかと心配した
んだぜ。まあ結局、腹まるだしのままグース力寝ているシャルルを
拝見するだけで済んだんだけどな。」

そう言われて思わず顔の温度が急上昇するのを感じる。

「馬鹿な事言わないでよね！そんな格好でなんか寝ていないわよ！
これでも寝相は良いほうなのよ！」

そう言い返したは良いが、どうやら馬車の御者台についているエポクを余計に笑わせる効果しかなかったようだ。

息も出来ないといったていで笑い転げる声が聞こえてくる。

ああもう、デリカシー無しのエポク！！

腹がたつたらありやしないわ！

今晚のエポクの夕飯には激辛のコーチの実を握りこぶしほど摩り下ろしてやる事にする。

そうよ、たまにはエポクだって乙女をからかったら罰が当たるんだって事を、身を持って体験して貰わなくっちゃいけないわねえ。

固い決意に身を震わせていると、馬車の幌が僅かに持ち上がり、精悍な顔つきをした年のころ40程の男性が顔を覗かせた。

「おいおい、元気が良いなあシャルル。」

「何が元気なもんですか！口口団長からも言ってやってよ。エポクみたいな女心の分からない奴にはその内天罰が下るぞって。」

「まあそう怒るんじゃないよシャルル。折角の綺麗な顔が台無しだぞ。」

あらやだ、口口団長ったら。

正直者なんだから。

「・・・そうねえ、あんな男の為に顔に皺を刻んでやる義理はない

わ。鏡を見るたびにエポクへの恨みつらみを思い返すだなんて冗談じゃないもの。それより口口団長は、何か用でもあるのかしら？」

「ああ、そろそろボルドの検問があるからな、シャルルにも外に出て欲しいと思ってな。毎度毎度見世物の様な真似をさせてすまないとは思うんだが・・・、如何せんそのほうが門兵受けが良いからな。」

「あら、そんなこと。お安い御用よ？ 私たちなんて、どうせ見世物が職業みたいなものじゃないの。今更気にするほどの事じゃないわ。」

「そうか。そう言つて貰えると助かるよシャルル。もう出るかい？ 手を貸そう。」

「ありがとう口口。世の中の男が皆・・・特にエポクがあなたのようだったらきつと女は涙の存在など知らないまま幸せに生きれるでしょうにねえ。」

「そう言つてもらえると光荣だよシャルル。でもまあ、エポクだつてあれはあれで良い男だと俺は思うがね。」

「それは買い被りね口口、人の話を盗み聞きして鼻を鳴らしているような男に魅力なんて欠片も感じないわよ。」

御者台の方でエポクがチラチラとこちらを盗み見ている様子が目に入ってくる。

鬱陶しいいたらありやしない。気になつてゐるんだつたら、いつまでも子どもみたいにからかってくるのやめてくれないかしら。

そのエポク様子を不思議そうに眺めながら、褐色の肌をしたスレン

ダーな少女がシャルルと口口の方へ近づいてきた。

「シャルル、エポクが挙動不審だわ。」

「あらステラ、おはよう。エポクがフラフラしてるのはいつもの事でしょう。それより昨日のお酒はもう抜けたのかしら？」

ステラは照れながら若干すねたように口を尖らせた。

「ちょっと頭痛が残ってるの、アランがあんなに調子よく注ぐものだから、慣れていないのに飲みすぎたわ。」

可哀そうに、後でアランの奴を引つ叩いといてあげなけりやいけないわ。

折角のお誕生日のパーティーで、お酒が初めてって言ってるのに調子にのって注ぎまくるもんだから・・・。

言われて見ればステラの目元にくまらしきものがうつすら見える。

どうして一座の男どもは一々子どもっぽいのかしら？

やっぱり学がないから？

いやあ、学がなくなつて素敵な男性は大勢いるけどねえ。

「あなたも御者台に出ろって言われたんでしょうけど、無理しないほうが良いんじゃないの？ねえ口口。」

「あーうん、そうだなあ。すまんなステラ、折角出てきてもらったのに悪いが、辛いんだつたら無理せず中で休んで構わないぞ。」

口口の言葉にステラはしばし考え込んだが、結局首を軽く左右にふって微笑んだ。

「良いわ、口口。別に芸を見せろって言われる訳でもないんだし。座って微笑むくらいだったらお安い御用よ。」

「そうか、すまねえなステラ。何せ女手がお前とシャルルしかないもんだから毎回無理させて申し訳ねえよ。ボルドについたらなんか美味しい物でも奢るさ。」

「わお、シャルル、ちゃんと聞いてたわよね。二人で連れてって貰いましょ。」

「あー……。安くて美味しい物、な？」

「なーによケチくさいわねえ……。団長のくせに。」

「そういうなよシャルル。団長っていつでも貧乏一座の貧乏団長や。」

「

あきれて見つめると口口は肩をすくめて見せた。

美味しいものねえ……。

ボルドだと、何が美味しかったかしらね？

まあ、過度な期待はせずに心待ちにしときましょ。

「はあ？通れねえってどういうことですかい？」

「どうもこうも、俺達だってよくわからねえよ。2週間くらい前から急に城から伝令が来たらしいんだ。人っ子一人通すんじゃないぞってな。おかげでこんな所に小さな規模の村みてえな状況が出来上がっちまっただ。」

口口が捕まえて話を聞いた商人風の男は少し疲れた表情でそう話した。

長い移動の旅もこの検問を超えれば後少し、という所まできて私たちは予想外の足止めをくらって立ち往生してしまっていた。

どうやらボルドが街道沿いの門を封鎖してしまっているらしい。何が原因でそんな事になってしまっているかは門兵自体もよく分かっていないらしく、門の前には事情を聞こうとする人々でこった返していた。

封鎖以降延々と待たされ続けている人の数はどんどん増えているようで、門から続く街道沿いには何かのお祭りでもあるのかと目を疑うほどの行列が出来てしまっている。

しかし、封鎖ねえ……。

戦争しているわけでもあるまいに？

「おっさんはどれくらいここに？」

エポクが戸惑いながら男に質問した。

「俺は一週間だな。そろそろ食料だってやばいんだ、俺が運んでるのは食料じゃねえしな。おたくたちはどうするんだね。見たところかなりの大所帯みたいだが。」

「そうですねえ、ちょっと考えてみますよ。折角ここまで来たんだし、引き返すのも癪でしょう。」

「そうか、お互い無事にボルドに入れると良いな。」

エポクとロロ、それに私とステラは御者台からその男に軽く手を振って別れを告げると、計ったように同じタイミングでため息をついた。

ロロとステラは良いとして、エポクと同じ行動をとってしまったので若干の後悔が押し寄せる・・・前にエポクの背中を蹴り飛ばしておいた。

それにしても本当に、封鎖なんてどういってもりかしらボルドの領主様は？

「仕方ねえな・・・。訳がわからんが、2〜3日くらいはここで様子を見てみるか。」

「せめて一週間くらい見た方が良いんじゃないですかね？・・・やめろシャルル、蹴るな。」

「馬鹿言わないでよねエポク。こんなとこに一週間もいたら体にこの匂いが染み付いちゃうわ。アンタと違ってこっちは踊り子なんだから、変なにおい振りまくわけにもいかないでしょ。」

検問からずらつと続く馬車やテントの群れは、実際、異常にくさい。近くに川が流れていないせいで色々と垂れ流しなんでしょうね、ええそりゃもう色々と。

よくこんなところで何週間も留まる気になるものねえ。

まあ馬鹿っていうくらいだから、エポクは動物なんで我慢できるんでしょうけど。

「あたしはアンタと違って人間なのよエポク。」

「・・・ひでえ。」

「・・・まあシャルルの言うとおりって訳じゃねえんだが、一週間となるとここに張り付かなきゃいけなくなる。南のダグラスに行くって選択肢も残しておきたいからな。2、3日我慢して、それでも門が開かねえっていうんなら諦めて移動しちまったほうが賢明だろう。食料が尽きるまでに門が開く保障なんてどこにもねえんだ。」

「・・・団長がそういうんなら俺は別に構わないですよ。ダグラスにだってどうせ行く予定だったんだ、ボルドを飛ばすのは惜しいけど、身動きできなくなるよりはずっとましですしね。」

「おつし、そうと決まったら他の奴らにも教えてやらなくちゃな。シャルルとステラはムートンのとこの馬車に教えにいつてやってくれ。俺とエポクはアラン達の所に話しにいくからよ。」

「ほいほい、了解。それじゃあいきましょ、ステラ。」

「うん。」

ステラに呼びかけると微笑みと共に御者台から降りてきて、脇に並んで歩き出す。

そんな一つの仕草を見るだけでも「ああ、良い子ねえステラって」
と思う。なんていうか、一挙手一投足に裏表が無く素直なのよ。
人を憎む事を知らないって言ったら良いのかしら。言動に嫌味が無いのよね。

旅芸人なんか孤児で拾われていなかったらあつという間に嫁の貰い手が現れそうね。

よく働くし、旦那も尽くして貰えるでしょうし。

まあ旅芸人やってても、どこぞの商家のお坊ちゃんに見初められちゃいそうだけど。

スタイル良いしね・・・ステラ・・・。

私のスタイルについてはノーコメントという事にしておくわ。

なんて事を考えて見つめていると、ステラが不思議そうな顔で尋ねてきた。

「どうしたのシャルル。私の顔、なんか変？」

「うーん、アナタの顔が変だったら、世の中の女は皆妖怪になってしまうかもしれないわね。」

「？」

「いえね、ステラは良い子だなーって思ってたのよ。」

隠すことでもあるまいと、自分の心情を素直に吐露してみた。

そう聞くとステラは「へ？」と目を丸くして小首を傾げる。

小動物っぽくて可愛い。私がやったら周りの温度が3度ほど下がりそうな行為だが、ステラがたると嫌味がないわね。

「変なの、シャルル。」

そういつてステラが柔らかく微笑む。私も「げへへ」と微笑み返しておいた。

ステラとの癒しの時間を存分に楽しもうと躍起になりながら歩いていたのに、それも無粋な野郎のしゃがれた声に打ち止めとなってしまった。どうしてこう、旅芸人の声っていちいちガラガラなのかしら、たまたま？

「おやお嬢様方、こんなむさくるしい場所へようこそ。お茶の一つも出せませんが、よろしければゆっくりくつろいで、そのついでにこの成り上がりの市と一向に進まない旗艦の状況を説明してくださいね。」

蛇みたくないやらしい目つきでムートンが声を掛けてくる。鬱陶しいたあたりやしない。うるさい天に召される助べえ爺、とは言わずにステラの真似をして柔らかく微笑みかけて見た。効果の程は個人差があるらしい。訝しげな目つきで睨まれた。

「そうカリカリしないでよねムーミン。」

「ムーミンじゃねえ、ムートンだ。」

「どっちでも良いじゃない？」

「よくねえ、あほか。」

「失礼ね、貴女だつて禿じゃない。」

「全然関係ねえだろう、それにこれは俺の意思じゃネエんだよ。」

「そうね、カミの意味ね。」

「上手い事いつてんじゃねえし大ごとにするんじゃねえよ。で、何だつてこんなとこで止まつてんだ。」

「うーん、なんか検問が封鎖されてるらしいのよねえ。」

「はあ？封鎖？戦争してるわけでもないのか？なんでだよ。」

「知らないわよそんな事。暗殺事件でも起きたんじゃないの。」

「物騒な事言うんじゃないよ。そんな事が発覚したらそれこそ戦争もんだろ。俺達だってそんな事になったら稼ぎもクソもあつたもんじゃねえ。慰安とかふざけた名目で前線送りにされちまうかもしれねえぞ。」

「物騒な事言ってるのはどっちかしらねえ。それよりも口口団長が2・3日様子見て駄目ならダグラスを目標そうって言ってたわよ。普段サボってる道具の手入れでもして過ごせばあつという間なんじゃない？」

「うるせえなあ。それにしても随分せっかちな話だな、うちの台所事情はそんなに逼迫してんのかい。」

「こんなところじゃ補給の目安もたたないもの。英断と賞賛するべきではなくて？」

「まあ仕方がねえか……。口口の方には分かったと伝えといてくれや。ご高説どおり道具の手入れでも三人でやらせてもらうぜ。」

「あらそれはどうも、アーヴオとロイにもよろしくいって。」

「あいよ。」

あー、めんどくさ。

どうしてムートンっていつもけんか腰な訳？

あ、それは私も同じか？

歩き出してから横を見るとステラが押し黙っているの、頬をみよ

「んと伸ばしてやったら「ふがが」と身悶えたので、調子に乗って頬をこねくり回していたらステラも負けじと手を伸ばしてこっこの頬をパンこねよろしく弄り出した。

「しゅてらひゃんはら、むーとんほはへはほほなひいはね〜」

「はひひっへふはふえんふえんははんはひ。」

面倒くさくなってお互い手をはなした。

「それよりステラ、数日滞在するってんなら丁度良いわ。薬草がそろそろ切れ始めているのよ。買うのも馬鹿らしいし、採りに行くから一緒に行かない？」

「いくいくっ!!」

あらまあ目をキラキラさせちゃって、可愛いこと。

普段から自由時間なんてないに等しいものねえ。プライバシーとかもだけど。

お出かけでワクワクする気持ちは私もよくわかるわよステラ。いつそそのまま何処かに消えちゃいましょうか、ねえ。

「それじゃ口口には私が言っておくわ。ステラは悪いんだけど馬車の中から籠を探してきてくれる。下げる奴じゃなくて背負う奴ね。」

「了解了解〜。」

ブーンという音が聞こえてきそうな勢いでステラが走り出す。うんうん、一々ウイ奴じゃ。

さて私も、口口がどこをほっつき歩いてるんだか知らないけれど、

探さないかね。

結局口口を見つけるのに手間取ってしまい、その日に薬草採りに出かけられなかった私たちは翌朝早くになってようやくボルド付近の森へと足を踏み入れていた。

ボルドの森には豊富な種類の薬草が自生していることで有名なのよね。

そりやもう至るところにこれでもかって言う位生え放題なもんだから、ステラと二人してウホホーイとかヒョフヘーとか言いながら薬草集めにいそしむ事数時間、ソレを目にした瞬間に、ステラの動きがビタリと止まった。

「シャルル……。」

ステラがその可愛い瞳を目一杯に開いて驚きの声をあげた。

「……。」

ボルドの森の奥へと足を伸ばして一時間程の所でステラが最初にその異変に気付いた。

森の木の中で、そこだけ小さな嵐にでも襲われているかのように風に吹きさらされている木があったのだ。

ステラに呼ばれてその光景を見たときにはさすがに私も目を疑った。旅芸人という放浪の職業柄も手伝って、世の中の不思議には色々にご縁があったほうだとは思っていたけど、これはあまりにも不自然な現象ね。

すわボルドの新兵器かとも思ったけど、んなわけないじゃない。

ステラと二人で呆然とその現象を見つめていた矢先、風以外の何かに揺らされて木の枝がミシリとたわんだ。

「なんだろう、シャルル。」

ステラも目ざとくその異変に気付いたようで、不安げな視線をこちらへと送ってくる。

「なんだろうねえ……。」

この場合私が確認しにいくべきなのかしら。いやねえ。

ほっという帰るといふ手もあるにはあるけれど、なんか夢見が悪くなりそうねこれ。

「……。なんか投げてみる？」

ステラにそう聞くと、困ったように眉を僅かに潜ませている。

ステラも気にはなっているみたいね。

……。ふむ。

「ステラ、その木になっている実を一つとつてもらえる？」

「あれ……。？うん。」

近くに生えている木の上の方になっている握りこぶし程の実を指差すと、ステラは僅かに頷いてすぐに木に取り付き、スルスルと登り始める。

あっという間に木の上へとたどり着いたステラは器用に足だけで体を支えて実をもいだ、さすが軽業師。

「シャルル、ほおるよ。」

ふわりと投げられた実をなんとかキャッチする。

登った時と同じように器用に降りてくるステラを待ち、念のため少し下がっておくように声をかける。

改めて件の木のほうへ目をやると、先程から若干風の勢いが増しているように見えた。

根元の草や木自体の葉が、時折鋭利な刃物で切りつけられたように切れるのは、その場の風全体が動いているのではなくて糸のように細い束で風が動いているせいかしら。

この実じゃ若干心許ないわねえ……。

「シャルル、丁度良い大きさの石とか探してこようか。」

ステラも同じように、実が切られたり吹き飛ばされたりしてしまうのが不安に思ったのだろうか、そう声を掛けてくる。

「うーん、いいわ、とりあえずこれ投げて見ましょう。」

駄目だったらまた考えればいいしね。

投擲の方は問題ないわ。

本業は踊り子だけど、あんな旅団にいるおかげで軽業の練習にもちよこつと手を出しているし。

「ままよ！」

勢い良く投げた実は、狙ったとおりに先程枝が不自然にしまった辺りめがけて弧を描いて飛んでいく。

運よく風にも邪魔されずに目標へと投げ込まれた実は、なにか柔らかいものに当たったような音がして地面へと落ちてきた。

オマケを連れて。

「・・・。」

いやあねえ、なによあれ、と昔住んでいた村のお母様方の反応を真似てみるが上手くいかずに無言になってしまった。不覚ね。

木の実と一緒に豪快な音をたてて落ちてきたのは、一人の少女だった。

背中から派手に落ちてきた少女は、うわーやっちゃった、とこちらが思うよりも早く即座に立ち上がって鋭い目つきで睨んできた。

最初に目を引いたのはその目。異様に赤い。

およそ人間では考えられないような、燃え上がるような目だった。見ていると思わず引き込まれそうで、目線がはずせなくなる。

一方でその髪は海を連想してしまうほどに深い青をしており、腰の長さほどもで伸ばされている。

着ている衣服とは対照的に驚くほど美しい髪で、周りの風に僅かに揺れている様がとても美しかった。

それにしても、ほんとに何ナノかしらねあの子。

見た目は綺麗な顔してるけど・・・年の頃は17、8つてどこかしら。

異常よねえ。

まあ髪の色が異様に青かったり、血まみれのマントに身を包んでい

たり、ドロドロだったり獣じみた唸り声をあげてるのは、断腸の思いで柵にあげるとしても、ねえ。

「シャルル・・・あの子の周りだけ風、おかしいよね。」

「・・・そうねえ。」

その少女（？）の周りだけ確かに風の吹き具合が異常だった。もちろん私は風の動きが目に見えるような特殊なスキルは持ち合わせていないですけど。

試して見たくはないけど、近づいたらかまいたちよろしく肌が細切れにでもなりそうな勢いね、あの風。

周りの草花や枯れ枝なんかも巻きこんで、時折その子の腕や顔をかすめ、盛大に碎け散っている。

不思議と外傷はないようだったが、こびりついた血の痕が生々しい。こちらを睨みつける目つきもなかなか威勢がよろしい。

何か恥ずかしい所でもみつけれちゃったのかしらね、私たち。それにしても――

「シャルルッ！」

慌てたようにステラが腕を掴んできて、やっと自分が吸いつけられるように少女へと足を踏み出していた事に気付いた。

「・・・あら？」

「あらじゃないよっ！危ないってシャルル！」

ステラが珍しくその声をひきつらせて引き戻そうとしてくれる。いや、私も近づこうなんて思ったわけじゃないんだけどねえ、と言

つたらステラはどんな表情をするのだろうか。
やってみたい。

やってみたいとは思うんだけど、何故か私の視線はその少女から一向にはずす事が出来なかった。

眼球がスースーしてきて、どうやら瞬きさえも忘れているらしい事に気付くが、一瞬たりともその少女から目を離してはいけなくな気がする。

ステラが手に込める力を一層強くするのが感じられる。
もしかしたら私、また近づこうとしてんのかしらねえ。

「おかしいわねえ。」

「ちょっと！シャルルッ！」

呼ばれているような気がする。

眼前にたたずみこちらを凝視するその子は口を真一文字に結んで微動だにしないというのに。

慰めてあげなければいけないという衝動が心の奥からどんどん溢れ出てきて、止められない。

不思議な感覚。

ステラにとられたのとは反対側の腕を少女へとかざす。

気付けばもう、触れられそうな位置にまで私はその少女へと近づいていた。

ステラが何か叫んでいるような気がするけれど、上手く聞き取れない。

ものすごく遠くにステラがいるみたい。

そういえば、風がやんでる。

燃えるような瞳の色をしていた少女の目はいつの間にかその色を髪と同じ青色に変え、今は私の目を見つめて不安げに揺れている。

「・・・怖かったんだね。」

考えもしないのに言葉が自然と口から飛び出してきた。
頬にあたる自然の風がいやに冷たい気がする。ひよっとしたら私は
涙でも流しているのかしら。訳がわからないわねえ。

私のかけた言葉に少女は肩をピクリと震わせると、ふいに一筋涙を
流した。

「・・・。」

少女の頭へと腕を回し、優しく抱きしめる。

ステラはどうやら手を離れたみたいね。懸命だわ。得体の知れない
ものに、近づくもんじゃない。

「ヒクッ・・・。」

苦しげに少女が嗚咽を堪える音が聞こえてくる。

どうしようもなく愛おしい。

少女の悲しみが自分に流れ込んでくるようで、私の心まで切り裂か
れるように悲しくて仕方がなくなる。

悲しくて悲しくて、思わず少女を抱きしめる腕に力がこもる。

「ううううっ・・・!」

「・・・泣いてしまいなさいな。」

出来る限り優しく声を出して、少女の頭を柔らかく撫で付けると、
その少女は堰を切ったように大声を上げて泣き出した。

可哀想な子。

なんて可哀想な子。

よく分からないけれど、この子がどうしようもなく可哀想な事だけが異常な現実感と共に心の中を支配した。

私なんかの腕の中でよければ、好きなだけお泣きなさいな。泣きつかれたら、そのまま眠っておしまいなさいな。

私が、守ってあげるから。

必ず。

絶対に、離れないで守ってあげる。

——ヨシン、グロアー、私もドラゴンを見つけた。

ドラゴンの保護者・踊り子のシャルル？

よく口口に「25なんてまだまだ子どもだ」って言われるわ。

それ自体には反論はないのよ。実際私もまだまだ感情が抑えきれない事だっただいし。

実のところお酒だっであんまり美味しいとは思わないし。

私は甘いもののほうがよっぽど好きね、可愛いものだって大好き。よく言われるのが「物事を傾いた姿勢で見すぎだ」ですって。

一辺倒な見方しか出来ないのは思考が凝り固まってる証拠じゃない、って言うの「そうゆう事考えるのが若い証拠だろ」だっさ。

正直、上から目線にうんざり。

「お前も子どもを生めば考えが変わってくるのがわかるよ」って言われても、ねえ？

ていうかそもそも、女は子どもを産んでこそ幸せみたいな考え方はどうかと思うんだけど。

たしかに自分が老いて、ふと気付いたときに伴侶も子どもも居ないって言うのは少し寂しい気もするわ。

でも、私がそうだったように子どもはいつまでも親に縋って生きていく訳じゃないし、伴侶にだって先立たれたら余計に寂しくなるじゃないと思うのは私だけ？

こんな事いったらまた口口に笑われるような気がするんだけどねえ。ああ嫌だわ、私も歳をとったら今の口口みたいな事を言うようになるのかしら。

傾いたものの見方が歳相応のものだといわれるとグウの音も出ない。実際自分が時期によって色々なモノの見方が変わってきているのは事実だし、今の自分が最上のものだとは到底思えないけれど。

どんな時期だっって私の頭の中なんて凝り固まっている。

体が動く前に考えて、体まで固めてしまう。

幼さに縛られて考えが固まっていたり、若さに縛られて考えが固まっていたり、経験に縛られて考えが固まっていたり。

よく人に相談する方だとは思うけど、相談するときには自分の中でとうに結論が出てしまっている事の方が多かったりもする。

恋はしてみたいと思う、自分が人に合わせて生きていけるかが興味ある。

子どもも育ててみたいと思う、自分から生まれた子が、自分とは違う思考を持って育っていく姿に自己嫌悪を擦り付けてみたいし。

だから、まあ、ようするに、私は私の事だけで精一杯。許容量オーバー寸前。

誰かの為に生きていく事も出来ないし、誰かと共に生きていく事も出来ない。

そう思っていた。

「一人、女の子拾ってきた。」

というとき口は目を点にして「はあ？」と素っ頓狂な声をあげた。まあ普通そうよねえ。

「飼い犬が一匹増えると我が家の台所事情は悲鳴どころじゃすまないかしら？」

そう聞くと呆気にとられた表情のまま、口は私の斜め後ろに、静かに俯いて立つ青い髪の少女にちらりと視線を送った。

最初に目が留まったのはやはりその青い髪のように、ものめずらしげにジロジロと眺めている。

俯いているので顔がよく見えないのか、少しかがんで蟹股になって

いるのが格好悪い。

「いや、まあ食い扶持が一人増えるくらいはどうって事ないんだけどな。何なんだ？この子。」

不思議そうに少女と私の間に視線を行ったり来たりさせながら口口が疑問を口にする。

まあ普通訳わかんないわよね。

ていうか、私も訳わかんないけど。

「一人で森に居たのよ。なに聞いてもウンともスンとも言わないから無理やり引つ張ってきちゃった。逃げ出しはしないから別に嫌がつてはいないんでしょ。こっちの声は聞こえてるみたいだし。」

そう言いながら少女の方へと目をやると、青い髪の少女はさらに下に俯いてしまった。

「ほらね」と口口の方を向くと、口口も「訳がわからん」といった様子で肩をすくめる。

「そのまま森の中にほうっておくのも不安だし、家族は近くにいるのかって聞いても首を振るばかりだしねえ。」

「んなこと言ったってシャルル、家出かもしれないねえじゃねえか。」

「このなりで？」

少女の姿を指差すと口口は「うーむ」と唸って首を捻った。

血が染みこんでどす黒く変色したマント、肩から提げた粗末な鞆には僅かにズビの実が入っているのみだった。まずいのよねアレ、滋養には良いけど。マントの下に着ている服は、布自体はそこそこのものを使っているようだったが、擦り切れ、泥にまみれ、見るも無残に色あせている。

後生大事そうに抱えている柄を半分ほどに折った槍はボロボロに刃こぼれを起こしていて、正直護身用として役に立つ代物とも思えなかった。

家出というよりは逃げ出してきたって感じがしっくり来るわね。ただ、身にまとう物からは想像できないほどに艶のある少女の肌だけが浮き出したような違和感を与えてくる。ちぐはぐな子ねえ。

「どうみても訳ありって感じだよな、なんか厄介ごとでも運んできそうじゃねえか？」

不安げに眉をよせてロロが言う。ごもつとも。

「もし駄目だつて言うなら、私が一人で面倒見るわ。女の子一人くらい食べさせていけるもの。」

「馬鹿いうなよ、ウチで唯一の踊り子に逃げられたらそれこそ厄介だ。」

私の見切り発車の考えをロロが面食らったように慌てて制止をかけてくる。

馬鹿という言葉に、少し少女の肩が動く、・・・罵倒する言葉はお嫌い？

「それなら暫く私の馬車において面倒みてあげても良いでしょう？もし本当に厄介な事が起こったなら、その時は私が責任をもって一人で面倒をみることにするわ。」

頑なに少女の保護を訴えてみる。ロロはそんな私をみて大げさにため息をついたけど気にしない。正直私だつて訳が分からない。なんでこんなに気になるのだろう。ロロは厄介ごとが嫌いだけど、そんな事いったら私のほうがよっぽど厄介ごとは御免こうむりたい。

ロロはなんだかんだいっても訳ありの人を平気で拾うものね。だから好きよロロ。

無反応な少女の様子にじれるわけでもなく、憤るでもなく静かにロロが少女の事を見つめる。あまりにも無視を決め込んでいるもんだから私のほうが不安になってきちゃうじゃない、と既に保護者面している自分を盛大にアピールしてみる。

なんで私はこんなにこの子に保護欲を掻き立てられてるんだろう？例え人ではないにしろ、人でないからこそ？

だからこそこの少女がどのような言葉にどう反応するかがわからない。

自分を罵倒する目的で吐かれた言葉に、怒るのではなく、はっとした表情で目を見開く少女の事が、まだよく分からない。

「シャルルがそこまで言うなら、まあ、無下には断らんが。・・・
本当に良いのか？ いっそのこと門兵にでも――。」「おおっとお。

「だから、「門兵」と聞いた途端に脱兎のごとく駆け出した少女の反応は特に驚くべきものではなかった。反応したのは「門」かしら？
「兵」かしら？

大げさすぎるんじゃない？と思うほどの悲鳴を突如上げながら走り出す姿に違和感を感じ得ない。

少女が身を反転させる瞬間に彼女のマントのフードがクルンとなったので、これ幸いと引つ掴む。

あんまり勢い良く駆け出そうとするものだから、少々力がこもりすぎてしまった。

踊り子だからって腕力ないと思わないで頂戴よね！と一人で憤ってみる。

これでもスタイルを保つために毎日の鍛錬は欠かしていないのよ？
まあ筋肉つけすぎちゃっても駄目ですけど、ウフフ。あ、どうでもよかったわよね。

マントの前を閉じていたのが災いして少女の首が派手にしまったように、
「グエ」と少女が蛙のつぶれた時のような声をあげた。ごめんあそばせ。

次に来たのが激しい抵抗。なんとかマントに伸びる私の手を振りほどこうと、そりやもう威勢の良い魚のごとくビッチャンビッチャンと音のしそうな勢いで両腕をしっちゃんかめっちゃんか振り回す。

呆氣にとられてポカンとする口口も、まあ仕方ないとは思いつつ手伝って欲しいなあなんて。

振り回された腕が派手に顔面にヒットして一瞬目の前がスパークするが、まあ気にしない事にする。この程度、口口のため息と同じくらしいの破壊力しかないわよ私にとっては。

腕を掴もうとするが錯乱状態にあるためか異様なスピードでグルングルンしていて上手くないかない。

仕方がないので「えいやっ」と少女の本体ごと抱きしめた。というより固めた。

「安心しなさい、誰にも引き渡さない。」

門兵という言葉を使わないように注意して少女に声をかける。

少女の体の震えが納まらない。

「大丈夫だから。安心しなさい、馬鹿な事しないで。」

ビクン、と少女の肩が跳ねる。

思ったとおり「馬鹿」って言葉に反応する。でも、拒絶じゃない、変なの。

「アホ。」と言うと再びビクン、なんなのかしらホント。ドM？

「ボケ」ビビビクン、・・・おもしろい。

とりあえず咄嗟に他の罵倒する言葉が浮かんでこないのので「バカ」「アホ」「ボケ」でローテーションに組み込んで熾烈な連投。そのたびに少女の体の震えが小さくなっていく。

そんな様子を呆気にとられて見つめる口口の目は点を通りこして遂にブラックホールが発生した。

「・・・落ち着いた？」

荒い息遣いが未だに収まらない少女に、抱きしめたまま声を掛ける。全身全霊をもつてして優しく髪を撫でている手が僅かに沈み、少女が肯定の意思を表してきた事を伝える。小さな可憐な声で「うん」と呟くのも聞こえてくる。

「素敵な声ね。可愛いわ。」そう囁くと頷いた時よりも一層顔を下に俯かせる。照れてんのかしら。カーワイイ。

無言で少女の震えが納まるまで髪を撫で続ける。サラサラとしたビロードのような髪が手に心地良い。

「口口。」

「・・・。」

「私が面倒を見るわ。迷惑は掛けないう様に気をつける。」

「・・・ああ。」

渋々といった様子で口口が声を絞り出すように発する。

大好きよ、口口。

それじゃまあ。

いらっしやいお姫様。

旅芸人の一座、ドルドロスへようこそ。

素敵な夢に魅せられて、今宵一晚限りと無粋なことはいわず、どうぞ居座ってくださいな。

ボルドの検問で時間を潰す事3日、結局私たちはその門を通る事が出来ずに未練たらたらでダグラスへと向けて出発する事を決めた。いつまでたっても門が開放される目安が立たなかったし、一人食い扶持が増えたせいもあって（まあ増えなくても一緒だと思うけど）食料に若干の不安が出てきたからだ。

馬車の荒い縦揺れに気分を害されながら進む事2週間、今日も私は飽きもせずに青い髪の少女で遊ぶ。

青い髪の少女はフリルという名前らしい。

最初はひよっとしたらこの子言葉が喋れないんじゃないかとも思ったが、しつこく喋りかけているうちに徐々に話をしてくれるようになった。肌の色は残念ながら最初から健康そのものだったけれど、そうね、私の服を貸したから少し見た目も華やいだ。

着替えさせ、長くて鬱陶しそうに見えた髪を後ろで一つにまとめ上げてあげたフリルの姿を見た時の男達の反応は、分かりやすく面白かった、もとい呆れた。

相変わらずに血まみれのマントを抱きしめて離さなくて困ったけど、不衛生だから洗わせて欲しいと頼んでなんとか洗濯する事に成功し

た。

血の痕が落ちるのを嫌がっているみたいだったけれど、誰の血なのかしらね。

まあ、知りたいけどそつとしておきましょう。

団の皆には身寄りが無いみたいだから私が引き取る事にしたと紹介した。

もとより訳ありの人材の方が多いい面子なのも手伝って、特に誰も疑問を口にすることなく受け入れてくれたみたいだ。

心配していたフリルを包むように吹く風は、結局最初に出会ったときから一度も吹いていない。なんだったのかしらねあれ。

まあ大方予想つくけど。

一緒に馬車に乗っても最初は隅の方にうずくまって膝を抱えるばかりだったけど、私がボーっと馬車の外を見ていると外の様子が気になって亀のように首を伸ばしてくるようになった。

視線を感じて振り向くとパツと下を向いてしまいが、バレバレなので名前を呼んでやったら暫く迷った後に恐る恐る近寄ってきて、私の隣に座って外の様子を眺めるようになった。

山あいのボルドに比べ、広大な平原にあるダグラス領は植物や動物の生態がまったく違い、フリルの興味を強く惹いたようだ。

気になるものがあると上目遣いにこちらを見つめてくる仕草が奥ゆかしくて可愛らしい。

衝動に任せて押し倒す、ことはなかったがニヘラーと私の頬を緩ませてあれやこれやと解説してやった。

夜になるとエポクに演奏をさせて、フリルに踊りを見せてやる。

口をあけて見とれる姿に少し私も気分がよくなった。

一晩中踊り明かすのも骨が折れるので、一座の皆をけしたてて軽業やパントマイムをフリル一人の為に披露させると、これまた感極まった様子でパチパチと拍手するもんだから、フリルはあつという間に一座の人気者になってしまった。

特にお気に入りなのがステラのジャグリングのようで、朝方に一人

で起きだしてはこっそりとそこいらに落ちているものを拾って練習していた。

ゴトンゴトンおとすもんだからこっそりやっている意味があまりなさそうだったけれど。

日に日に、僅かではあったものの明るい表情を見せるようになるフリルを見ていると私も嬉しくなった。

だから、話すのなら今のうちだと思う。
切り出しにくくないうちに。

「あなた、ドラゴンなんでしょう？」って。

ガターン！と派手な音を立てて手元にもっていた皿を弾き飛ばしてフリルが立ち上がった。

それまで並んで座っていた所から一気に馬車の奥まで跳躍し、私に正対する。

怯える視線は逃げ場でも探しているのか右に左に、上に下にと忙しい。

無理よ無理無理。

馬車の入り口は私が完全に体で塞いでいるし、これを見越して3日前からエポクに幌の修理をさせて穴ぼこ一つ見当たらない。

宝物のボロボロの槍だって今は私の手に握られている。

「困ったわねえ、逃げ場ないわねえ。」

微笑んだつもりだったのだが禍々しかったのだろうか、嫌に怯えてフリルが身を縮こまらせる。おかしいわね？それでも陛下の寵愛を受けかけた微笑よ？

「風を操る、怒ると目の色が赤くなる、タテガミの色は青、空を飛び、人語を操る。」

「・・・。」

「人の姿をとる、知能は人間のそれを遥かに凌駕するものの、心が優しくて騙し合いには向かない。」

「……。」

「心を読むなんて噂もあるけど、私が読んだ文献にはそれに対しては疑問が書いてあったわ。知能が高すぎる故に人の心の動きを先読みしてしまうだけじゃないかって。」

「……。」

スツとフリルが身を屈める。

それと同時に片手を前に突き出して制止を掛けた。タイミングを狂わされたようにフリルが戸惑った表情を浮かべる。

「めったな事じゃ怒らないらしいから、目が赤くなっているドラゴンは余計に貴重なんですってね。まあ仲間意識が強すぎて自分以外の仲間が傷つくとあつという間に目が赤くなるらしいから、二匹以上でいるところに遭遇すれば案外簡単にみれるとも書いてあったけど。」

逃げる事はあきらめたのかフリルが背筋を伸ばして立ち上がり、鋭い目つきをこちらに送ってくる。うーん……ゾクゾクするわあ。

「成長の仕方がまた面白いのよ。奇跡、というか魔法か、それを使うたびに成長するんですってね。変な話よね。普通使ったら減ってくもんじゃないのかしら？まあそれは良いにしても、大分魔法の効果は限定的みたいね。私が読んだ感じだと無意識に発動してしまう事も多いみたいよ？なんでもその体に流れる血自体が魔法の産物みたいなものなんですって。たしかに人間だって血の流れを自分の意識でコントロールできる人なんていないものね、いるんなら見てみたいもんだわ。」

「……なにが言いたいんですか？」

だんまりをやめてポツリとフリルが呟く。本当に良い声ねえ。何度聞いても飽きないわ。

「なにが？別に、何も？」

私が首を振ると訝しげな目をしてフリルがわけが分からないといっ

た表情をとる。

「ただ話したいだけよ。フリル。私は、大事に思う相手と上辺で付き合うのが嫌いな。あなたに何か求めている訳じゃないわ。」

「・・・。」

「フリル、私があなたと初めて会ったときになにを感じたか分かる？ アナタが愛おしくて仕方がなかった。不思議よね。会った事もないのに。」

「・・・。」

「この感覚もあなたの魔法なのかしら？」

「・・・さあ。」

「まあわかんないわよね。あなたに触れた瞬間に信じられないくらい悲しみに襲われたわ。今でもそう、あなたの髪を撫でるとあなたが悲しんでいるのか、喜んでいるのかが手に取るようにわかる。

感情が流れ込んでくるみたいなの。逆にあなたの方には私の感情が流れていくのかしら？ あなたの髪に触れる私はそりやもうハッピーな気分で満ち満ちているんだけれども？」

フリルとフリルが首を左右にふる。

やっぱり心は読めないのかしらね。

「そうだわ、ねえ、フリル。私はあなたが何なのか知っているから、私の事もアナタに話してあげる。おあいこってやつね。どう？ 聞いてみたい？」

「・・・うん。」

なにがどうおあいこなのか突っ込まれなくて助かるわ。素直な子ね。

「じゃあまずはその警戒した様子を解いて座ってちょうだいな。何もとって食おうってんじゃないんだからね。」

「・・・うん。」

若干警戒した様子のまま、それでもフリルは大人しくその場にしゃがみ込んだ。

確かに騙しあいには向かなさそうねえ、素直すぎるわよ。

いや別に騙すつもりないけど。

「さて、どこから話し始めたもんかしらね……。」

「……シャルルさんはどこで生まれたんですか？」

「あら、最初からを御所望？まあ良いけど。そうね、私は――」

私はダグラスの貧民街に生まれた。

育った家は本当に汚い所だったわ。

木張りの床はところどころ腐って穴だらけだったし、布団はいつもすえた臭いがした。

両親の記憶はなくて、覚えているのは私を養ってくれた孤児院の院長さん。

孤児院といってもそんなに本格的なものではなかったけどね。

偶々天涯孤独だった院長さんが、……デイルっていうんだけど、そのデイルが偶然に出会った孤児を三人だけ養ってくれていたの。

私はその内の一人。

変な人でねえ、何でも拾ってきちゃうのよ、私たちとか、それに本が大好きだった。

生活費を切り詰めてでも本を買ってくるもんだから、私たち三人はいつもお腹がぺこぺこだったのよ。

それでも自分の分を切り詰めて、私たちに必要な食事は取らせてくれてたんだけどね。

貧民街と言ってもそこに住んでいる人が全員乞食ってわけじゃないのよ？

当たり前だけど。

デイルは工場街の工場まで働きに出て、陶器を焼く仕事をしていたの。そんなに大きな工場って訳じゃなくて結構生活は大変だったみたい。……まあ当たり前よね、一人分の給料で子どもとはいえ、余分なのを3人も養っているんだもの。ダグラスでは孤児を養っているところの程度の家具や補助金が支給されるんだけど、雀の涙ほどのものしか貰えていなかったみたいだし。

毎日出されるのは乾いたパンと野菜が少しだけ入った味の薄いスープ。

今思えばもう少し料理の内容は何かあったんじゃないかって思うんだけどね、料理が出来ないもんだから適当に済ませてたんでしょ。

ほんと、よく赤ん坊の私たちを育てられたもんだわ。

そうそう、ディールはドラゴンが大好きだったのよ。

彼の自慢の蔵書の中にはそれこそ国中から集められてるんじゃないかしらって程の量のドラゴンに関する資料が山のようにあったわ。

私はそんなにドラゴンに対しては興味が無かったんだけどね、ディールったら夕食のたびにドラゴンの話をするのよ。おかげで私もドラゴンにはちよつと博識なの。

一度も見た事なんか無いのに、彼は完全にドラゴンに魅せられていた。

出版するお金も無いのに自分でも羊皮紙に・・・高いのよ？羊皮紙、貧乏人にとっては、・・・何枚も何枚もドラゴンに関する自分の考察を書き留めていたわ。

いつもぼやいていたのは、ダグラスの城の図書館に保管されているドラゴンの本をなんとか読めないかって事ね。

一週間に一度は口にしていたから、相当未練があっただんでしょねえ。

あと彼はよく絵を描いたわ、ドラゴンの絵。

四本の足はトカゲが大きくなったようにごつごつしていて、大きな翼を持っているの。

頭から前足の肩にかけて生えるタテガミは空とも海とも違う不思議な青色をしていたわ。

すごく怖い見た目をしているのに、とても優しい目をしているし、何故か綺麗なの。不思議だった。

真っ白な雪原に佇むドラゴン、青い空を飛ぶドラゴン、緑の草原に眠るドラゴン、灰色の山を歩くドラゴン。

子どもながらに見ていて引き込まれるような絵だったわ。

まるで魔法でもかかっているかのようにね。

私は勿論だけれど、ディールだってドラゴンを見た事がないでしよう、不思議に思つて「これがドラゴンの姿なの？」って聞くとディールは微笑んで「シャルルも想像してご覧？ドラゴンはその姿で君の前に現れてくれるから」って言つてたわ。

・・・どういふことかしらね。

それでまあ、本人もドラゴンのように、・・・絵に描いたように優しい人だったけれど、三人の孤児の中で一番小さかった私が16になるのを待つて、ドラゴンを探しに行つたきり消息が分からなくなつてしまつたわ。

・・・

本当は私たちがいなければとうにドラゴン探しの旅に出ていたんでしようけどねえ。

生活が苦しいのに、道端に捨てられていた私や他の二人の事が見過ごせなかったディールはずっと、辛抱強く私たちが全員大人になつてくれるのを待つてくれたんだわ。

・・・

私が生まれた時の話なんてこの程度。

毎日が同じ事の繰り返しで、小さい頃は生きていくのに精一杯だったわ。

それでも誰にも拾つてもらえずに寒さや飢えで死んでいく子どもたちよりは、ずっと幸せだったんだけどねえ。

私は7つの頃から近所に住んでいた元踊り子のおばさんに踊りの稽古を受けていたの。当然稽古代なんて払えないから、その家の家事を手伝う事でチャラにしてもらつていたわ。

最初は全然興味が無かつただけだね・・・案外無感動な子どもだったのかしら？

ディールが何か手に職を付けておかなければ生きていけないと思つて、無理に頼んで稽古を付け始めてもらつたみたい。本当に頭が上

がらないわよ彼には。

初めはデイルは勉強を教えようとしてくれたみたいんだけどね、私がちつとも真剣にやらないから「結局この子は体を動かす事のほうが好きなんだろっ」って考えたみたいよ。

大正解ね。

段々と体が成長してきて稽古の内容も厳しくなってくると、面白くなってきた。覚えては良いほうだったと誇りに思ってるのよ。

すぐに踊りなら誰にも負けない自信がついたわ。

それで、最初は街頭で踊りだしたんだけど。まあ皆みてくれやしないわね。

不審者を見る目つきでチラツと見られておしまい。

来る日も来る日も、その頃は酒場でウェイターの仕事させてもらってたんだけど、その仕事が終わった後に街の噴水の近くで踊ってたわ。

本当に誰も見てくれないから、傍から見たら頭のネジが外れちゃってる子みたいに見えたかもしれないわね。

踊る場所の前においておいた、おひねり用の木箱がやけに空しくなつたわ。

なんとなく自分が卑しい人間なんじゃないかって思えてね。

こんな恥までかいて、どうして私は踊っているんだろう。

生きている意味なんて無いんじゃないかって。

よく酒場でもからかわれたのよ、あんな恥ずかしい真似をしているなんてどうかしてるんじゃないかってね。

悔しかったわねえ……。お陰で段々と踊らなくなっちゃった。

まあ最後には我慢できなくなって馬鹿にしてきたおっさんに、頭から酒を浴びせかけてクビになっちゃったけど、ウェイター。

それで、18の時にね、デイルもいなくなっちゃうし酒場はクビになっちゃうし、一緒に育ったあと二人も訳わかんない事わめいて国を飛び出しちゃったしで、寂しくてね。

正直最初は売春宿にでも入ってやろうかと思つたわ。

ダグラスには多いのよ、売春宿。

色んな子が、それこそ部屋の隅のゴミみたいに吹き溜まってね、なんかみんなカリカリしてた。私も今あんな顔してるんだらうなっと思うと、それも良いかなってね。

でも少しだけまだ踊りに未練があつたのよねえ、最後に一回だけ、ダグラスのお祭りでステージの上に立つてみようと思つたの。

誰でも踊れるのよ、申し込みの期限さえちゃんと守ればね。

いつも音楽なんかない場所で踊っていたから、楽団が演奏してくれる流行の曲に合わせて踊るのは自信が無かつたんだけど、新鮮で気分がよくてね、結構上手く踊れたのよ。

それでまあその時に大きな、それこそ貴族がメインで使うような酒場に余興の踊り子としてスカウトされたの。

嬉しかったわあ。

やっぱり私すごいじゃんってね。

それこそ踊りだす程喜んだわ。

んでもうそこからはとんとん拍子。

嘘みたいは何もかも順調だった。

酒場でもあつという間に人気が出てステージの中央で踊れるようになった。

噂が広がってお城での祭事にも呼ばれてね、気付いたら城付の踊り子になってたわ。

もうその頃は世界中が輝いて見えた。私が踊ると男達は色めきたつたし、高い給金も貰えて小さい頃の貧しさが霞む程の贅沢もしたの。温かい食事、柔らかな毛布、優しく微笑みかけてくれる大勢の男、踊られずにはいられない城付の楽士隊の奏でる素敵な音楽。

笑顔以外には表情を忘れてしまいそうな毎日だった。

・・・

だから、調子に乗つたのね。

王の前で踊ったときに、色目を使つたのよ私。

効果はてきめんだったわ。

その日の内に王から声がかかって、私は世界を手に入れたような気になった。

きつと私は王妃になれるわってね。

王に愛されて、王子や姫を産んで幸せに暮らす生活が目に見えなくなった。

世界一、私はラッキーだって。

馬鹿よねえほんと、お話にもならないわ。

宮廷の陰謀にも、一位の王妃の怒りを買う事も無く。

ただスタボロにされて捨てられた。

飽きられてね。

貧民街での踊り子を抱いたなんてスキャンダルにもならないけれど、当時の宰相が律儀な奴でね。きつちり私の事を殺しに来てくれた。

夜中に家に突然下つ端のごろつきが押しかけてきてね、・・・レデイの寝室に断りも無く入ってくる奴なんて常識はずれも良い所よねえ。

まあ私、当時はそりやもうキラッキラしてたから、殺す前に最後の喜びでも分けてくれようとしたんでしょねえ。無礼な男が考えそうなもんだわ、いらねえつつうの。

見事に、あつという間に鎧をはずしてくれたもんだから、隙を見て刺し殺したの。

案外あつけないわね、人間って、ていうか殺人って。

癖になりそうとかいう心理は正直理解が難しいけど。

でもまあ、一応人並みにパニックしちゃった私は着の身着のままその家から逃げ出した。

もう門の位置も分からなくなる位の錯乱状態だね。

自分がどこにいるかも分からなくなっていくくらい街中を走り回っていた。

裸足でね、寒かったし痛いしで泣きそうだった、・・・泣いていたかもしれないけどねえ。

・・・

ふと気付いたら貧民街まで来てたのよ。

そうしたらなんだか急にディールの家が見たくなってね。

思い立ったら居ても立ってもいられなくて全力で走って向かったわ。なにがそこにあるわけでも、誰が居るわけでもなかったんだけどね。家自体は残ってたのよ。私が稼いだお金で買い取ってあったから。別に意味は・・・無いと思うけど、きまぐれでかしらね？

手入れもロクにされていなかった家はどんな風になっているのかが不安だったけど、意外に元のままで驚いたわ。家ってすごいよね。私はすごい変わっちゃってたのに、ちっとも変わらないんですもの。家に入ったら急に体が動かなくなっちゃってね、膝が震えちゃって座り込んでしまった。

情けなくて悲しくて、涙が本当に止まらなくて困ったわ。

このまま一生分の涙が流れちゃうんじゃないかってくらい。

正直なにがそんなに悲しかったのか今でもよく分からないんだけどね。

なんなのかしらねホント。

んでまあ、悲劇のヒロインよろしくその場で泣き崩れる事数時間、急に辺りが明るくなって驚いたのよ。

追ってきた三下の松明かとも思ってた瞬間慌てただけだし、月明かりだった。

・・・綺麗だったわ。

不思議よね、どうして月明かりってあんなに白いのかしら。夢みたいだった。

思わず泣くのも忘れて月に見惚れてた。

信じられないくらい綺麗で、静かで。

私とはまるで正反対。

あんな風に綺麗に生きられたらどんなに素敵だろうって、今でも思うわ。

あんな風に静かに空に浮かんで輝いていられたらってね。

そうしてボーっと月を眺めてたら不意にディールが言ってた言葉を思い出したの。

「ドラゴンは君の望んだ姿で現れるんだよ」ってね。

ああこれがドラゴンかあって。

頭のネジはずれちゃってるわよねえ。月でしょ、どうみても。

でも思い出したら懐かしくてね。

震える膝に鞭打って、ディールの絵を家中探したの。

どこにしまったのか思い出せなくて、それがまた悲しくて悲しくてどうしようもなくて、ぐずり始めた時にやっと一枚だけディールの絵を見つける事ができた。

今まで見た事がなかった絵だった。

絵を包む油紙に『シャルルへ』って一言だけ書いてあって、破ったら、月をバックに空を飛ぶドラゴンが描かれていた。
綺麗だった。

本物の月とはまた違って、凜とした月だね。

空を飛ぶドラゴンは気持ち良さそうに舞っているの。

自由を謳歌するように。

目は僅かに閉じられて、口をあけてまるで歌っているようだった。
本当に綺麗だった。

私はなんだかその絵だけで救われたような気になったわ。

ディールがその絵をいつ描いたのか、なにを思ってたか、なんで私に直接見せてくれなかったのかも分からないけれど、でもディールが私をこういう風に見てくれたんだってというのが痛いほど伝わってきて。

・・・。

ドラゴンは私からディールを奪ってしまったけれど、代わりに私に希望をくれた。

「泣いてないで、笑えよ」って絵の中のドラゴンは私に言っているみたいだった。

「座ってないで、踊れよ」って。

私は、ドラゴンに救われた。
だからさ、フリル。
だから――

「だから、私があなを救ってあげる。」

立ち上がり、膝を抱えて声を殺して泣きじゃくるフリルのそばに近寄る。

不思議な、甘い匂いがする。

優しく頭を撫でてやると、僅かに顔を上げて私の事を見上げてきた。ひどい顔してるわねえ。

・・・指先から、シャルルの心が伝わってくる。

「なんであなたが泣くのよ。」

出来るだけ優しく微笑もうと心がけて、出来るだけ優しい声を出すように心がけて。

「・・・怖いのか？」

「・・・うん。」

「どうして？」

「・・・わからない。」

フリルは首を振ってまた顔を俯かせてしまう。

この子が泣くと、月に雲がかかったみたいねえ。

「怖くないわ。・・・私がずっとそばに居てあげる。」

そういうと、余計にフリルは嗚咽をあげて泣き始めた。

「でも・・・、私はシャルルさんを幸せにしてあげられない。」

「馬鹿ねえ・・・。」

「・・・。」

「私だって、誰も幸せになんかしてあげた事が無いのに。」

「・・・私は不幸にするもの。」

「・・・。」

「・・・私が好きだった人達は、皆不幸になったもの。」

「・・・その人達は。」

「・・・。」

「その人達は、あなたを恨んでいるの？」

「・・・わからない。」

「その人達は、あなたと出会ったことを後悔しているの？」

「・・・わからない。」

うううう、と顔中をくしゃくしゃに歪めて、とうとうフリルは声をあげて泣き出した。

髪に触れる。

フリルの心に、切り裂かれそうな痛みが胸の中を駆け巡る。

悲しくて悲しくてしょうがなくて、フリルを優しく抱きしめた。

「大丈夫よフリル。」

きつくきつく抱きしめる。

ドラゴンが空から落っこちてしまわないように。

「あなたが、こんなに愛しているんですもの。」

大丈夫。

血の痕が薄くなったマントでフリルの体を包んであげる。

ドラゴンが凍え死んでしまわないように。守ってもらえるように。

ありがとうねマントの主人、後は私が引き継ぐわ。

だから

「絶対に、大丈夫、・・・フランドール。」

彼女の心の中にあつた、真名を見つけた。

魔法の言葉。

フランドール。

ドラゴンのフリル・幕間、ダグラス、ディール邸にて

目を開くと、満天の星空が広がっていた。

何度目の光景だろう。見慣れたその星空に、ああ、また私は夢を見ているんだなと感じた。

はく息が僅かに月明かりを受けて白く光るのが綺麗で、無性に泣きたくなってくる。

静かな山の森に、時折寝ぼけた鳥がさえずる声が聞こえてくる。

風にサラサラと草木が揺らされて奏でる音が耳に心地いい。

どうして、音がするのに余計に静かな世界にいるような気持ちになるんだろう。

そんな事を考えながらしばらくボーッと星空を眺めていた。

「フランドール？」

唐突に、真横から不思議そうな声で呼びかけられる。

さっきまでは一人だと思っていたのに、僅かに顔を向けると横に綺麗な顔立ちをした少年が目をパチクリさせて私を見つめてきていた。

「・・・はい。」

声が上手く出せなくて、か細い返事になってしまった。変な奴だと思われてしまったかもしれない。

しかしその少年は私の変な声を嘲笑するでもなく、不思議そうな表情のまま私を見つめ続けてくる。何が不思議なのかしら、と僅かに私はこそばゆい気持ちになって少年を見つめ返した。

「なにがそんなに悲しいの？フランドール。」

「・・・悲しそう？」

質問に質問で返してはいけません、と誰かに教わったような気がするけれど、少年の質問の意味が分からなくてオウム返しに聞き返してしまった。

だって、私が悲しいはずが無いじゃない。父様と母様もそう言って

いた。

「悲しくなんてないわ。どうしてそう思うの？」

そういうと少年は困ったように僅かに眉を寄せて押し黙った。

「あなたこそ、とても悲しそう。一体どうしたの？」

「……。」

「……？」

「フランドールが、一人きりだから。」

「一人きり？」

おかしな事を言う子、私が一人きりのはずがないじゃない。

こうして、あなただってそばに……。

……？

あなた、名前は？

……確か。

名前は——、っ！？

世界が急に真っ暗闇に覆われる。今まで寝転んでいた地面が消えうせて、激しい落下感に襲われて内蔵が縮み上がる感覚が込み上げて来る。

……父様と母様は！？

慌てて回りを見渡すが父様と母様が見当たらない。

優しい父様と母様、どこにいるの！？

落下感とは別の感覚に、胃がねじ切れそうな程に痛い。不安で不安で、仕方がなくなる。

どこまでもどこまでも落ちていく恐怖にフリルは堪らずに悲鳴を漏らした。親を呼んだ叫び声も跳ね返りはせずに、暗闇の向こうへと吸い込まれていく映像が錯覚して見えた気がした。

目を凝らしても何も見えない、自分の手ですらも感覚でしかあることが分からなくて怖い。

助けて、と何度も叫ぶ。

喉が切れて血の味が口の中に広がる。

怖い。

怖い。

怖いよ。

誰か

突然目の前が閃光に包まれたように真っ白になった。暗闇に慣らされていた私の目はいきなりの環境の変化についていけずに大袈裟な悲鳴をあげて、私の脳を痛いほどに刺激する。

目の裏は真っ白な景色のまま焼きつき、閃光が収まったのか変わらず光り続けているのかも判然としない。

「フリル。」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「フリル。」

優しくて、心地良い声。

少年の声のようで、若い男性の声のようで、中年の男性の声のようで、若い女性の声のようで。

私はその声に応えようとして声を出そうとするのだけれど、ふと気付くと声をどうやって出せばいいのかわからない。空気の震わせ

方が、喉の震わせ方がわからない。

「フリル。」

早く応えなければ消えてしまう。

「フリル。」

早く応えなければ。

「フリル。」

早く・・・！

「——っ！！」

自分の叫び声で、今まで見ていたのが夢だと改めて認識する。

飛び跳ねておきた反動で背中が少し痛んだ。

叫んだのは誰の名前か。

誰の名前でもあるような気がしたし、誰の名前でも良かった。

同じように大好きだったから。

「・・・フリル？」

眠そうな、柔らかい声が近くから聞こえてきて、一瞬夢の続きかと思っただけで慌てる。

声のした方に顔を向けると、ベッドから身を起こしてこちらを静かに見つめる美しい女性が居た。

夢のように、目の前が光に包まれて叫ぶ事が無かった事に安堵し、小さくため息をつく。

背中に張り付く寝巻きが気持ち悪い。大分長い事うなされていたのかも知れなかった。

向かいのベッドから美しい女性が立ち上がり、静かにこちらに近寄ってきて、ベッドの端に腰を下ろした。

「・・・怖いのか？」

優しく目を覗きこんで、いつものように髪を撫でてくれる。

「・・・嫌な夢を見たような気がしたんです。」

「そう・・・。」

それだけ言うと、次になにを言ったら良いのかが分からなくて俯いてしまう私を、その女性が柔らかく抱きしめてくれる。

「・・・一緒に布団で寝ましようか？」

「・・・良いんですか？」

「ええ、悪いわけが無いでしょう。」

そういつて優しく微笑むと、その人はクスクスと悪戯っぽく笑いながら「なんだか、こうやって寝るのって楽しいわね」と小さく囁きながら布団へ横になる。

女の私でも、思わず鼓動が跳ね上がるような魅力的な微笑で、思わず見惚れてしまう。

顔の温度の上昇を悟られるのが恥ずかしくて、女性の胸元に頭をうずめる様にして顔を隠した。アラアラ、と言いながらその人がまたクスクスと笑う声が耳に心地よかった。

その人の体からはとても甘い香りがして、フワフワして、鼓動の音がとても静かで、ドクンドクンしていて・・・。

ひよっとしたら私は今幸せなんじゃないかと、そう思うのにはそれだけで十分だった。

――おやすみなさい、シャルル

――おやすみなさい、フリル

――いい夢を

――いい夢を

ドラゴンのフリル・幕間、ダグラス、デイル邸にて（後書き）

次回更新予定1月9日・・・（できれば・・・）。

ドラゴンの信奉者・青二才のバラック？

その女性を見た瞬間に、僕は心を奪われた。

白く透きとおる肌、昔一度だけ見た事のある美しい海のように深い真つ青な髪。

鮮やかな桃色に染まった唇からつむぎ出される、小鳥のさえずりの様な声。

柔らかく、とげの無い動き。

そして、何よりもその瞳。

まるで光っているかのような瞳は、髪の色とはまた違う信じられないくらいに透明な青。

慈愛に満ち溢れ、しかしどこか物憂げな視線に見つめられた瞬間に、本心から「この女性の為ならば、命をかけられる」と思った。

心臓の鼓動は早鐘のように打ち鳴らされ、肺は息を吸う役目を忘れてとまってしまう。

こんなに美しい者が、この世に存在するのか？

彼女の美しい声を聞きたい、彼女の頬に触れてみたい、彼女の細い体を抱きしめたい、彼女の美しい髪を撫でてみたい、彼女と生涯を共に歩んでいきたい、一秒でも長く彼女のそばで生きたい。

僕は生まれて初めて

どうしようもない位に恋に落ちた。

「お金はとおっても大事なものですよ」と、グロー様に教わった事があります。

「どうしてですか？」とグロー様に尋ねると、グロー様は優しく微笑んで「お金が無いと、生きるための全てを自分でしなくてはならなくなりますから。」と教えてくれました。

その説明がその時はピンとこなかったけれど、今はなんとなく分かったつもりになっているんです。

まずお金が無いと自分で野菜を育ててはなりません。

甘いお菓子だって自分で作らなくてはならないから、大変。

材料も自分で作らなきゃいけないから、すごく大変。

そもそも砂糖はどうやって作るんでしょう？

白いキラキラした砂糖。

小麦粉と少しだけ似ているから、麦から作るのでしょうか？

今度シャルルさんに聞いてみたいです。

とにかく、人が効率よく生きていく為にはお金はとても大事みたいです。

どうやって皆さんはそのお金を手に入れるのだろう、自分で作るのだろうか、皆さんがバラバラに作るのにあんなに形が一緒なのはすごいなあ、と頭を捻っていたらグロー様は涙を流しながら笑っていました。

何がおかしいのかよく分からなくて、もう恥ずかしくて恥ずかしくて下を向いてしまいました。 ああまた私は馬鹿な事をいったんだなあって。

・・・話が十分脱線してしまいました。

ああそう、お金が大事だという話ですよ。

・・・

あ・・・そうそう聞いてください。

お金をどうやって手に入れるかの話なんですけど、いくつか方法があるみたいなんです。

一つはさつき私が話した小麦や砂糖などの物を作って他の方に渡し、代わりにお金を手に入れる方法。

他には誰かのために働いてお給料というものでお金を手に入れる方法。

最後に私がもう一つ知っているのは、シャルルさんのように踊ったりして人を喜ばせてお金を手に入れる方法があるそうです。

最初の一つはたしかに交換という分かりやすい形の手に入れ方なので、すんなり理解ができましたが、後の二つはナルホドと感心してしまいました。

この二つは誰かを喜ばすという事に価値があるのですよね。

形のあるものばかりではなく、行いそのものに価値を見出すという感覚は凄いなあと思います。

・・・私だったら、どうやってお金を手に入れる事ができるんでしょうか。

私は畑なんかもっていないし、料理だってそんなに自慢できるほどじゃない。

シャルルさんのように綺麗に踊る事もできないし、誰かのために役に立てるとは思えない。

今度シャルルさんに聞いてみようかな・・・。

・・・

・・・ああ、また話が脱線してしまいました。

・・・ごめんなさい。

随分横道にそれてしまいましたが、そんな訳で、私はお金を必要以上を使う事にとっても抵抗があるんです。

使わなければ価値が無いものだとかグロアー様には教えて頂いたので、使う事自体には反対意見はないのですが。

だから、今こうしてシャルルさんにダグラスの商業街を一杯連れて廻ってもらって嬉しい気持ち以上に、シャルルさんのお金の使い方の豪快さに冷や汗がとまらないんです。

シャルルさんの買っている物の値札を見たときは目が飛び出るかと思っしまいました。

しかも、自分の稼いだお金を自分の為に使うのなら私は何も意見をいう筋合いはないのですが、シャルルさんは何故か私の物を次々と買ってしまいます。

どんなに断つても「良いじゃない良いじゃない！似合うわ似合うわ超超可愛いワ〜！」と元気一杯で会計に走り去っていつてしまいます。

もう申し訳なくて申し訳なくて、シャルルさんが一生懸命踊って手に入れているお金なのに・・・。

嬉々とした表情で戻ってくるシャルルさんに何度も「ごめんなさいごめんなさい」と頭を下げるんですが、正直どうやってお返しをすれば良いのかも思いつかなくて・・・どうすればいいんでしょう。

せめて、と思って申し出た荷物持ちなんですが、シャルルさんが恐ろしい勢いで次々服やアクセサリを買って「ハイこれアナタの！キヤー！！カワイイ！これもアナタの！！ヤーン絶対似合う！！はいコレモ！！あ！コレハ！？いいや買っちゃえ！ハイ持つて！」と預けてくるものだから、もう私は前を見て歩く事もろくにできない程です。

というかこんなに元気なシャルルさんを見た事が無かったので凄く驚きました。

普段はどちらかというと物静かで、時々ドキツとするほど鋭い顔つきをしたりするイメージがあつたのですが、どうも面白い物をしているときのシャルルさんは別の人格が顔を出すようです。

あ、また別のお店に突撃していつてしまいました・・・。
ああ・・・。

グロアー様・・・私はどうすればいいんでしょう・・・。

同じ男からの執拗な視線に気がついた時はさすがに「あらあ、ひよっとして私迂闊すぎる？」と若干の後悔が押し寄せた。少しばかり状況の認識が甘すぎたかしら？

死にそんな目にあつた事もあるのに、頭悪いのかしらね私って、と自嘲するけれど、まあこうなってしまったからには仕方がない。

反省は次回以降に生かすとして、まずはその次回以降へ命を繋げる為に状況を変えなくちゃ。こんな所で馬鹿騒ぎして命に関わつたとなれば、死に切れない。最終回にはまだはやすぎるんじゃない？しかもB A D E N D。というよりD E A D E N D？笑えない笑えない。

ああそれにしても悔しいわねえ、失礼にも程があるわ。なんでこんな楽しい時間を邪魔するのかしら。

常識ってものがないの？

乙女が身だしなみを整えている時には男は黙って煙草でもふかして待っていなさいな。

ホント信じられないわあ。

・・・まあそれはともかく。

「フリル！次はあそこよ！」

「シャ、シャルルさん・・・さすがにもう・・・。」

うずたかく積みあがった荷物の山にふらつくフリルの背中をグイグイと押して近くにあったアクセサリー店のドアをくぐる。

ドアをくぐると、目の前には楽園ではないかと目を疑ってしまうほどの、沢山の可愛いアクセサリーで埋め尽くされた空間が広がっていた。

「キヤアアアア！カワイイー！！！」

「シャルルさあん・・・。」

あら？

なんでフリルが涙目に？

いいわ、気にしないでおきましょう。

それが世間一般に無視と言われる行為であつたとしても。ウフフのフ。

とりあえずフリルのサラサラな髪をフワフワと撫でておく。

オツケイエネルギー充填完了よ。

「ヤダ！これ今流行りのファルデル製のイヤリングよフリル！ほら、さっきのお店で売り切れてたヤツ！！」

「シャ、シャルルさん・・・イヤリングならもう5個も買つて貰つて——」「すいまっせーん！！これちょっと付けて見たいんですけどぉ！？」——・・・。」

店の奥から、フリルの抱えている荷物の山を見て目を光らせていた主人が、獲物を狙うギラギラとした鷹のような目を引つ込めて満面の笑顔で「いらっしやいませお嬢様方アア！」と駆けつける。なかなかよろしい心がけですわ。

「お嬢様方！非常に運がよろしい！こちらファルデル製の今年の新作最後の一品でございます！八分銀を贅沢に使いました非常に人気のお品です！職人が技巧を凝らした型に、さらに贅沢に宝石を散りばめております！試しにお付けになれますかっ！？」

集中しないと聞き漏らしそうな勢いで店の主人が流暢にイヤリングの説明をしてくれる。この銀はどこのものでこの宝石はどこの産です。あ！こちらに目をお付けになるとはお目が高い！そうです！聞いて驚かれますな！？なんとこの中央に光る宝石はかのナンターラカンターラーがカッティングした一品でございます——と、まあ半分ほど聞き流しておいた。

ニコニコと主人の話を聞くフリをしながらウィンドウの外へと視線を横目に投げると、確かにさっきの男が物陰に佇むようにしてこちらを伺っている様子が見える。

「はいお嬢様！メイアン！このお嬢様と物陰で服を交換させて頂きなさいっ！」にこにこにこにこにこにこにこにこにこにこにこにこながら声を押し殺して叫ぶ器用なた主人がにこにこにこ

「ささつ、お嬢様方こちらの物陰で急いでお着替えください！メイアン着替えたらお嬢様の帽子を深く被って店まで戻りなさい。ウィンドウの外に絶対に顔を見せないように。」にこにこにこにこ

「ご親切にどうもご主人っ！この事は他言無用ですわ！」 にここに
にここに

駄目押しで金貨5枚。合計で服50着分位にはなるでしょうね。

「おや？先程までいたお嬢様方の姿が……。夢だったのか。美しい方達だった。気前も素晴らしい。王に尋問されても決して口を割れませんか。そんなお客様はいらっしゃらなかったのだから……なあメイアン？」にこにこにこにこ

[illegible]

背格好の似た店の娘の衣服と自分の衣服を急いで交換し、フリルも買ってきた服の内の一着目立たない一着に着替えさせる。

娘に目で頷いてみせて店内の方へと消えていくのを確認してから、訳がわからないといった表情で困惑するフリルの手を引っ張って裏道へと走り出す。

結構楽しい、不謹慎かしらね？

ま、
いい
わ。

急げや急げ、えっほっほ。

それでわ失敬、これにてドロソ。

フリルと共にダグラスへとやってきてから、既に3週間が経とうと
していた。

久々に訪れたダグラスの街並みは懐かしかったけれど、やはり時は
移ろい行くものなのねえフウ、とか憂いをかもし出して見る。

昔私が誘惑した王は既になく、今は当時の第一王子であつたバラッ
ク王子がその地位に座っているのだという。

旅から旅の暮らしの中で、噂話に聞いていたその事実を改めてこの
街で聞くと生々しい現実感が私に襲いかかってきて、当時の事を思
い出した肌があわ立つ。

殺したいほど憎んでいたはずの相手なのに、勝手に死んでしまわれ
ると肩すかしをくらったようでなんととも気が抜ける。

まあ生きていたとしても今更私の事なんて覚えているわけないでし
ょうし、追っ手を放ってくるはずもないけれど。

そのお陰、といったらあれだけど、この三週間、私は興行の合間を
縫って毎日のようにフリルを外へと連れ出し、ダグラスの街の中を
あっちへこっちへと飛び回り、安心して遊びまわった。

途中、あまりの散財っぷりにフリルが涙目になっていたような気が
するけれど、気のせいでしょうきっと。

というか昔の稼ぎが残りすぎてて使い切れないのよほんと。質素な
生活してきたしね。

フリルと会話を重ね、同じ時間を二人で過ごすようになってからと
いうもの、日に日にフリルの顔に笑顔が戻ってくる事が今は何より
も嬉しい。

二人で色々な事を話した。フリルの過去に出来るだけ触れないよう
に会話の流れに注意を払いながら。人々の暮らし、ドラゴンの伝説
や御伽噺、私が旅先で出会った様々な不思議な出来事。話すたびに
フリルはキラキラと目を輝かせて続きを聞きたがる。その様子が餌

を求めるひな鳥のようで、思わず私も頬を緩めてしまう。

でも、話していて不思議に思う事はフリルの知識の偏り様。

食事のマナーや発音、言葉の選び方等には高貴な身分で育ったような印象が強いのに、台所に立たせると平気でウサギの皮を剥いでしまったりもするし、そうかと思えば一般の家庭の女の子ならば誰でも簡単に作ってしまうような料理をしらない。

どこでそんな事を習ったのかというような知識を会話の端々でポンと出してきたりして、驚かされる事もしばしばだ。

どうやらここ2年間ほどの記憶以外には覚えている事がなさそうだという事は会話の節々から想像できるし、それが知識の偏りの原因なのだろうということは想像できるが、本人にはその事を特に気にしているそぶりが見えないのは何故だろう。

記憶がない人には今まで数人接した事はあるが、その内のどの人も見えないからこそその過去に縛られていた。どこかに負い目を感じるような表情をうかがわせ、ふとした瞬間にその思いに捕らわれてしまいそうになる危うさを絶えず内包していたように思う。

だけどフリルは過去を知らない事が当たり前のように振舞う。

生まれたばかりの赤ん坊が、胎児であった頃の記憶を持っていない事を当たり前のものとして歯牙にもかけないのと同じように。

その状態の彼女があまりにも自然で、だからこそ逆に不自然に思えてしまうのは私の勘繰り過ぎってもんだらうか。

しかしそれにしてもここ数日、いやにつけられている回数が多いように思う。

その度に上手く巻けている自信はあったが、少し外出も控えなければならぬかもしれない。

彼らは一体なんなのだろう？

少なくとも、昔の事を思い出したダグラスの高官がたまたま見つけた私をつけさせている訳ではない様な気がする。

きっと目当てはドラゴンであるフリルなのだろう。

血にまみれたマントや折れた槍の残骸の持ち主が残した仕事なのか

もしない。

志し半ばで倒れた・・・って所か。私と出会うまでの2年間をどうやって過ごしてきたのかをフリルが話したがない理由もその辺にありそうだ。

横でフリルが安らかに音息を立てている音が聞こえてくる。

「なんとか、しなくちゃねえ。」

一人で声もなく呟いて、私がしがない一人の踊り子である事に心が不安でざわつく。

特別な能力があるわけではない、特別な地位にあるわけでもない。彼女の心を支えるのが自身の一番の役目であるとは思うようにしているが、では実際に力をもつてして与えられる害意には果たして自分の力だけでなんとかなるものなのか？

だから私は、そんな不安へのせめてもの抵抗で今日も寝るフリをして息を殺す。

そろそろ、フリルが

「待ちなさい。」

逃げ出す事くらいは分かりきってるから。

「っ!？」

体を起こしてそちらを見つめると、外套を羽織り、旅装へと身を固めたフリルが凍りついたような表情でこちらを振り返る様子が目に飛び込んできた。予想通りって所？

ここ数日で思いつめたような表情をフリルが時折見せる変化にはさすがに気がついた。

大方、自分が原因でつけられている事に気付いたのだろう。

賢いフリルの事だ、今はまだ大丈夫でもこの後に本格的に追跡が始まってしまった時に私が巻き込まれる事でも恐れたのだろう。

こっそり旅の準備をし始めた事などバレバレだった。

「夜のお散歩？フリル。」

「……。」

「よかつたら私もついて行きたいのだけど、いいかしら？」

微笑んでいるつもりだが、どうだろう。

正直、かなり腹が立っているし。

「……。」

フリルの目線があちこちへと飛び回り、動揺している様子が手に取るように伝わってくる。

どうせ上手く隠し事が出来ているとも思っていたのだろう。そんなことから、ドラゴンは騙しあいには向かないんじゃないだろうか。基本的に人を疑うという事が出来ないのは、致命的な欠陥のよう思う。

無言のまま見つめあう事数分、沈黙に耐え切れなくなったようにしてフリルが震える唇から声を絞り出した。

「シャルルさんももう気付いていると思いますけど、私、今つけられています。」

「……。」

「たぶん、ゴ、ゴランの……兵、だと思います。」

ゴランや兵の単語の所でフリルの肩が一気に震えを増す。

余程怖い目にあってきたのかもしれない。

「私……前にゴランの王に捕らわれていました。……何でも私の血を飲む事で不死になりたいとか。」

馬鹿な事を。

「だ、だけど……。ただなぜか急にその人はおかしくなっていてしまつて、最初は……。最初は怖かつたけどそんなことしてこなかつたのに。」

「……。」

「わた、私の血を飲んでから急激におかしくなつてしまつて、怖くて……。」

「……。」

「毎日痛くて、怖くて、辛くて、何も考えられなくて。」

「……。」

「目を、……目を覚ますと私の方を向いて笑うんです。口の端だけを吊り上げるようにして。お、おはようって笑顔で、笑顔で剣を・

……。」

「……。」

フリルが体中のあちこちに剣を突きたてられたかのように苦しげに呻き、手で次々とさする。今も剣が刺さっているように恐怖して。

「そ、それで、一人の兵士の方が助けてくださって、は、排水路を使つてに、逃げだしたんですけど、そ、そこを、そこを抜け出したら、かこま、かこまれて、ど、どうしようもなくて、どうしたら良いか、わ、わからなくて、怖くて、怖くて震えてるしかできなくて。」

嗚咽をあげ始めたフリルは恐怖に体を震わせ、顔を手で覆う。

それでも、健気に言葉を紡ごうとする。

私から離れていくために。私の為に。

必死に、自分を嫌って貰えろと信じて。

「そ、その人に、その人が、き、きられ、た、倒れて、こ、ころされ、で、でも、さ、さいごに何故か私の方をみてわ、わら、わらつて。」

「……。」

「さ、さけぼうとしたら、お、おんなの、ふあ、ファネルさんが、ファネルさんがきてし、きてしまつて。」

フリルの外套が呼ばれたかのようにふわりと揺れる。

貴女、ファネルっていうのねえ。

「た、たすけて、たすけてくれ、て、お、おこつて、ず、ずっとはげまして、お、おこつてるのに。」

「……。」

「な、ないてたのに、ジェ、ジェムドさんを見て、な、ないてたの

に、き、きづいてないみたいで、き、い、言えなくて、ずっと、さ、さいごまで、いえ、いえなくて。」

フリルの言葉が要領をえなくなってくる。大分、まいってきている。「な、なんでも、料理も、や、薬草も、た、たべものの探し方も、ぜ、ぜんぶ必死に、必死におしえ、おしえてくれ、教えてくれて。」

「……。」

「お、おこってるふりして、き、きらうわけないのに、あ、あんなに優しい目、嫌いになれる、わ、わけな、ないのに。」

「……。」

「め、めも片方き、きられ、や、矢がささ、刺さって、ぬ、ぬいたら、血が、血がとまらな、わ、わたし愚図だからや、薬草まち、間違えて、お、おそくて、お、おこって、ち、ちがうのに、つ、辛そうな目し、目をしてお、怒ってるようにふ、ふる、ふるまって。血が、血が止まらなくて。と、止まらないのにまた、こ、怖い、人がき、きて。」

「……。」

「も、もう、もう、う、腕も、手、手が、え、壊死し、壊死してて、自分でき、きりおと、切り落として、て、わ、わら、わらって、わ、わらえって。わ、笑えない、わ、笑えなくて、な、ないちやって、ま、またおこっちゃって。あ、あしが、お、おれて、や、矢が刺さったのに、あ、歩いて、と、とめた、のに聞いて、くれなく、て、木で、木で止めた、けで、ま、また闘って。つ、つよくて、わ、わらってて。」

「フリル……。もういいよ。」

「も、もう、ど、どうしたら、どうしたらいいか、わ、わからなくて。し、しんじやうって、と、とめ、止めたのに、う、うるせえて、と、とめられ、なく、て。」

「フリル……。」

「つ、つよくて、き、きれいで。戦ってるのに、き、きれいで。つ、つらそうな顔し、してくれなくて。やさ、やさしい目、で。ねて、

ねてると、か、かみ、髪を撫でてくれて、ず、ずっと撫でてくれて。も、もう最後はお、おなかきれちゃって。そ、それで、それでも守って、くれ、て。血が、血がとまらな、くて。お、おこって、おこって。血が、血をはい、吐いてるのに、が、がきに、わ、わた、私にさわるなって、さ、さけんでくれ、て。も、もう、い、いたいの、痛いのに、わた、わたしの、名前初めて、よ、よんでくれて、フリルって、はじ、はじめて呼んで――

――泣くんじゃねえぞ、って

抱きしめたフリルの肩は、とても細くて、弱くて、震えていて、悲しくて、人を愛していて、泣いていた。

必死に笑顔を作ろうとしながら。

私というと、シャルルさんが死んでしまうかもしれないって。

グロアーさんも死んじやっているかもしれないって。

その名前を聞いて、少し驚いたけど。

でもまあ、「馬鹿ねえフリル。」としか言えなくて。

私も泣いてしまった。

笑おうとするフリルがかわいそうで、悲しくて、私も悲しかった。

だから、フリルが泣く声に合わせるようにしてノックの音が響いたときに。

私は動けなかった。

動揺して、力がなくて、弱すぎた。

ファネルさんとやらだったら。

どうしたのだろう。

ボロボロの槍と、傷ついた体で、それでも戦おうとしたのだろうか。

泣くんじゃねえぞって、笑いながら。

「ダグラス国国王バツカス殿下親衛隊の者だ、こちらにシャルルとフリルという者がいると聞いて参った。この度バツカス殿下よりそなた達をお連れするようにとの命を受け、お迎えに参った。」

ヨシン、グロアー。

あなた達は、どうしてこの子を人の所へ連れてきてしまったの？
この子を置いて、どこへ行ってしまったの？
この子を

幸せにしてあげるつもりじゃなかったの？
それとも、この子はまだ幸せになれるの？
こんなに、傷ついているのに？

ねえ、教えてよ

ヨシン、グロアー。

どうして

フリルは人の世界におりてきたの？

ドラゴンの信奉者・青二才のバラック？

「貴国に我が国において重大な犯罪を犯したものが逃げ込んだとの情報を受け、この度はその犯罪者の逮捕と引渡しにご協力頂きたく参りました。」

不遜な態度で言い放ったその使者の顔に書面を叩きつけてやるうかとも一瞬思ったが、横で宰相のユジンが諭すように目線を送っていたのに気付いてなんとか感情を顔に出さずにすんだ。

「初めからそういう態度で臨んで来てくれればこちらも協力は惜しまないんだがな。不法に我が国に入国した挙句に、間抜けにも街で騒ぎを起こして捕らえられた者にそう言われてもおいそれと信じる訳にはいかな。」

顔を能面のように保ちながら使者に精一杯の皮肉を叩きつけてやる。ゴランからの正式な使者だとたまうその男は一瞬にやりとほくそ笑むのみで、まだ若い自分を小ばかにした様な態度を変化させない。こっぴどい時に、自分の若さが疎ましく思う。

「貴国との良好な関係の維持を我が国は望んでおります。たかだか一人の犯罪者の為に、争いが起きようものなら双方にとっては痛手以外の何物でもございません。ご覧になられた通りその書面は正式に我が国の宰相より発行されたもので御座います。よもや大陸一古い歴史を持つ、由緒正しい貴国の検閲官が我が国の割り印を見間違えう事もないと思われますが……。それにまだバラック殿下はお若

くていらつしやる。先代の王はいつも我が国の申し出に対して快い返事をしてくださったものです。」

にやにやと笑うその態度に一々神経を逆撫でされる自分も大概だとは思うが、正式な使者だと言う割には礼儀も何もあつたものじやない不躰な態度を一貫させている男に、ゴランという国の氣質が見え隠れするようでバラックは吐き気を覚えずにはいられなかった。

「とにかくいきなりそう言われても困るとしか言いようが無いな。この国に入国する者は貴国やボルドからも流れてくる犯罪者情報とも厳密に照合させた上、身体検査も厳重に行つて入国を許可されている。その上で入国させたものはどの様な国籍の者であるうとも、我が国に滞在している間は先代からこの国に根をおろす国民同様に大切に扱う事をこの国の信念としているのだ。落ち度があるとすれば、それ程の重大な犯罪を犯した者の情報をいつまでも伝えなかった貴国にあるものだと考えるが？」

これだから若造は、といった様子で小さくため息をつきながら、いつまでもニヤつくその使者を切り捨ててやろうかという考えが一瞬バラックの脳裏を掠める。

ああ、そうできたらどれだけ気楽なものだろう。

王というのは、意外にがんじがらめなものかもしれない。

理想的であろうとすれば、するほどに。バラックはそう思わずにはいられなかった。

「だからこそ私が使者として派遣されたのですよ。まことにお恥ずかしい話ですが、現在我がゴランは様々な問題を内包しており混乱を極めております。情報の伝達に若干の不備が起きてしまったとしても、それは貴国に対して不遜を働こうという思惑があつての事ではないのです。どうぞその所を汲み取っていただきたく願います。

何卒、犯罪者の搜索と逮捕、そして引渡しにおいて貴国の手厚いご協力を仰げます事を期待しております。」

使者が芝居がかった動きで恭しく頭を下げる様子に、バラックは冷たい視線を送りながら小さくため息をついた。

煩わしい国政、煩わしい外交、小ばかにした周りの態度、もう全部バラックにはこりこりだった。全てを投げ出して逃げてしまえるならば、今すぐにも――。

聖ダグラス王国。国として齢500年を超えるこの国は、既に腐りかけ、死に倒れ行く老木のごとく息を切らせながらなんとかたっているような状況であった。

属領であったボルドには100年以上前に独立を許し、先代ではチャンツにまで自治権を勝ち取られる有様。

かつて栄華を誇るきつかけとなった魔法は失われて久しく、人々の記憶に遠い。

始祖と呼ばれる大魔道士によって築かれたこの国のシンボルはドラゴン、鮮やかなエンブレムに描かれた純白のドラゴンのタテガミは青く、今はどこか物悲しげな雰囲気を醸し出す事に一役かっていた。元々がやせ細った土地に魔法で恵みをもたらしたこの国には、他国に誇れるものなどもういくばくも残されてはおらず、歴史の長さとその間に積み重ねられた圧倒的な蔵書量を誇る国立の図書館のみが、ダグラスの貴族達の心の支えとなっていた。

バラックは自身の部屋から見える巨大な国立図書館に灯る微かな光を遠くに眺めながら、本日何度目とも分からないため息を盛大につくと、傍らに置いた酒の入ったグラスを一気におおった。

「・・・あまり飲まれますな。お体にさわりますぞ。」

鬱陶しそうにバラックは声の主を見つめると、いらだった様子で不満を口に漏らした。

「自分の体調の管理くらいは出来ているつもりだ。お前に言われるまでも無い。」

若い王の体調を気遣ったその初老の男は、バラックのいらだった様子にも臆する事無くその言葉に恭しく頭をたれる。

年の功とでも言うべきか、落ち着き払ったその動作が、まさに今日若さにより他国の使者風情に軽んじた態度をとられ、逆立っていたバラックの心を余計に波立たせるが、それを態度に出すのも癪に障る。

当り散らすのも幼稚なようで、バラックは口の端を噛んで苦々しげに手に持ったグラスを見つめ、あけたばかりのそれに酒を注ぎ足した。

「・・・お前はと思う、ユジン。」

ユジンと呼ばれたダグラスの宰相は、俯かせていたその顔を僅かに持ち上げると、静かな視線をじっとバラックに注ぎ、暫くして重々しげにその口を開いた。

「昨今の噂が真のものであるとするならば、ゴランは今混乱の渦中にあるものと思われます。・・・その様な中でわざわざ追跡者を不法入国させる程の愚を冒してまで犯罪者を追っているとなれば、なんらかの形で噂の事件に関係している者ではないでしょうか。」

「・・・ふん。」

「正式な犯罪者情報に載せられないからにはゴラン側にも何かの思惑があつての事かと思われます。それがどのようなものであるにしろ、好き勝手に国内を動き回らせるよりは我が国でその者達を抑えて置いた方が懸命であるかと・・・。」

「・・・外交の駒にでもするつもりかユジン。」

「・・・。」

「先にゴランの使者に伝えたダグラスの信念、余の中では決して建

前ではないぞ。例えとるべき行動が同じであつたとしても、由緒あるダグラスの精神を汚すような発言は控える。」

「・・・は。無礼をお許しください。バラック殿下。」

ユジンはその言葉に反論するでもなく、やはり静かに頭を垂れるのみであつた。

その様子にバラックはどうしようもなく心中を掻き回され、頭を掻き毟り叫び声をあげたい衝動に胸を衝かれる。子どもの我侭に付き合う大人の様な態度に、はらわたが煮えくり返るような思いがする。どうせ、腹の中では僕の事を馬鹿にしているんだらうと、疑心暗鬼が心のなかを埋め尽くしていた。

「・・・よい。別に無礼だなどとは思つておらぬ。・・・今回の件、そなたに任せる。あの男が捕らえられた雑貨屋の主人、既に手を回してあるのだらう。」

「は・・・。バラック殿下の信頼、光栄の至りで御座います。雑貨屋の主人には既に直属の親衛隊の者を向かわせております。間も無く報告があるかと・・・。」

「・・・わかつた。・・・無礼を働かぬよう、兵達にはよく伝えておくように。・・・下がれ、余は、もう休む。」

「・・・明朝報告に上がらせて頂きます。ゆつくりとお休みになられますよう。」

最後に今まで下げていた頭を一層低くしてから、背を向けぬようにしてユジンは静かにドアの外へと消えて行つた。

一人になつた事で急に室温が下がつたように思える広い寝室に、バラックの息遣いの音だけが静かに響いた。

父の代まで続いていた夜伽の慣行に一瞬思いがとび、それを思つてしまう自分の不甲斐なさが情けなくて仕方が無かつた。

腐りかけた国を生き返らせる使命を帯びた若い王はあまりにも健全で、愚直すぎた。

シンボルである、ドラゴンのそれと同じように。

翌朝、王付きの年老いた侍女に朝早く起こされたバラックは、寝ぼけ眼をこすりながら昨日と同じように謁見室へと向かった。

朝食をとる際に顔をみせた宰相のユジンからは既に目的の二人組みを城へと招致し、客人として丁重にもてなしてあるとの報告を受けていた。

報告の中で、兵が訪れた時間が悪かったためか、二人組みを大分混乱させてしまったらしい旨を聞いたバラックは僅かに心を痛めた。聞くに、その二人組みはうら若い女性達で、その内の一人は自分とほとんど歳の変わらない娘だそうだった。

兵達が手荒な事をしていなければ良いが、と思いながら謁見室へと急ぐバラックの歩みは自然と早くなっていた。

ふと自分の歩調が威厳ある態度とは程遠いものになっている事に気付いたバラックは心中で軽く舌打ちをする。またか、と自分を罵りたい気分だった。

先代の王、バラックの父が突然の崩御をしてからというもの、バラックの生活は一変した。もとより第一王子として王としての教育をかねてより受けていた事もあり、いつかは自分がこの国を背負って立つのだという感覚は漠然とバラックの中に育っていた。しかしそれもまだまだ先の事のようにバラックはいつも思っていたのだ。

国を背負って立つ覚悟も、下地も、若いバラックにはまだ到底満足いくものが備わっているとは言いがたかった。

一つの言葉、一つの動作の重みが今までのそれとはまったく違う意味を持つ生活と責任が煩わしく、毎日がストレスの連続だった。

この歩き方一つにしたってそうだ。

何度宰相のユジンの注意を受けてきたか分かったもんじやない。

きつと今横にユジンがいたら「殿下、少し急ぎすぎでは御座いませ

ぬか……。」「などと仰々しい態度で忠告してくるに違いない。

言われなくても分かっていると叫び返したいのも山々だったが、つい物思いに耽ると落ち着きなく歩き回ったり歩調が速くなってしまう癖のある自分にとって、なかなかそのチャンスはめぐってこなかった。

そんな思いを巡らせながらはやる気持ちを押さえてついた謁見室では、既に謁見の準備を済ませた二人組みが膝をつき、頭を垂れてバラックの到着を待っていた。

謁見室に入るとユジンがゆっくりと目だけを動かして視線を送ってくる。

バラックは僅かにあごを引いて頷いてみせると、出来るだけゆっくりと歩くように注意を払いながら王座へと歩みを進めた。

王座の前に立ち、少し段差の下がった謁見者達の方を向くと、それにあわせて謁見室を取り囲むように配置された親衛隊の騎士達が剣を一齐に打ち鳴らし、掛け声と共に最敬礼をする。

ユジンがその音を合図にして静かにバラックの下へと近づき、王杖を恭しく掲げる。

それを受け取りながら、ようやくバラックは王座へと深々と腰掛けする事ができた。

慣例だかなんだかしらないが、煩わしいにも程がある。

実力の伴わない自分を大袈裟に飾り立てているようなその一連の動作に、卑屈な考えを巡らしながら改めて謁見者の二人に目を向けたバラックは、思わず息を呑んだ。

なんだあれは、と小さく声に出しそうになる。

二人組みの女性達は一様にその頭を未だ下げており、表情を伺う事は出来なかったが、その内の一人にバラックは強く興味を引かれた。二人の内の若い女性の髪はまるで海のように鮮やかな青色をしていた。

およそ普通の人間では考えられないようなその髪は、しかしキラキ

ラと光を受けて輝き、言葉を失うほどに美しい。

礼装に身を包んでいるためか髪は纏め上げられていたが、きつと解くと風にそよぐ美しい動きを見せてくれるに違いなかった。

その色と美しさに驚いたバラックは、平民の前であるにも関わらず思わず動揺し、ちらりとユジンに向けて視線を送ってしまった。

しかしユジンと目が合った瞬間に我に返り、僅かに悔しそうな表情を浮かべると改めて二人の謁見者に向けて声を掛けた。

「顔をあげてくれないだろうか、お客人。」

バラックのかけた声に反応して二人の女性がゆっくりと顔をあげる様子に、不覚にもバラックは目を奪われた。

今まで注目していなかった、もう一人の女性も息を呑むほどに美しい、しかしやはりそれよりも、青い髪をした少女の神々しいまでの美しさにバラックは眩暈を覚えるほどに急激に惹きつけられた。

これほど、美しいものがこの世に存在するのか、という思いがバラックの頭の中に駆け巡る。

少し俯いたその目は、その奥に光の源でもあるかのように透きとおった不思議な青に輝き、見ていると吸い込まれそうな気分になった。雪のように白い肌はその髪と同様に日の光を受けて白磁のように光り、目もくらむほどだ。

バラックは時が経つのも忘れて、その青い髪の少女に見惚れてしまった。

「・・・殿下。」

ユジンが小声で掛けて来た呼びかけで一気に現実へと引き戻されたバラックは、気付くと青い髪の少女が不思議そうな顔をしてこちらを見上げて来ている事に思わず顔を赤くした。

「——っ。ま、まずはこの様に突然呼びつけてしまった非礼を詫びさせてくれ。聞くに随分と怖がらせてしまったようだな。兵達共々、失礼を働いた事を許して欲しい。」

青い髪の少女とは別の、美しい金髪の女性がバラックの言葉を受けて再び頭を垂れる。

青い髪の少女もその姿をみて慌てたように急いで頭を垂れた。

「失礼などと、とんでも御座いませぬ。親衛隊の方々はとも紳士的に接してくださいました。まして丁重なおもてなしを一晚この身に預かりました事、心より御礼申し上げたく。」

その言葉を聞いて、バラックは安堵したように微笑んだ。

「そうか、それならば良かった。本当ならば、こちらの一方的な呼びつけなのだから余が直接迎えに行きたいくらいなのだがな。」

「殿下……。」

バラックの言葉にユジンが無表情のまま僅かに首を振る。

大方、あまり自分を貶めなさいますなといったところだろうか。

バラックは僅かに眉をひそめ、ユジンから視線をはずして女性達の方へと向き直りながらヒラヒラと手を振ってこたえた。

「ああ、突然話し始めてしまったが、私は現ダグラス国王バラックと申す。そなたらの、名は？」

再び金髪の女が顔をあげ、思わず見惚れてしまいそうな魅力的な微笑みと共に口を開いた。

「名乗る機会を与えて頂いた事、至上の喜びで御座います。遠く500年の時を越え繁栄をその手に収めます王の臣下である一国民の私どもの名が、御身のお耳を汚します非礼を何卒お許しくださいませ。」

そういつて金髪の女性は複雑な形にその手を額の前に組み、高々とその手を頭上にあげたまま三度地面に額をそっとつけた。

その様子にバラックは面食らい、思わず腰を浮かしてしまった。

今では殆ど見る事も無くなってしまった、最古式の王への服従を表す伏礼だ。文献で見かけた事はあったものの、実際にこの様な場で目にしたのはバラックにとって始めての経験であった。

ユジンの方へと目を向けると、いつも無表情なユジンにしては珍しく目を大きく開いて驚いた表情をしていた。

「私はシャルルと申します。この娘はフリル。旅芸人の一座にその身をおきます、しがない踊り子とその妹で御座います。訳あって血

の繋がりはごさいませぬが、お互い助け合いながら生活をしております。」

そう自分と青い髪の少女を紹介するシャルルと名乗った女性の動作は隅々まで洗練された動きで、バラックにはその女性がただの旅芸人であるという事が不思議で仕方が無かった。

昨今の貴族ですら、彼女の前ではその気品が影を潜めてしまうのではないかと思える仕草である。ユジンも同じ考えなのか、その動きを賞賛するかのうちに小さく「うむ」とうめき声をあげた。

「驚いた、最古式の伏礼ではないか。しかも洗練されていて筆舌に尽くしがたい美しさだ。」

「勿体無いお言葉、至上の喜びで御座います。」

「よい、顔をあげてくれ、シャルルに、フリル。・・・しかし本当に驚いた。まだそのような伏礼をする者がいるのだな。恥ずかしい話ではあるが、王である余ですら見るのは初めてだ。」

バラックの言葉を受けて、シャルルは柔らかく微笑んだ。

「私の育て親が歴史について見聞の広い人だったこともありまして私も少しばかり古い慣習を躰けられたもので御座いますから。」

「そうか、そなたの育て親とやはきつと思慮の深い賢人であるのだろうな。機会があれば是非一度お会いしてみたいものだ。」

「そのようなありがたいお言葉を掛けていただけると、彼にとつてはこれ以上ない幸せで御座いましょう。代わって御礼申し上げます。」

「ああ、いや、良いのだ。そうかしこまらないでくれ。」

「は・・・。」

「あー、うん、これでは進む話も進まなくなってしまうというものだ。どうだろう、この場に限りその仰々しい礼の言葉を省くというのは。」

そういつてバラックはチラとユジンへ目を向けた。

三年前に、自分が王になると共に宰相となった、歴代きつての名宰相と歌われる初老のその男は今回に限ってはどうかやら見逃してく

れるらしい。僅かに俯いたまま、静かに目を閉じている。その女性の気品溢れる所作が頑固な脳を少し軟化させてくれたのかもしれない。

「王のお望みとあらば、承知いたしました。」

「そうか、まあやりにくいとは思うんだがな。すまんが我慢してくれ。」

そういうバラックの言葉にシャルルはクスリと楽しそうに微笑む。なんとも魅力的な微笑みだった。

バラックとユジン、そしてシャルルとフリルの四人は謁見の半分ほどの会議室へと移り、そこに向かい合うように座った。珍しくユジンが部屋の移動を意見し、堅苦しい場が嫌いなバラックとしては願ってもない申し出であったため二つ返事で承諾したのだった。謁見の間だと慣例的に必ず親衛隊がその周辺を厳重に警備するので、情報が過度に知れ渡ってしまう事をユジンが恐れたためである。

この会議室においても親衛隊が警備するのに差はなかったが、狭い室内であるためにその警備は部屋の外に限られる。

密談とまではいかないにしても、大国であるゴランが執拗に追う二人が内包する問題が高度に政治的な問題に発展する可能性は否めなかった。

それに加えて、フリルの異質な髪や瞳の色、シャルルの平民には似つかわしくない振る舞いがユジンの危機感を一層あおった事もこの部屋の移動という事実によく表れており、少なからずバラックにプレッシャーを与える事になった。

「段取りが悪くてすまないな。」

二人と顔を合わせてから既に1時間以上が経過している。

対応が後手後手になっている事は言い訳のしようがない事実であった。

「とんでもございません。バラック殿下とユジン様には本当に良くして頂いておりますわ。」

そういつて微笑むシャルルの顔には気疲れによる翳りは見えない。平民であるというのに王宮というものにまったく気後れしていない。その態度には感心するほかなかった。

一方のフリルの方はというと、未だに僅かに俯いたままその口を閉ざしている。

他の王族が見れば一見無礼な態度のように思えたかもしれないが、バラックにとってはその美しさも手伝って、一層フリルが神秘的にみえるようにする手助けにしかならなかった。

一度はフリルが言葉の喋れない身なのかとバラックは思ったが、部屋を移動する際に何事かシャルルに耳打ちする姿が見て取れた。

何故だか分からなかったが、彼女が喋れると分かったバラックは緊張が和らいだようにホッとしてしまった。

「そうか、それならば良かった。」

バラックもシャルルにぎこちなく微笑みかけた。

王である威厳が少しでも備わっていれば、この優雅な女性に対する時の態度にも余裕をもって臨めるのであろうか。

こんな時でさえ自分の若さを恨めしく思う事に対して、自分で自分が情けなく思えた。

「さて、改めてこちらの用件についてなのだがな、単刀直入に述べさせて頂こう。そなた達二人について、北のゴラン帝国より引き渡して欲しいとの要請を先日受けたのだ。」

そう言いながらバラックは二人の様子をじっと観察した。

横ではユジンも僅かに目を薄めながら二人の女性に視線を投げかけている。

バラックの言葉を聞くと、シャルルは僅かに微笑みを揺るがせたのみで大きな反応を見せなかったが、フリルはさっと顔から血の気を引かせる。

しかし思ったほどの過剰な反応がなかった事に不思議とバラックは安堵した。

ここまで丁重な態度をとってきた甲斐があるというものだ。

何故だか、フリルに嫌われてしまうのは心がえぐられてしまうように痛みを伴う気がした。

「しかし我が国としては急にそんな事を言われても困るのでな、今の所向こうの要求は跳ね返してある。・・・フリル殿、そんな不安な顔をしないで大丈夫だ。我が国としては事情もわからず他国に犯罪者登録もされていない民を売るような真似はせん。我が国はそなたの敵ではない。・・・安心して欲しい。」

横でユジンが不満そうに鼻を鳴らした気がするが、ほっとこうとバラックは思った。

事情があるならば売るのが、事情も聞いていないのに味方などといったってしまうのは軽率なのではないか、どちらをユジンが思ったにせよ、この女性の味方でありたいと思った自分の思いに嘘はつきたくない。・・・理想を追わずにして、どうやったら人心が把握できるというのだと、ユジンに言ってやりたかった。

「・・・はい。」

返事をしたフリルの声は小鳥がさえずっているかのようにか細く、その弱々しさにバラックは一瞬にして心を奪われそうになった。

しつかりしろと心の中で自分を叱咤しながらバラックは言葉を続ける。

一々謁見した美しい女性に心を奪われていては、あつという間に他国の策略にはまってしまう。国と国との戦争の中心に女性がその身をおいていた事など腐るほど歴史の中には存在したし、女性にうつつを抜かした為政者がその身を貶めていった事などそれ以上である。ともすると暴走してしまいそうになる自分の心を抑えるのに、バラックは必死になっていた。

「何故このような事になっているのか、差し支えなければ是非とも我々に教えてくれないだろうか。・・・しつこいようだが、我々はそなたらを守ってやりたいと思っている。特殊な事情があつての事だろう、言いづらい事は想像に難くないが、ここは一つ我々を利用する為の手段だとも思って話してはくれないだろうか。」

誠実な瞳でバラックがそう言うと、シャルルが首を傾けてフリルへと視線を送る。

フリルは先ほどまでと同様その身を固まらせて何かに必死に耐えるようにして顔を青ざめさせており、とても話が出来るような状態には見えなかった。

その様子をみてバラックがシャルルに「どうだろうか。」と声を掛けると、シャルルは改めてフリルに確認するようにその顔を覗きこんだ後、今までとは打って変わって鋭い表情をその顔に浮かべて真っ直ぐにバラックを見つめた。

その表情の変化にバラックは少なからず身の縮こまる思いをしながらも、気丈に視線をシャルルの瞳からそらさずに見つめ返した。

「この度のバラック殿下の心からの丁寧な対応、フリル共々心より感激いたしております。街で聞く噂にたがわぬ誠実なお方であられます事に大変な感銘をお受けいたしました。」

そう言うときシャルルは意を決した様して小さく息を吐いた。

「バラック殿下、これから殿下にお話する事は私めがここに居りますフリルより伝え聞いた事の全てで御座います。フリルが直接お伝えせず、私めがお話いたします非礼をどうぞお許してください。」

シャルルがちらりと視線を横にいるフリルへと向ける。

バラックからみても、フリルが自分に話するのは到底出来そうにない状態のように思えた。

「場合によつては、このフリルがこの国をも巻き込んだ争いの火種となる事もあるかもしれません。・・・それでも、よろしいですか。」

シャルルの鋭い視線に身のすくむ思いをしたバラックであったが、横ではユジンがその瞳の色をいつにも増して光らせ、じっと口を閉じている。

その様子に、国政の師であるユジンの肯定を汲み取ったバラックは重々しくシャルルに頷いて見せた。

例えこの女性の話が国を巻き込む混乱へ踏み込む第一歩であるとし

ても。

ここで躊躇うような姿は、バラックの理想とする王たるものの姿ではなかった。

自分を試すかの様なセリフを吐いたこの女性に、声を大にして訴えてやりたかった。

知っているか、と。

この国の王が即位する時に、なんと行って神に宣誓するのかを。

竜の誇りと、竜の優しさと、竜の強さをこの身に宿し

この国の草一本に至るまでの命に慈愛を注ぐ事を誓う

そういつて、僕は王になったのだ、と。

ドラゴンの観察者・捻くれ者のユジン

20年前にその王子が生まれたときに、ユジンは涙を流した。

王や王妃と同じように、ともするとそれ以上に、心待ちにした王子の誕生であった。

国立の図書館館長として数十年の勤めを果たしてきたユジンは、第一王子の教師としての役目をその誕生の10年以上前から与えられてきた。

いつか会えるであろうと信じた王子は、しかし子どもに恵まれなかった先代の王と5人の王妃達に仕える身であったユジンに予想だにできなかった長い年月の待ちぼうけを強要した。

一向に健康に生まれてくる気配の無い王子を尻目に、どんどんと老いていく自分の体。

ユジンは恐怖し、毎朝の運動と徹底した食事の管理を怠らなくなつた。

必死なその姿に周りから嘲笑が聞こえてきた事もあった。

それ程までにして権力にしがみつきたいのかと。

いわれのない非難にその身をさらされなければならなかった。

しかし、ユジンはその屈辱によく耐えた。

ドラゴンをシンボルとし、高貴なその精神の下に全ての民に慈愛を注ぐとする信念を下地に500年もの長い時を生き抜いてきたこの国が、ユジンは他のなによりも誇りであったから。

一般の民には目にする事の出来ない蔵書の中に埋もれた数百年まえの王達の手記。

その中に綴られた、国政への温かくも情熱的な記述にユジンは一人

涙を流した事さえある。

当時の強国に枯れた大地へとおいやられ、それでも民を捨てる事の出来なかった王がわらをも掴む思いで継った魔法と、ドラゴン。

その時の信念を忘れるべからずとしてシンボルとなった純白のドラゴン。

この美しい生い立ちを持つ国をユジンは愛してやまなかった。

だからこそ、この国を、傾き腐りかけてしまったこの祖国をこれから担っていく王子の誕生に立ちあつた瞬間、喜びと、この王子がこれから経験していくであろう困難の道を思い、ユジンは涙を止める術をもたなかった。

聡明であれ・・・、揺るぐ事の無い存在であれ・・・、何者よりも誇り高い心を持ち続けよと、強要しなければならぬ幼い命の煌きに、嗚咽をあげながら謝る事でしか、ユジンは報いる術を知らなかった。

王が即位する時に神に誓いを立てるように、ユジンは純白のドラゴンに誓いを立てた。

例えこの身を汚す事となっても、例え王子に恨まれようと、この小さな命を守り通し、王たるべき王にする為に、この老いぼれの全てを捧げると。

シャルルという女性のその話を聞き終わり、隣で啞然とするバラック王の威厳にかけた態度を注意する事が出来なかったのは、ユジンにとって不覚以外の何物でも無かったといえた。

しかし、それにしてもこのシャルルという女性の話、どこまで信頼して良いものか。

その存在自体は信じられていても、ドラゴンなどとは・・・。

目の前で必死にその目をつむり思い出の恐怖に震える一人の少女がドラゴンであるとは、ユジンにはにわかには信じがたい話であった。

そもそもドラゴンは人と共に生きようとはしないものであったはずではないのか。

ドラゴンについての深い見識があればこそ、その面影にあどけなさすら残す一人の少女の存在が一層不確かなもののように感じられた。ふと我に返り横に視線をはしらせると、話についていけない様子で目を見張り黙り込むブラック王の姿が目に見え込んできた。

王たるもの、簡単に動揺を表にだすものではない。

「殿下。」

と対応が遅れてしまった事に内心若干の焦りを感じながら、しかし表面上には無感動を装ってユジンはブラックに声を掛けた。

「・・・ああ。すまん。予想だになかった話だったものでな。」

そういつて僅かに咳払いしたブラックは、しかし一瞬で自分を取り戻したようで、心配したほどの動揺も見せずにシャルルに向き直った。

ユジンは無表情を貫いていたが、この若い王のそのような柔軟な姿勢をととても好ましく思っていた。

近親交配が続いた王家においては望むだにおこがましいと思っていた想像以上の聡明さを宿し、何よりも真つ直ぐに、民草を愛する理想の王として成長したこの王が、今はユジンの何よりの誇りである。

「しかしドラゴンとはな、正直な話かなり驚いている。どこからどうみても、人にしか見えぬのだな、その、フリルとやらは。」

ブラックの言葉にフリルは怯えたようにその身を震わせ、一層その顔を俯かせてしまった。その様子をみてシャルルがフリルの頭を優しく撫でる。

「あ、ああ、今のはなんというかその、そなたを奇異の目で見たわけではないのだ。そう、気を悪くせんでくれ。」

フリルの反応にうろたえた様にブラックが取り繕う。

その様子に若い王なりの心の機微を感じたユジンは僅かに鼻を鳴らした。

すぐさまユジンを振り返ったブラックは思いつきり眉を潜めて睨ん

できたが、なれたものである、ユジンはそ知らぬ顔で二人の女性へと視線を注いだ。

「お氣遣い痛み入りますわバラック殿下。ご安心を、フリルは殿下のお言葉に怯えているわけではありません。以前の事を思い出して、少しばかり反応が過剰になっておりますの。」

そういつて安心させるように微笑むシャルルにバラックは目に見えてほっとしたようであったが、ユジンはちっとも面白くない。

なんなのだこの女は、完全に場を仕切ってしまったているではないか。バラックに肩入れするあまり、苛立つ自分の感情に若干の驚きを感じながら、しかし少なからず先ほどのこの女の話で動揺しているのだらうな、とユジンは一步引いて自分の心を見つめていた。

「殿下、少しばかり、私も聞いて見たい事があるのですが。」

今まで押し黙っていたのを破り、重々しくそう告げると驚いたようにバラックがユジンを見つめた。

無理も無い、普段はバラックをたてるように、公の場では極力無駄な発言をしないようにしているユジンが自ら言葉を発しようとするのは、バラックにとってはとても珍しい事だった。らしくもない、王を前にして良いように仕切る女にでも、対抗心を燃やしているのか、とユジンは内心自嘲した。

「・・・構わぬ。申してみよ。」

「ありがとう御座います殿下、では・・・。」

そういつてシャルルとフリルを交互にゆっくりと見つめるユジンの目は、しかしその二人を見ていないかのように焦点が臈げで、簡単には心の動きを読めない類のものであった。

「まずは最初にお二方には不躰な質問になるかもしれない事を、先に謝らせて頂きます。」

そう言つと、シャルルはさもありませんといった様子で頷いて見せた。「構いませんわ。にわかには信じがたい話であること、重々承知いたしております。」

「結構。ではまず一つ目は、そのフリル殿がドラゴンであるという

事の証明。今この場でする事は出来るでしょうか。」

「ユジン！」バラックが驚いたようにその腰を浮かせとがめるような目つきでユジンを睨んだが、ユジンはその行動には目もくれずにシャルルとフリルを見つめ続けた。

「聞くに魔法とやら、今はフリル殿は意識的に扱う事が出来ないそうですが、そうですね、ゴラン王がやっていたように、その身を傷つけ一瞬で再生する様など、見せてはいただけないだろうか。」

「ユジン！いい加減にしろっ！」

バラックは怒り心頭といった様子で拳を机に叩きつけた。

「失礼にも程がある！この様に青ざめた顔をしたフリルを見れば嘘をついているかどうかなど一目瞭然であろう！？ましてやその身を傷つけてみよなどと・・・っ！如何に宰相といえども余の前でそれ以上民を貶める様な発言は許さん！！」

しかしユジンはバラックの様子にも動じる事無く、冷え切った視線をバラックに向けた。

「殿下、民を信じようとするその心構え、大いに結構。しかしこの少女の怯えが演技ではないとどうして言い切れます。殿下はもう少し自分のお立場というものをわきまなされた方がよろしい。今回の事に限らず、弱い者の立場をもってして殿下のそばへ近寄ろうとする者はこの先必ず現れる事でしょう。目の前の事に捕らわれるあまりに、他の多くの民の命運を危険に晒すだけのお力をその身にお持ちになっておられる事、よもお忘れになつてゐる訳ではありません。すまい。」

そう言いきつたユジンの表情は鉄のように微動だにせず、二の句を接げなくなったバラックは傷がつくのも忘れたように唇をかみ締めた。

これで良いのだと、ユジンは思う。

どこまでも純粹で、慈愛に満ちた王に出来ぬ仕事は、その汚れは自分全て負う。

今更たつたふたりの民に恨まれる事など、僅かほどにも心を動かす

力とは成り得ない。

「あの、構いません……。」

うつかりすると聞き逃してしまいそうな細い声に、にらみ合っていたユジンとバラックは同時に顔を向けた。バラックは素直に衝撃をその表情に浮かべ、一方のユジンは鉄のような無表情のまま。

二人に見つめられたフリルは怯えたように目線を左右に躍らせたが、しかし今度は俯く事はせず、しっかりと背筋を伸ばしていた。

「フ、フリル、無理はしなくて良いのだ。私は……、私はそなたの話を疑ってなどおらぬ。理屈ではユジンの言っている事も確かであるう。だが……。」

「ありがとうございますバラック殿下……。でも、私、大丈夫です。」

そう言うフリルは初めて僅かにバラックへと微笑みかけた。

呆氣にとられたように呆然とするバラックから視線をはずし、おもむろに立ち上がると、フリルは静かな表情でユジンを見つめた。

その表情の中に先ほどの怯えた様子は伺えず、凜とした光りを瞳に湛えている。

その変化に少女の奥底にある強さを見たようで、ユジンは内心この少女への評価を改めた。

存外、しっかりとした精神の持ち主なのかもしれぬ。

「何か、刃物をお借りできますでしょうか。」

「フ、フリル……。」

動揺するバラックを尻目にユジンは立ち上がると、自身が腰に下げていた一振りの銀製の短剣をフリルへと渡した。

シャルルは声を発する事も無く、しかし強い視線で持つてしてフリルを見つめていた。

「ありがとうございます。」

そう軽くユジンに会釈すると、フリルは躊躇いなどは微塵も感じさせず一気に

その左手を切り落とした。

——部屋にバラックの悲鳴が木霊した。

ユジンでさえ、まさかこの少女がそこまでの行為に出るなどとは思ってもおらず、言葉を失った。

バラックの悲鳴を聞きつけた近衛兵が慌てて部屋に殺到した時に、その部屋の中では

何も起きていなかった。

ただ呆然と、バラックとユジンが言葉も無く立ち尽くし、シャルルが僅かに目を見張ってフリルの手元を見つめている。

件のフリルはというと激痛に耐えるようにしてその顔を歪め、左の手首を苦しそうに握り締めていた。

時が止まったかのような部屋の中の状況に困惑した近衛兵達であったが、しかし素早く巡らせた視線の隅にフリルの足元へと落ちている短剣を目に止めると、数人が同時に剣を抜いてフリルへと殺到しようとした。

「止まれ！」

突然の怒号に近衛兵達は飛び上がるようにしてその動きを止める。

一瞬誰が発した声なのかが分からなかったが、どうやらいつも寡黙を貫き通している自分達の宰相が発した声らしいという事に気付くと兵達は素直に表情を驚愕させた。

「よい、何も危険な事は起きておらぬ。下がれ。」

無然とその表情をしかめながらそう言い放つ宰相に驚きながら、しかし部屋の中の異様な空気を感じ取った兵達は困惑したように顔を見合わせた。

「ユジンの言うとおりだ、何も心配はいらぬ。下がっておれ。」

そうバラックが息も絶えだえといった様子で兵士達に声を掛けると、兵士達は訳が分からないといった様子で、しかし無言のままバラックとユジンに頭を垂れ、ようやく部屋から静かに出て行った。

「信じ難い……。血すらも、こぼさぬのか……。」

バラックが驚愕に目を見開いたままフリルの手首に視線を釘付けにした。

「……。」

ユジンも無言のまま改めてフリルの手元を見つめる。

その手首には傷の一つすら見当たらず、上手い手品でも見させられたような感覚だった。

しかし、このフリルという少女は、確実にその左手を切り落としていた。

ユジンは確かに少女の左手に自身の短剣が食い込み、血が飛沫となつて吹き出る様を見た。

少女の左手が一瞬間に浮き、その体から切り離される様を確かに見た。

だが、これは一体なんの冗談だ。

僅か一瞬の後に、切り離された少女の左手と吹き出た血は砂のように霧散し、気付いたときには行為に及ぶ前となんら変わらない様子で元の通りに存在していた。

「これ程の……。」

これ程のものなのか、失われた魔法というものは。

かつて始祖と呼ばれる一人の女性が完成させ、しかしこの国が一人で立ちあがれるだけの力を備えたと同時にその全てを持って、深い山中へとその身と共に隠してしまったとされる魔法。

具体的な記述は今となつては殆ど見る事は叶わなかったが、その力は乾いた大地を一時と経たずして緑溢れる楽園へと生まれ変わらせ、山あいの土地に広大な平野を生み、万もの軍勢を一瞬にして退けたという。

しかし、今の今迄ユジンはその描写を頭からは信じていなかった。

大方、当時までは人と共にあつたとされるドラゴンでも使役した話が手を加えられたもので、実際には魔法というものは存在すらしなかったのではないかとすら考えていた。

ドラゴンに関しては實在している事は疑いようが無かったが。

最近に至るまでもその目撃例が後を絶つ事は無かつたし、実際にその頭骨などが発見される事も稀にある。

今まではその真偽を疑っていた魔法の一端を目にした事で、自分の培ってきたものの一部が音を立てて崩れていくような衝撃をユジンは感じた。

「これで、信じて頂けるでしょうか。」

そう小さな声で呟くフリルの声に我に返ったユジンは、それでも一瞬でそれまでの驚きをその顔の下にしまいこむと、僅かにフリルに頷いて見せた。

「改めて非礼に対してお詫び申し上げます。」

ユジンの言葉を聞いたフリルは微笑むと、床に落ちていた短剣を拾い上げ、刀身を持ってユジンへと差し出した。

「お返しいたします。ありがとうございました。」

「・・・。」

黙ったままそれを受け取ると、ユジンは無表情のまま元の席へと戻った。

バラックはというと、戻ってきたユジンと目があってようやく我に

返った様で慌てて浮かせていた腰を椅子へとおろす。

しかしその表情は未だ呆然としており、目の前で起こった事がうまく飲み込めていないようであった。

「貴女がドラゴンであると言う事に関して、信じる事にしましょう。」

そう言うフリルは頭を下げ「ありがとうございます」と礼を言った。

「ですが、そうなることややはり不思議に思う事がある。そもそもドラゴンは数百年前に人から決別した、と聞いた事がある。実際にこの国が建った500年程前を境にしてその姿は突然深い山中へと消え、見る事も叶わなくなつた。何故今になって、貴女は人の世界へと降りてきたのだろうか。しかもそれ程悲惨な目に遭いながら山中へ帰ろうともなさらない。」

ユジンの言葉に、それまでの凜とした態度を再び奥へと仕舞い込んでしまったようにしてフリルが俯く。

「それは……。」

ユジンは言いよどむフリルの事を静かに見つめた。フリルは数瞬迷つた様に身をよじらせると、おずおずといった様子で口を開いた。

「私にも……よく分からないのです。」

「……分からない？」

「はい……。」

そう言うフリルは申し訳無さそうに眉をひそめ、泣きそうな表情になつた。

「私が気付いたときには、とあるお方の部屋で寝かされていました。それまでの記憶は一切ございません。初めは言葉すらもわからず。

そもそもお前はドラゴンなのだと言われても、それが何なのかすら私には分かりませんでした。」

「……失礼ですが、その方の名を聞いてもよろしいか。」

「……グロアー様と仰います。」

「……グロアー？」

ユジンにはその名前に聞き覚えがあつた。

たしか・・・、最近暗殺されたというボルドの高官の名前ではなかったか？

ボルドはその高官の暗殺に神経を尖らせ、先日遂にチャンツへと続く街道の封鎖を断行したと聞いている。

「グロアー様は私をボルドの西のオベリウス渓谷で見つけてくださったそうで、右も左も分からなかった私の事を引き取ってくださいませんかです。」

「・・・。」

フリルの表情が見た目にも柔らかくなる。よほど、そのグロアーとやらを信頼していたのであろう。フリルのその無垢な態度に、ユジンは柄にもなくその少女を哀れに思った。

恐らく、その男の死を知らないのではないだろうか。

そこまで考えてユジンは、その高官が暗殺された背景にこのフリルとやらが絡んでいたのであらう事に思い至った。

「だから、私は人の世界に自ら降りてきた訳ではありませんし、普通の人と同じようにこの世界以外知らない私には、到底ここからどこかへと去る事など、考える事が出来ないのです。」

そういつて、フリルは俯いた。

「・・・。」

「ユジン。」

いつの間にか先ほどの光景のショックから立ち直ったブラックが、ユジンの事を見つめていた。

「もう、良いだろう。」

先ほどまでの怒りや苛立ちに任せた様子とは打って変わって、ユジンが誇りとする知性的な表情をたたえたブラックは静かにそう言つて、フリルを見つめた。

「フリルは嘘は言っておらぬ。余はそなたから見れば経験も、思慮も浅い王であらうが、これだけは分かる。」

力強く、しかし淀みない声でそう告げるブラックの瞳には強い意思

の光りが見て取れ、ユジンは心躍るような、しかし一抹の不安も残るなんとも言いがたい思いに胸中を満たされた。

「そうですね……。それにもう大分長い事お二人をつき合わせ、てしまった。……。殿下、この後の事はまた追々相談する事にして、お二人に休んで頂いては如何でしょうか。」

「もとよりそのつもりだ……。ユジン、侍女達に良い紅茶でも用意させてくれ。疲れには甘いものが良いと聞く。ハチミツも良いものがあれば用意するように伝えてくれ。」

「は……。。」

紅茶、と聞いた途端にフリルがビクンと大きく反応したように見え、たのは、気のせいだろうか。隣のシャルルとやらも不思議そうな顔をしてフリルの事を見つめている。

……。まあ、たいした事ではあるまい。

……。

冷や汗をかいている……。。

……。侍女にフリル殿の反応を見せて、苦手なようなら無理をさせないように伝えておかねばならないな、とユジンは小さくため息をついた。

それから数週間の後。

ユジンは非公式ながら、数名の護衛と共に単身ボルドへ訪問を行っていた。

あれから毎日のように、ゴランからフリルを引き渡せとの催促を受けている。

たかだか使者風情に「貴国がその様に非協力的であられるならば、ゴランはいかなる手段をも禁じ得ない」などと屈辱的な言葉を吐かれる有様だった。

国力的に圧倒的にゴランに劣るダグラスは、間にボルドという豊か

な国力を持つ中立国を挟まなければ、とうにゴランに侵略されていてもおかしくないとかねてより噂されていた。

はからずも一応は公式の場で、そのような立場と認識を示されたバラックは怒り心頭といった様子で「そちらがその様な態度であるならば、我が国も誇りをかけて対応させていただく」等ときわどいセリフを叩きつけてしまっていた。

バラックも何も考えずにその様なセリフを吐いたわけではないだろうが、おそらく頭の中にあるのはボルドとの中立条約があつてのとだろう。

しかし確かにボルドはゴランにとってある種良いいけん制になっていると言えたが、完全であるとは言いがたい。

もとよりゴランは軍事力によって成り立っているような国であつたし、何よりも今はチャンツと非常に結びつきが強いと聞く。

同じようにダグラスから独立していったボルドとは違い、一般の市民達が寄り集まって形成された珍しい体勢の町はダグラスへの思い入れが些か弱いことで知られていた。

大陸の流通の中心地であるチャンツがゴラン側に回ってしまうとなると非常に痛い。

ユジンとして見れば一も二もなくチャンツと何かしらの形で条約を結んで起きたいところだったが、ボルドが難くなにチャンツへの警戒を高めている事が災いした。

今ここでチャンツとダグラスが条約を結べたとしたら、今迄友好的な関係を結んできたボルドがどの様な反応を見せるかが未知数だったのだ。

最悪、全てを敵に回してしまいかねない。

ゴランの王が暗殺されたという話がゴランに放っている密偵から流れてきている、国内の情勢は混乱を極めているだろう事が容易に予想された。

もしも・・・、もしも国内の混乱を外へ向けさせる事で緩和させようという思惑がゴランの中にあるとしたら、ゴランがチャンツとの

友好な関係を築いている今、たった一人の少女をきっかけとして国家間の争いに発展してしまう可能性は十分にある。

冗談ではない、とユジンは思った。

あの少女は守ってやらねばならぬ、そうは思っている。

そこはバラックと考えは変わらない。

しかし同時にユジンは戦争というものを知っていた。

数十年前におきたファルデル、ゴラン、ダグラス、そして西方の大国ジラルード王国の四国がヨレンジヴァ丘陵地帯において幾度も激戦を繰り広げた大戦であった。

戦争の中で傷つくのは民だ、とユジンは使者との会談を終えたバラックを叱り飛ばしていた。

珍しく声を荒げる様子にバラックは驚いたようであったが、しかし彼なりに熟考しての対応ではあるのだろう。結局意見は平行線のまま、どつちつかずの状態でまとまる事は無かった。

バラックは、仮にこのままゴランの思惑道理に事を運んだとしても、お互いの国の立場を決定付けてしまうであろう事に危機感を持っているのかもしれない。

もつともであろう。ユジンとて、ゴランの犬になりさがるつもりは毛頭ない。

このままでは対応が後手に回ってしまう、日に日にユジンは危機感を募らせたが、そんな折にバラックよりボルドを訪問せよとの下知が下った。

ユジンは反対した。

今ここでボルドとの不穏な動きを見せればゴランに開戦の格好の口実を与える事になる。

バラックがボルドと一度正式に話し合いの場を持ちたい気持ちも良く分かる。

不安定な状況のままではゴランに対して下手にでるしかなくなってしまう事は勿論であったし、何よりも彼にとってはグロアーという男の情報が今は喉から手が出るほどに欲しいのだろうと思う。

バラック殿下は、フリルという少女に恋をしている。

ユジンはそう感じていた。

「八方ふさがりとは、この事が・・・。」

王を、民を、国を愛しているユジンは己の不甲斐なさが情けなくて仕方がなかった。

バラックの即位から数年の間、もつと先を見越して行動していても良かったのではないか、と自分を責めた。

非公式な訪問であつたとしても、恐らくゴランはこれを機に「ダグラスに不穏な動きあり」として軍備を増強させるだろう。

一気に軍備需要を高める事で国内を活気づかせ、交易によって一層チャンツとの結びつきを強固なものとして。

動きだしてしまつたからには、止められない。

若い王を諫め切れない浅はかな自分が、殺したい程に憎かつた。

深い溪谷を抜け、視界の隅にボルドの街並みが映つた。

ユジンにはそれが、これから母国を死地へと誘う死刑場のように思えて仕方がなかった。

ドラゴンの始祖・Unknown?

ドラゴンと共に生きたいと願った。

それは許されざる願いだったのだろうか。

人ならば人と、ドラゴンならばドラゴンと

分相応に生きる事をモラルと呼ぶのだろうか。

この望みを人に話すと必ず奇異の目を向けられた。

下卑た笑いを浮かべる者すらいた。

口汚く罵られる事もあった。

狂っているとしか言い様が無い、そう言われ続けたとしても

私はその話を口に出さずにはいらなかった。

ドラゴンの事を思い浮かべると心の中が真っ白に光る。

白い光りに心の中の雑多なものは塗りつぶされて、とても幸せな気分になる。

優しいドラゴン、美しいドラゴン

誰かにこの気持ちを話してしまわないと気が狂いそうになってしまう。

心の中が喜びで溢れ返り、他の何もかもを考えられなくなってしま
う。

誰か聞いて

私のドラゴンの話を

誰か理解して

私のドラゴンの美しさを

誰か救ってあげて

愚かな私が救えない

私の可愛いドラゴンを

——私は、ドラゴンを殺した。

——私が、ドラゴンを殺した。

「始祖様！？わお！お帰りなさいませ！」
そう言いながら息を弾ませて駆け寄ってくるクルトに、私も微笑みながら手を振った。

「今回は早いお帰りでしたのね！みんな始祖様のお帰りを心待ちにしておりましたわ。」

「あら、私がない方がのんびり出来るんじゃないの？クルトも少し見ない間に随分肌の艶が良くなった気がするわ。」

笑いながらそう言うと、クルトは頬をプクッと膨らませて上目遣い

に睨んで「冗談はやめてください。」と言い返してきた。

「始祖様がいた方が皆嬉しいに決まってるじゃないですか。それに肌の艶が良く見えるのは……えーっと……。」

「良く見えるのは、怠けてご飯食べてばかりいたからでしょう？」

「……っ！？」

ボンと音のしそうな勢いで顔を赤くしたクルトは「え……え！？そ、そんなに！？」と自分の顔やお腹、二の腕を次々とさする。

その様子が可笑しくて思わず嘔き出すと、湯気でもでそうな程に首まで真っ赤になったクルトは、顔を泣き出す寸前のようにクシャクシャにした。

「か、からかわないで下さい始祖様！肌の調子が良いのは……その……そう、栄養をしつかりとる様に気をつけて生活を送っていたからです！無茶な修行も控えて夜も早く寝るようにしましたし！……言い方を変えただけって気もするけど。」

「そ、そそそんなことはありません！」

「ふーん……。」

「何で私のお腹を見るんですか！？や、やめてください！」

「暫くはブッチに生の野菜だけ出して貰う事にしようかしらね？」

「そ、そんな……。」

意地悪く口の端を吊り上げて笑うとクルトはガックリ方を落としてうなだれた。

「も、もう、いつその事しばらく断食します……。」

「あら、下手に断食なんかするとリバウンドも怖いわよ？美容にも最悪。」

「……っ！ど、どうしろって言うんですか！」

う”ああああ、とクルトが頭を掻き毟って絶叫した。私はその様子にまた声をあげて笑いながらクルト抱きしめた。

「冗談よ冗談。……ただいまクルト。寂しい思いさせたわね。あなたが想っていてくれたのと同じ位、私もあなたに会いたかったわ。」

「・・・お帰りなさいませ始祖様。・・・ただか帰還のご挨拶をされる程度の事の前に、余計な事を言い過ぎですよ。」

そう唇を尖らせるクルトに微笑みかけると、クルトは照れたように下を俯いてモジモジと身をよじった。

「お帰りになられるなら、水呼びでもして教えてくだされば良かったのに。きつと皆驚きますわ。ヴァンスだつてきつと部屋をぐちゃぐちゃにしているでしょうし、ブッチも腕によりをかけた料理でお出迎えが出来なくてがっかりしてしまうわ。ノワールは課題の呪文すらまだ覚えていないし、ヨーンは馬を洗ってやるのをサボっているからきつと真つ青になるでしょうね。」

「・・・聞かなかった事にするわ。そうね、ブッチの話以外は。」クルトはクスクスと笑い声を上げると「あ、そう言えば」と言いながら肩から提げていた鞆の中に手を入れ、ゴソゴソと暫く探った後に固そうな銀色に輝く薄い石のようなものを取り出してみせた。

「あら、鱗？」

「ええ、ホッジスのものです。」

「来てたの？もう帰ってしまったのかしら？」

そう聞くとクルトは少し困ったような顔をして首を左右に振った。

「それが、よくわからないんです。」

「わからない？」

「ええ、二日ほど前に急にいらっしゃって始祖様はいるかつて聞いてきたんです。今はダグラスに出掛けていらっしゃるのではありませんとお伝えしたら、また来ると言つてどこかへ行つてしまわれて・・・。」

「ふーん・・・。珍しいわね、いつもは一度来たら必ず何日か居座るのに。」

「ええ、それに事前に何もおっしゃらずにいらっしゃる事なんて今まで一度もありませんでしたし・・・。」

不思議そうに首を捻るクルトを抱擁から開放してやり、淡く光り輝くその鱗を受け取るとすぐさま違和感に気付いた。

「・・・あら？これ成長痕？ホッジスが魔法を使ったの？」

「え？どこです？」

「ほらここ、小さいけど縦に傷が入っているわ。これ成長痕でしょう？」

「・・・あ、本当だ。全然気付きませんでした。」

目を丸くして覗きこんでくるクルトに、鱗の裏側を指で指し示してやる。

鱗の裏側には縦に爪で引つかいたような傷が数本小さく刻まれている。

ドラゴンが成長した時に、その急激な変化に耐え切れずはがれる鱗に観察される独特の引つかき傷だった。鱗の大部分は魔法の使用時に剥がれ落ちてしまうはずだったが、大方たてがみにでも絡まっていたのだろう。鱗の光り具合からみてもそう古いものには見えない。

「・・・おかしいわね。ホッジスはもうそろそろ魔法を使ったら危険でしょう？」

「うーん、そうですね・・・、鬱傾向も見られませんが、不用意に魔法など使うはずもないと思うんですけど。」

「そうよねえ。」

「むう？」

クルトが傾げていた首をさらに倍近く傾けて、頭をほとんど横倒しにしたまま不思議そうな顔をした。

「何か緊急の場面にでも遭遇したんじゃないんですかね？」

「そうねえ・・・。想像もつかないけど、あのホッジスが慌てて魔法を使っちゃう場面なんて。」

「むう。」

暫くそうして唸った後、クルトは「まあまたいらっしやるのを待ちましようよ。」と言って気持ちを切り替えたように笑顔を見せた。

「それよりもまずは皆に声を掛けてやって下さい。突然のご帰還で慌てると思いますけど、皆喜ぶはずです。」

「・・・そうしましょうか。ここで突っ立っていても謎が解けるわ

けじゃないしね。」

「水呼びで知らせますか？」

クルトが首からかけた、水が僅かに入れられた小瓶を持ち上げてそう聞いてきたが、私は首をふって微笑んだ。

「いいわ。直接顔を見せて驚いた顔でも鑑賞しましょう。」

「あら、弟子いじめが過ぎるとその内しっぺ返しが怖いですよ。」

「それが楽しみでこっそり帰ってきたのよ。仕返しが怖くてやめられますか。」

クルトと二人で笑いあつて、私は弟子達が待つ小さな小屋へと足を向けた。

ホッジスが何の用事だったのかは気になるけれど、今はそれよりも弟子達の反応が早く見たくて仕方がなかった。

「それにしても、始祖様も人が悪い。帰ってくるなら先に教えてくだされば良いのに。」

そういつて、ヨーンが何度目とも分からないセリフでばやきながら頭を掻いた。

「たまには私がない時にあなた達がどんな生活をしているのか見てみたくてね。それにこういう事もあった方が私の留守中にも緊張感があつて良いんじゃない？」

ダグラスから帰ってきたその晩、私は久々に会えた弟子達に囲まれながらささやかな宴を開いて貰っていた。

急な帰還であつたにも関わらずブッチはその腕を存分に振るつてくれて、6人で囲むには少し狭いテーブルに所狭しと料理が並んでいる。ヨーンにあつた時は「げ」と言つたまま固まつた様子に笑わせてもらつたし、ノワールが「ああ」といつてよろめいたのも面白かつた。予想どおり冷静だつた小食のヴァンスはというと、今は早々

に食事を終えて、ブンパと呼ばれる弦楽器を持ち出して音楽を奏で
てくれている。その音楽を聞きながら弟子達と食卓を囲むこの一時
が、私にとって何よりも楽しい時間だった。

「たまにはって仰るなら、それこそたまの息抜きは素晴らしい人生
のスパイスですよ。」

「ヨーンは私が居たって十分過ぎるほど息抜きしているように思う
けど。」

そう言う私の隣に座ったノワールが「違いねえ」と言っって大きな
笑い声を上げた。

「笑うなよノワール。お前だって結局始祖様のお帰りまでに風詠み
の呪文を完成させられてないだろう。おあいこだおあいこ。」

「俺はお前と違ってサボったわけじゃないんだがな。人間得意不得
意はあるもんだ。怠けてる奴と同じにして貰っちゃ困るぜ。」

笑いながらノワールにそう言われると、ヨーンは憮然とした表情の
ままブッチお手製のシチューを啜った。どうやら降参したらしい。
その様子を微笑みながら見ていたブッチが、丸く愛嬌のある顔を私
に向けて口を開いた。

「それにしても今回は本当にお帰りが早かったですね。いつものよ
うに一月はまるまる帰っていらっしやらないものだと思っ
ていましたよ。」

「ああ、そうね。私も初めはそうなるもんだと思っ
てただけど。今回は用件がいつもと違ったのよ。」

「魔術指南ではなく？」

クルトが不思議そうな顔をして聞いてくる。私はクルトに頷いてみ
せると、手に持ったグラスをテーブルにおいてダグラスで伝えられ
た用件について弟子達に話し始めた。

「正直なところあなた達に伝えるべきかどうか迷っ
ただけだね。どっちみち事が動き出したらあなた達もすぐに分かる事だから話
しておくわ。」

「・・・何か良くない事でも？」

私がそれまでのリラックスした表情を固くして居住まいを正すと、少し不安そうにノワールが真面目な顔をして私に聞いてきた。

「そうね、いい事ではないわ。・・・結論から言っちゃうと、ダグラスに戦力として召集する旨を伝えられたわ。」

「・・・は？」

「そんな馬鹿な!？」

ヨーンが目を大きく見開いてテーブルから立ち上がった。他の弟子達も口をポカンと開いて、一様に驚きを隠せない表情で食事の手を止めた。

「それは話が違う!人殺しの手助けなどに使うために私達は魔法をダグラスに提供してきた訳ではないじゃないですか!」

動揺を隠しもせずに声を荒げるヨーンを目で制すと、納得のいかな表情でヨーンは黙り込み、勢いをつけて腰を下ろした。ヨーンの気持ちはよくわかる。人に危害を加える目的で利用しない約束のもとに、毎年の魔術指南や技術提供を行う事、その代わりに国家からの基本的な干渉を一切免除される事がダグラスとの契約だった。私が資金提供をしている孤児院への税の免除も契約の一部だった。今回の訪問で言い渡された下知はその契約をまったく無視するものであったし、向こうの態度は脅迫といっても差し支えないものだった。

「私もすぐにその申し出は拒否したわ。だけど向こうはアイン孤児院への運営許可の取り消しをちらつかせてきた。卑怯な真似されて腹が立つたけど、30人からの兵士に囲まれちゃってね。部屋に入って不審に思った時点で踵を返しておけば良かったわ。」

そう聞くとノワールは獣のように唸り声をあげ、ブッチは信じられないといったように首をふった。

「ひどい・・・あそこは今やダグラスで一番の・・・、ううん、この大陸一番の大きな孤児院なのに。あそこが閉鎖されちゃったら今以上に街は孤児で溢れ返っちゃうわ。・・・戦時の街なんかに放り出されたら、何人死んでしまうかわからないのに。」

クルトが目には涙を浮かべてそうつぶやくと、ヴァンスも眉をひそめて頷いた。

「始祖様、10年前に貴女がたちあげた院を潰させるわけにはいきませんが・・・、ダグラスの申し出、お受けになったのですか？」
そう聞いてくるヴァンスに首を振って答えると、ヴァンスは複雑な表情で俯いた。

「今の所すぐに院をどうにかしようって訳じゃ無さそうだったからとにかく急に言われても困るって突っぱねて急いで帰って来たの。でもいつまでも保留にしておける問題でもないでしょうね・・・。
戦況はかなり悪いみたいだし。富裕層には移動の準備を始めている者もいた。下手するとゴランに市街戦にまで持ち込まれるんじゃないかって噂で街は持ちきりだったわ。いよいよ追い込まれた上層部の誰かが私達の事を思い出したんじゃないかしらね。」

「ダグラスには、いつまでにお返事を？」

「三日後。」

「たった三日・・・。」

「ええ、騎士団が大勢で返答を迫りに来る予定になっているの。」

「急すぎる・・・。こんな事じゃ別の案を考える暇もない・・・。」

私の言葉を聞いて弟子達は口々に嘆いた。

その中で、黙って考え込んでいたノワールがおもむろに声をあげた。

「始祖様。」

「なに・・・？ノワール。」

「私は・・・招集に応じるべきだと思います。」

真剣な顔で私にノワールがそう言うのを聞くと、ヨーンが信じられないといった表情で大声を上げた。

「ふざけるなノワール！そんな簡単に決めていい事か！下手に魔法など戦に持ち込めばどれだけ余計な死者が増えるかわかったもんじやない！」

恐ろしい剣幕で怒鳴り立てるヨーンを見つめ、ノワールも表情を悔しそうにゆがめた。

「では、どうしろと言うんだ。俺達が召集に応じなくとも、どうせ多くの人が死ぬ。ましてや孤児院の子供達を人質に取られているんだぞ？あそこで暮らす子ども達は今や1000人を越えている。見捨てるって言うのか。」

「違う！何のために今迄修行を積んできたんだ！誰もが幸せになれる方法を探さずしてどうする！」

「綺麗ごとをいうなヨーン。魔法は万能じゃない。魅了をかけるにしても、あれは一度に大勢には無理だ。それに敵国への対応はどうする。のこのこと出掛けて行って魔法をかけるつもりか？無駄死にするのがオチだ。お前こそ固い考えに縛られているその頭を少しは回して考えて見たらどうだ。」

「てめえ！好き勝手言わせておけば！！！」

「なんだよ、やるのかこの野郎。」

「やめてよヨーン！ノワールも！」

「やめなさい二人とも！」

ヨーンがテーブル越しにノワールに掴みかかろうとした瞬間、クルトと私が同時に声をあげた。

派手な音を立てて食器が床におちて割れる。

私とクルトの制止になんとか踏みとどまったヨーンはノワールを睨みつけたまま立ち尽くした。

ノワールも暫く無言でヨーンを睨むと、いらいらした様子で黙ったまま床に落ちた皿を拾い始めた。

「・・・二人の考えはどちらもよくわかるわ。私も道中ずっと考えていた。」

そういつて一つため息をつき、私は組んだ両手に額をあてて俯いた。弟子達は黙って私に顔を向け、私の言葉を聞き漏らすまいとするように身を固くしていた。

「でも、決められないの。どうすれば一番良いのかわからない。私が術を系統立てて完成させてから、まだ20年とたっていない。も

しここで魔法を戦争に用いる前例をつくってしまえば、これから魔法は人を殺し続けるものになってしまうかもしれない。魔法で人を殺すのは簡単よね。風を細く糸のようにして叩きつければ、私一人でも上手くやれば一個大隊くらいなら半刻とせずに斬り飛ばせるでしょう。ダグラスは私達がどの程度の戦力になるかは測りかねているみたいだけど、魔法の応用の仕方を示してしまえば確実に味をしめてしまうでしょうね。」

それみた事か、というようにヨーンが改めてノワールを睨み付けたが、ノワールは鼻をならして相手にもしなかった。私はヨーンに諭すように視線を向けて、ヨーンが俯くのを確認してから話を続けた。「私達が参戦すれば魔法によって多くの人が死ぬ。魔法もそういうものとして人々の記憶に刻まれる。きっとこの先、悪用しようとする者は後をたたなくなるでしょう。・・・それでも・・・それでも私達が見捨てればダグラスは壊滅する。多くの人が殺され、女達は蹂躪される。子どもは奴隷として売り飛ばされ、一人として幸せになる事は叶わなくなるでしょうね。私達はゴランに捕らわれ、処刑されるか研究対象として物のように扱われる。拷問でも受けて魔法について喋ってしまえばどの道悪用されるでしょうし。」

拷問、という言葉聞いたクルトが顔を真っ青にして震えた。もし、そうなった時に一番むごい目にあうのは若いクルトの可能性が一番高い。安心させるようにクルトに微笑みかけると、私は弟子達に向かって頭を下げた。

「情けない師で、ごめんなさい。少し考える時間を頂戴。そして、もし私の決定があなた達の考えるものと違ったとしても、私を信じて。決して私から離れないで。」

もう一度「ごめんなさい」と謝ると、弟子達は皆悲しそうに呻いて俯いた。

結局その後は誰も口を開かずに、だまだまと料理を食べるだけになっってしまった。

誰もが同じように難しい顔をして、食器の音ばかりがいやに鮮明に

響く様が静けさを際立たせているようで、私も悲しかった。
どうすれば、皆が幸せになれるのか。

いつまで考えても、私は一向に正解を見つけることが出来なかった。

その晩夜遅く、隣の粗末な寝台に横になっていたクルトが静かに寝息をたて始めたのを確かめると、私は静かに布団から出て小屋の外へ出た。

頭の中ではダグラスの王宮で告げられた召集命令の事がグルグルと巡り、一向に寝られそうになかった。

上着を肩にかけて来たとはいえ、まだまだ寒さの厳しいこの季節に寝巻き姿では、いささか心許ない。しかしわざわざ着替えに行くのも馬鹿らしい気がして、結局カタカタと震えながら我慢する事にした。

「本当に、どうすれば良いのかしらね。」

そう呟くと、冷え込んだ外気に当てられた息が白く彩られてユラユラと宙をただよう。

真っ白に色づくその様子がドラゴンの吐くブレスのようで、なんだかとても綺麗に見えた。

「・・・ホッジスならなんて言うかしら。」

戦ってはいけない！とか言ってくれるかしらね。

そう言っただけならば、私はこの戦争への参戦を踏みとどまれるのだろうか。

正直まだ自分の心の中がはっきりと決まっていなかったのでホッジスに意見をされればそちらに傾いてしまうようにも思う。

簡単に決めるはいけない事だからこそ、自分で決断する事を避けているようで情けなく感じた。

「・・・ホッジス。」

私の愛した美しい年老いたドラゴン。

数多のドラゴンの頂点の一角に立つ思慮深い彼に無性に会いたくて仕方がない。

青い瞳、青いタテガミ。

見ているだけで、心が透きとおるような気持ちにさせられる。

人の何倍もの時間を生き抜いてきた彼には、昔から人の世界に絶えない争いを見てどんな感慨が浮かぶのだろう。

馬鹿らしいと嘲笑するだろうか、それとも嘆いてくれるのか。

私も、争いを巻き起こす者の一人と思われているのだろうか。

もしそうだとしたら、それがどんな感情に派生する認識だとしても耐え難い。

愛するものに自分の醜い部分をさらけ出して羞恥を感じぬほど、私は強くない。

出来る事ならば、彼の前くらいでは美しい自分で生きていたい。

けれどそう思う事事態がひどく醜い感情のようにも思えて、やはり自分がドラゴンとは程遠い存在なのだと深く落胆する事しか出来なかった。

・・・いつの頃からだろう？

ドラゴンに憧れを抱くようになったのは。

いつの頃からだろう。

ドラゴンと共に生きたいと願うようになったのは。

物心がつく頃には父様のドラゴンに関する書物を読み漁り、目を輝かせていた。

人から遠くはなれて生き、滅多に姿を見せない彼らに何とか会う方法は無いものかと頭を捻り、彼らが使う魔法に行き着いた。

数少ない、魔法を目の当たりにした人物を何人も訪ね、王立の図書館の書物を片っ端から紐解いた。

決して裕福ではなかった私の家の台所事情ではあったが、優しい父様と母様はいつも私の夢を笑わずに力をつくしてくれた。

齡10にして神童ともてはやされ王立大学校に特待生として招かれてからは、一般の民衆が決して目にする事ができない禁書にも数多く触れ、15にして魔法の基礎を築く事ができた。

あの日、水呼びを初めて成功させてドラゴンを呼び寄せた日の事を今でも鮮明に覚えている。

銀色に光り輝く大きな満月を背に私の家の庭へと舞い降りた美しい銀竜。

柔らかな月の光りを受けて鈍くドラゴンの姿は筆舌に尽くしがたいほど幻想的で、一瞬にして心を奪われるのを感じた。

体中の血が逆流でもしているんじゃないかと思うほどにざわめき、上昇した体温のせいで頭がぼーっとした。

銀竜は突然呼びつけられた上に、魔法を使っただのが人間だとわかって少なからず戸惑っているように見えたが、その時の私にはそれが余計に誇らしかった。

誰も成し遂げなかった事を、私が成したのだ。

誰も会えないドラゴンに、私は会う事が出来るのだ。

私だけのドラゴン。

そんなおこがましい感情を押さえつける事も出来無いほど、私は舞い上がっていた。

ドラゴンを人の世界に近づけ、彼らの存在を危険に晒しているという自覚も無いままに。

昔の自分と、ドラゴンへと思いを馳せていたその時。

私の耳に『ゴウッ』と空気を切り裂くような低い音が飛び込んできた。

その音を聞いた途端に自分の体温が一気に跳ね上がるのを感じる。今までの鬱屈とした気持ちが嘘のように晴れ渡り、あの日のように無責任な喜びが私の心の中で跳ね回る。

「ホッジス・・・」

星の瞬く北の空、今まさに戦場となっているであろう方角に広がっ

ている深い森の上空を、南から射す月の光りを鮮やかに跳ね返しながら飛んでくる銀竜が私の目に飛び込んでくる。

「今、とても貴方に会いたかったのよ。」

そう呟くと、人の耳では到底聞き取れぬであろうその声がまるで届いているかのように、ホッジスは僅かに体を左右に揺らして応えてくれる。

『私もだよ、小さなドラゴン。』

ホッジスがそう言ってくれたような気がして、私は笑顔で子どものようにホッジスに向けて手を振る。

始祖と崇められ、戦争の道具として扱われ、自分の浅はかさに吐き気を起こしそうになるこんな私でも、少しでも良いでしょうホッジス？

貴方の様に生きてみたい。

静かに、優しい貴方の様に。

ドラゴンの始祖・Unknown? (後書き)

随分と間があいてしまいました。久々の投稿です。

リアルが忙しすぎて口々に書く時間が取れずにいるので、合間合間で無理やりかき上げた見苦しい文章になっていると思います。

そのうち直したくなるとは思いますが、とりあえず、今はこれが限界Orz

頑張ってまた書きたいと思います。

さて時間的に大分経った上に良く分からない回なので若干解説を。今回は時間的にはフリルたちの生きる現在よりも大分過去のお話になっています。

ちよくちよく今までの話にも出てきていた魔法の始祖様のエピソードであります。

正直書きづらい事この上ないのですが、次回も始祖様のエピソードになるかと思っています。フリルの秘密などにも色濃く関わって来ますので、盛り上がりにかけるエピソードかとは思いますがどうぞお付き合ってください。

ドラゴンの始祖・Unknown?

優しい父様、いつも私に優しく笑いかけてくれる。

優しい母様、いつも私を優しく抱きしめてくれる。

まだ私がとても幼かった頃、

朝目を覚ますと、必ず母様の作る朝食の良い匂いが部屋に満ちていた。

私は思わずなりそうになるお腹の虫を押さえて、目をつむったまま寝たふりを続ける。

やがて遠くから母様がなにか言っている声が小さく聞こえてくると、しばらくして父様が、私の部屋に歩いて来る柔らかな足音が聞こえる。

『——。もう起きる時間だよ。母さんの朝ごはんが冷めてしまうから、我慢して起きておくれ。』

そう父様が呼びかける声に知らん振りを決め込んでいると、いつも父様は静かに私のベッドの脇に腰掛けて髪を優しく撫でてくれた。

それがくすぐったくて気持ちよくて、うつすら目を明けて父様を見つめると、決まって優しく目が私を見つめている。

『おはよう。――。』

『おはよう父様。』

そう言つて父様の手に自分の手を重ねると、父様の手はごつごつしていて、温かくて、なんだかとても安心した。

誰かに守られているという安心。

大好きな人がすぐそばにいるという充足感。

人生で一番幸せだった時はいつだと問いかけられれば、私はこの時を選ぶのかもしれない。

歳を7つ数える頃、私は両親が仕事に出ている間にこっそりと父様の書斎に忍び込むようになった。

父様の書斎はなんだか不思議な匂いがする。

木の匂いに本の匂い、日に温められた革張りの椅子の香りが入り混じった優しい香り。

一歩書斎に踏み込むと、私はまずそこに充満している乾いた柔らかい香りを胸一杯に吸い込む。

たちまち私の肺がその部屋の空気に満たされるのを感じると、なん

だが自分がその一部にでもなってしまったような錯覚に襲われて、なんとも愉快だった。

自分が書斎の一部になったら父様はどう思うだろう？

あれやこれやと考え、自分の想像にクスクスと笑いながら、私はくるくると父様の革張りの安楽椅子を回転させて遊んだものだった。

そうしてしばらく椅子と一緒に回転しながら様々な事に考えを巡らせた後、私は椅子を降りて壁に掛かった一枚の絵の下へ向かう。

草原に佇むドラゴンの絵。

何度見てもため息が出てしまう程美しいドラゴンの絵だった。

タテガミは海のように蒼く、瞳は空のように青い。

じっと見つめていると、その目に引きこまれてしまうのではないかなと思うほどに深い眼をしていた。

ドラゴンが佇む草原は鮮やかな薄緑に染め上げられ、まるで緑の海原のようだった。

何かしている途中だったのだろうか、ドラゴンは僅かに横を向いた体をそのままに、首だけをこちらへと向けじっと見つめてきている。

銀色に鈍く輝く鱗に跳ね返る日の光りがとても鮮やかで、きつと実物を見たら私の目は潰れてしまうのだろうなんて思ったものだ。

何秒でも何分でも、何時間でも私は飽きずにその絵を眺めて過ごす

日々を送った。

絵の中のドラゴンに幼い私は恋をしていたのかもしれない。

ドラゴンに向けて何事か語りかけていたような記憶もあるし、覚えていないがキスくらいだったらしていた可能性もある。

その頃丁度、母様から文字を教わり初めていた私は、絵を眺めていないときには父様の書棚をひっくり返して、ドラゴンに関する書物を字引片手に読み漁る事に時間を費やしていた。

ダグラスの事務官として働く父様の部屋には、ドラゴンに馴染み深いダグラスならではの書物が溢れんばかりに押し込まれており、私にとってそこは退屈する事の方が難しい、まるで楽園のような場所だった。

そうした穏やかな日々が一年も続いたある日、仕事場の都合でいつもより早く帰宅した父様が見たものは、書斎に入り浸って一心不乱に、大の大人でも教養が無ければ一ページすら読み解く事も難しい分厚い本を読んでいる私の姿だった。

父様が息を呑む音に驚いて振り返った私はきつと泣きそうな顔をしていた事だろう。

黙って父様の書斎に入っていた事に、幼いながらも少々の罪悪感を感じていた私は、当然父様が私の悪戯を怒るものだと思っていた。

ろくに怒られた事など無い程甘やかされて育った私だったが、だからこそ余計に父様や母様が怒る姿に恐怖を感じていたのかもしれない。

俯き、震える声で必死に父様に謝っていると、ゆっくりと近づいてきた父様は予想外に優しい声で私に一言尋ねた。

『――。お前は、ドラゴンが好きなのかい？』

私はその時なんて答えたのだろう。

てっきり怒られるとばかり思っていたのに、父様が優しい声を出した事に驚いて、何も言えなかったのだったか。

それとも、『はい』と正直に答える事が出来たのだったか。

今となつてはもう思い出せないのは、その時それだけ私が動揺していたからかもしれない。

それを機に父様は私の才能を見出し、8つを迎える年にダグラスの貴族が通う学校へと私をなんとか入れてくれる事になった。

王城勤務とはいえ決して位の高くなかった父様のお給金では、きつと相当な苦勞をしての事だったろう。

私が学校へと入学してからというもの、暫くは家の食卓が少し質素になったような記憶もある。

今思えば、父様や母様の着物はそれ以前に比べて、新調される機会がめっきり減ってしまったような気がするし、実際そうであったのだろう。

それでも幼い私が、その当時罪悪感を抱かないほどに父様と母様は

上手に家計をやりくりしていたようで、私は無邪気なまま毎日与えられる新しい知識に嬉々として舞い上がり、次々にそれを欲した。

入学から数ヶ月経った頃には学校長にその才を見出され、その2年後には飛び級につぐ飛び級で大学校に入学を果たし、私は一躍世間の注目を浴びる神童として騒がれる事になった。

私は細かい事は分からなかったが、しばらくしてダグラスの政治の仕組みを詳しく調べて見ると、かなりの高額な奨学金が支給されていたらしい。

それを知った時には、父様と母様に恩返しが出来たようで、誇りで胸がはちきれんばかりだったものだ。

やがて私は2年半ほどで学科受講の必要無しと判断され、異例の速さでダグラスの大学校を卒業する事になった。

与えられた地位はお飾りのようなものだったが、それでも農業技術に関心を持って書いた論文が認められた事で、小さな専門の研究室と、助教授としての肩書きを持つ事が出来た。

背負わされた期待も大きいものだったが、その地位から安定した収入をえる事ができるようになった事で、私の家族の暮らしは一気に向上した。

母様はそれまで続けていた外での仕事をやめて、家事に専念する事が出来るようになったし、私の知名度が良い方向に働いて、父様も一層出世をする事が出来た。

なによりも嬉しかったのは、研究者として、王立図書館での閲覧制

限が一切なくなったことだ。

一般の人では背表紙すら目にする事が出来ない、数々の禁書に触れる事が出来る特権。

私は一日のノルマを達成するたびに、飛ぶようにして図書館へと足を運び、研究に必要なような文献を探す片手間、ドラゴンに関する書物を読み漁った。

ダグラスの王立図書館が所有するドラゴンに関する本は想像を遙かに超す量で、私はいつも日が暮れるのにも気付かず、文字を目で追う作業に夢中になったものだ。

その膨大な量の蔵書を読みながら、いつも胸の中にあつたのは、どうすればドラゴンに会えるのだろうかという事。

銀色に光り輝く美しいドラゴン、一目で良いから会ってみたい。

彼らが何を考えて生きているのか、何を食べて生きているのか、どのようにして寒い冬を越すのか、何故彼らは人から逃げるようにして深い山中で暮らすのか。

何故その叡智と力を駆使して地上の征服者となろうとしないのか。

想像は膨らんで尽きる事がなく、一人書庫に籠って頬を緩ませるのを我慢する事が私にはどうしても出来なかった。

そうした日々を過ごすうちに、やがて私はドラゴンの魔法に目をつけた。

彼らが巻き起こす不思議な現象は、直接それを見た事がない私にはまるで夢物語のような話ではあったが、だからこそその秘密に少しでも迫ってみたいと思う欲求は日に日に大きくなっていった。

彼らの魔法の影響は実に多岐に渡る。

荒廃した大地を緑溢れる豊かな土地に生まれ変わらせた例もあれば、怒りで火山を噴火させたという逸話まである。

風や水を器用に操り、魔法を使って未来を予見することすらできると言った話もあった。

人の知恵や労働も、自然を変化させるという意味ではドラゴンの魔法に通じるものがあるように私には感じられたが、瞬間的な規模で言えばドラゴンのそれとは比べ物にならない。

人の知恵はどちらかというと自然が起こす変化に柔軟に対応しながら、それを利用して時間を掛けて結果を得るものであったが、彼らは物そのものの構造を劇的に変化させる。

いったいこの力は何なのだろう。

当時の私には性質の悪い手品でも見せられているかのような心境にさせられたものだ。

彼らの使う力にある秘密を調べるために、私は少ない休暇を全て、ドラゴンを実際に目にした事があるという人物を訪ねる事に費やした。

若い私の事を軽視して、とんだ法螺を吹かれる事もままあったが、

ある時一人の人物から興味深い話を聞く事ができた。

『彼らが私を助けるために、人が浮くほどの大風を吹かしてくれた時だ、私はそのドラゴンの鱗がパラパラと剥がれ落ち、一瞬にして一周りほども大きくなる姿を見たのだ。』

この話は強く私の興味を引く事になった。

魔法を使う事で体が成長する？

大急ぎで王立図書館へと書け戻った私は、その話の真偽を確かめるために数ヶ月を費やして書庫の中身を改めて読み返す作業を始めた。ほとんどの文献には、彼らが如何に強大で壮絶な魔法を操るかを煌びやかな言葉で祭り上げるのに夢中なようだったが、その中で数冊、手がかりになるかもしれないものを探し当てる事が出来た。

その中で書かれていたのはドラゴンのいまわの際の描写だった。

年老いた巨大なドラゴンが、そのどの固体にも変わらず魔法を使った瞬間に崩れ落ちるように死んでいる。

生命力を糧にして、様々な現象を引き起こしているのか？

直感的に私はそう感じたが、しかし生命力を使うのであれば逆に体がしぼんでいってしまっても良さそうなものだ。

非常に近いが何かが違うと考えた私は、貴重なドラゴンの白骨遺体が収められている博物館への調査研究依頼を申請し、直接ドラゴンの体について調査研究を進める算段をたてた。

数の少ないドラゴンの遺物だ、予想はしていた事だがその後一年間に渡って調査の許可は下りず、私は悶々とする日々を過ごす事となった。

その間私は農業技術の開発に明け暮れ、神童として背負わされた期待に見事に応える事で研究者としての地位を一層確かなものとし、より強い権力をその手中に収める事に成功した。

沼地干拓技術に関する提言1本、農業用肥料改良に関する提言3本、耕作用具改良に関する提言4本、農業用水引き入れ量と分配量・分配方法に関する提言1本、新種根作物導入に関する提言1本、新種根作物品種改良に関する提言3本、既存作物栽培方法改善に関する提言3本。

寝る間も惜しんで他の研究者達が泡を吹いて倒れる程の勢いで次々と論文を発表し、そのどれもが大きな注目を集め、数年後には莫大な効果をダグラスへともたらすものとして持て囃された。

それも全てはドラゴンの遺体を調査するために。

ドラゴンの遺体を研究し、彼らの魔法について紐解く事がダグラスの一層の発展に繋がる可能性があるかと囁き、王に直接嘆願書まで提出した。

青二才の戯言と一笑に付されても仕方がない内容の嘆願書ではあったと思うが、それまでの研究成果が私の強い後ろ盾となってくれた。

あいつが言っならば、もしかしたら本当かもしれない。

そう思わせるだけの実績を私は積み上げた。

やがて念願叶ってドラゴンの骨の調査研究許可が送られてきたときには私は母様と小躍りして喜んだ。

父様は娘の努力に感動した様子で目にうつすらと涙すら浮かべて私を抱きしめ、私を生んだ事を心のそこから誇りに思うと言葉を掛けてくれた。

嬉しかった。

母様の笑顔も、父様の言葉も、周りから認められる事も。

・・・私の研究室に、大層な梱包をされて届けられたドラゴンの骨を初めて手に取ったとき、何よりも驚かされたのはその巨大さに見合わぬ異様な軽さだ。

初めは空を飛ぶために、鳥のように骨の密度が異常に低いのかとも思ったが、研究を進めるうちにどうもそうではないようだという見解に達した。

このような密度と強度では、彼らは地上では決して行動する事が出来ない。

一歩あゆみを進める毎に、巨大な体を支えきれない骨は大仰な音を立てて折れる事になるだろう。

筋肉によってその周りを固定するのだとしても、そもそもこんな強度では、あの巨体を動かすに足るだけの筋肉の収縮の圧力にすら負けてしまうのではないだろうか。

最初に送られてきた標本が年老いたドラゴンのそれであつた事から、他の動物のように老衰で骨密度が下がっているのではないかと思つたが、いくらか若いドラゴンの骨に関しても同様の事が観察された事で私はその説を否定した。

何が、彼らの体をこれほどまでに蝕むのだろうか？

毎日そのことばかりを考え、研究が暗礁に乗り上げ掛けていたその頃、ドラゴンを直接調べられる事の喜びと、まだ若く、日々新鮮な驚きに塗り替えられていく記憶の中に埋没しかけていた、あの話が突然脳裏に閃いた。

『ドラゴンは、魔法を使うたびに成長する。』

これだ、と私は半ば確信した。

彼らは、魔法を使う事でその質量をましているのではない。

巨大化、もとい肥大化してしまっているのではないだろうか。

高密度のものが大きく引き伸ばされ、その密度が低くなっているのではないだろうか。

成長という言葉に捕らわれていたが、そもそも成長というのは生としての前向きな意味ばかりが込められているものでもない。

『死へ向かう。』

そついう事なのではないだろうか。

そう考えつくと、ドラゴンの魔法に関して次々と仮説がたつた。

彼らは、人よりも遥かに次元の高い高密度の魔法体なのでは？

ともすると一瞬にして外へと向けて暴発しかねない高威力の力を、なにかしらの力で抑え込んでいるのではないだろうか。

魔法に拠って引き起こされる現象は、その力を束縛する鎖が弾け飛ぶときの余波で、そもそも魔法というのは副産物的な代物なのかもしれないと私は考えはじめた。

その考えが脳裏に閃くと、すぐさま私は医療分野の知識を猛烈な勢いで収集する事を始めた。

ドラゴンの体に関する情報は当然として、虫、魚、鳥、犬、猫、様々な動物と、人。

先端医術ばかりではなく、オカルトめいたものや気に関するものまで私の研究は及び、日夜食事を取る事すらも忘れて研究に没頭した。

そこで注目したのは、どの動物にも、個々に特徴的な第六感のようなものが備わっている事。

理論と知識だけでは説明が出来ないような現象や行動に、ドラゴンの魔法に通じる何かが潜んでいるのではないだろうか。

しかし人には、他の動物に比べこれが著しく欠如しているように思う。

人が人である事の最たるものは何だ。

人が進化の過程で失い、彼らが失わず、変化した形で人の中に残る
残滓は何だ。

知恵か。

言葉か。

記憶か。

感情か。

その全てか？

全てのものは、全てのものへと帰結する。

知恵が言葉を生み、言葉は知恵を生む。

記憶は感情を煽動し、感情は記憶を呼び起こす。

文明は発想によって発展し、発想は文明によって様々な姿と流行を
形作る。

この広い世界の様々な箇所と同時に発生し、進化し、多様化し、人
種と呼ばれる隔たりを生み、体格や文化を異なるものとし、しかし
それでも、人が人を人足りうると判断するものは何なのだ？

恐ろしく哲学的な禅問答に私は日夜頭を悩ませ続けた。

おそらく解答は一つではない。

何か中心を据えなくてはならない。

中心を見つけない。

きっと人は、その術をすでに失っている。

だから私は

言葉を全ての中心に据えた

愛していると、ドラゴンに伝えたかったから

私が

魔法を扱えるようになるにはどうすれば良い？

どうすれば良い？

ドラゴンの始祖・Unknown?

月明かりに照らされた薄暗い部屋に私が戻ってくると、ベッドの上に腰掛けどこか儚げな様子で、クルトが月を眺めていた。

「おかえりなさいませ、始祖様。」

そう言って私の方へ静かに視線を向けたクルトの顔はとても静かな印象で、心の内が読み取れないようなものだった。

「・・・ただいま。起こしちゃったかしら？」

私がそう聞くとクルトは僅かに首を左右に振って俯いた。

「寝つけませんでしたから。寝たふりをしていました。」

「・・・そう。」

彼女も、今日の話が気になって仕方が無いのだろう。

ダグラスからの召集。

平和な、世間の慌しい時間の流れから隔絶された森の奥での生活には少々刺激が強すぎる話だったかもしれない。

「ホッジスが来ていたの。少し、話をしたわ。」

「ええ、窓からホッジス様がいらっしゃるのが見えましたから。」

クルトは私から目線はずし、静かに体を横たえると少しけだるそうに呻いて眉をひそめた。

「具合が悪いの？」

「少しだけ……。ホッジス様には申し訳ないのですけれど。」

昔から、クルトはホッジスが近づくとそれまでの体調が嘘のように悪化する事が多い。

「ごめんなさいねクルト。」

「なんで、始祖様が謝るんですか。」

「……さあ。」

頭の中に、クルトがホッジスと初めて相対した時の様子が鮮明に思い出される。悲鳴がこだまして、誰かの倒れる音が聞こえる。怒号が飛び交って、ドラゴンが苦しげに呻く声がする。

私は一瞬鋭い頭痛に襲われて頭に手を当てた。

「始祖様……？」

私の様子に違和感を感じたのか、クルトが不思議そうな目で私の顔を覗きこんでくる。

そのクルトに微笑んで「大丈夫よ」と答えてから、私もクルトと同じように粗末なベッドに腰を下ろした。

「始祖様、ホッジス様はどのようなご用件で？」

「・・・ああ、・・・今日貴方達に話した事に関係していた話だった。」

そう告げるとクルトが身を固くして僅かに息を呑む様子が伝わってくる。

月明かりに照らされたその顔が、一層蒼くなつたようにも見えた。

「ゴランに、ドラゴンがついたらしいの。」

「そんなつ・・・何故・・・。」

「・・・。」

ホッジスからその話を聞いた私もかなり動揺をした。いくら弟子達の中で一番のしっかり者だといつても、まだあどけなさすら残るクルトにとっては理解できない話であるに違いない。

「・・・ダグラスが、術者を含んだ部隊を編成し始めているみたいだね。何匹かのドラゴンがそれにだいぶ怒っているみたいなのよ。」

「そんな・・・。」

ダグラスの行動は明らかにドラゴンとの契約に違反している。私が系統立てた多くの魔法はその大部分がドラゴンから学んで、人にも扱えるように言葉を媒介としてアレンジを加えたものだ。

魔法を教えて貰うにあたって彼らに約束した事がある。

生命をおびやかさないこと、生き物の構造を変化させない事など、その内容は多岐に渡ったが、どの項目にも一貫して言える事は「悪意をもって使用しないこと」。

この大前提の部分に、ダグラスの行動は違反してしまっていた。

私がダグラスの召集命令に対して躊躇した理由であるこのドラゴンとの契約違反は、予想どおり最悪の事態を引き起こしかけている。

「彼らが向こうについたといっても、すぐさま私達に対して事を起こすわけではないはずよ。彼らはゴランの支配下に入ったわけじゃないでしょうし。」

「でも……、もし本当に戦争に魔法が使われたら……。」

「そうね……。彼らがどういった行動に出るかはわからないけど……。でも、そう怖がらなくても大丈夫よ。心優しいドラゴンのすることですもの。」

怯えるクルトを安心させるように微笑み掛けてやる。

クルトは蒼白になった顔のまま俯き、口を一文字に結んで何事か考えているようだった。

正直な話、事態はそう樂觀視できるものではないというのが私の見解ではあった。

ホッジスは隠しているようだったが、私は先ほどのホッジスとの会話の中で、確かに成長痕がその体に増えている事に気がついていた。

使ったのは恐らく念話の類だろう。コルコロイド中のドラゴンにでも呼びかけたに違いない。

それだけ多くのドラゴンに物議をかもす程に、彼らの中でダグラスの行動は問題視されているのだ。

ホッジスが北からやってきたのは、念話では埒が明かない状況にまで危機感が高まっているからだ。おおかたゴランまで、他のドラゴンを説得しに行っていたのだろう。

単純に魔法を戦争に使わせないようにするならば、人の記憶ごと魔法の存在など消し去ってしまえば良い。

そうせずにドラゴン達がダグラスに敵対するように位置どったのは、見せしめとして私達に制裁を加えるためではないかと私は予想していた。

「始祖様……。」

考え事をやめ、クルトの方に目を向けると不安そうに揺れる瞳で私の方を見つめてきていた。

「大丈夫よクルト。」

きつと大丈夫。私が何とかしてみせるから。

「私に任せておきなさい。」

そう言って微笑むと、クルトもようやく少しだけ笑顔を見せてくれた。

「久しぶりに、みんなでピクニックをしましょう!」

翌朝になって笑顔でそう告げると、弟子達は一様に口をぽかんとあけてポカンとした表情で固まった。

「あの・・・、始祖様・・・?」

ヨーンが訳がわからないといった表情で何事かと聞いて雇用としたが、私はそれには取り合わずブッチに顔を向けた。

目が合った瞬間にブッチはビクーン!と体を跳ね上げたが、そこはさすがに大人なブッチである。すぐさま慌てた態度を引つ込めて居住まいを正してくれた。

「ブッチ。急で悪いんだけど、6人分のお弁当を用意できるかしら?」

「は?ああ・・・、うーん、そうですね、昨日始祖様がお土産に買ってきてくれたパンがありますし、干し肉もまだありますから。なんとかなると思いますけど。」

「そう、じゃあよろしく願いますわ。ヴァンス。あなたはブンパを持っていったよ。いくつかリクエストしたい曲もあるしね。」

「はあ・・・。構いませんけど。」

「ノワール。貴方が納屋に隠している上等のお酒がまだ余っている

でしょう？あれ持って来てちょうだいよ。」

「・・・なぜそれを知っているんです。」

「ヨーン。久々にジャグリング見せてよ。クルクルまわすやつ。」

「クルクル・・・。始祖様、もうちょっと語彙を磨いた方が良いでしょう。」

「うるさいわねえ・・・。ああそれと、クルト。」

クルトの方に向き直ると、弟子達と私のやり取りを見て微笑んでいたクルトがきょとんと子首を傾げる。

「はい。私も何か持って行きますか？」

「そうね、とりあえず貴方は笑顔さえ持って来てくれれば場が和むからそれで良いわ。」

「はあ。」

クルトは少し残念そうに、困った顔をする。

魔法を除いて特に特技らしい特技も無いクルトにとっては、残念で仕方ないだろう。

「それよりも貴方にはいくつか運んで欲しい物があるのよ。これ、運んで欲しい物をメモしておいたわ。少し数が多いんだけど良いかしら？」

「ええ、構いませんけど。・・・？これ、何か術でも行っんですか

？」

渡したメモに書かれた項目を見て、クルトが不思議そうな顔をした。

「そうね、私からのプレゼントってわけでもないけど。ちょっとした余興よ。弟子達ばかり働かせるのも悪いでしょう？」

そう言っただけで微笑むとクルトは私に微笑み返してから、他の弟子達と一緒に術の媒介とする道具をしまった部屋の方へと向かって行った。

少々の罪悪感など、捨ててしまおう。

ダグラスから兵士達が派遣されるまで後二日。

用意を整えるための時間も、躊躇して思い悩むだけの時間も、今の私には、とてもじゃないが足りない。

私の我儘が全てを引き起こした。

目を背けて良い道理があるか。

人一人、ドラゴン一匹たりとて、理から外れた死に方などさせはしない。

任せておきなさいホッジス。

私は、始祖よ？

ドラゴンの始祖・Unknown? (MOTHER)

「ここいらで良いでしょう。ブッチ、そろそろお昼にしましょうよ。お腹ぺこぺこだわ。」

私達が暮らす小屋から歩く事2時間程、森の中に唐突に開けたように広がる円形の小さな広場についた私はそう言っつて弟子達を振り返ると、全員やれやれといった様子でぜいぜいと息をついた。

「あら、なによ。この程度で疲れちゃったの？だらしないわねえ・・・」

私がため息まじりに弟子達の不摂生を嘆くと、ヨーンが苦しそうに呻いて恨みの籠った目で睨みつけてきた。

「こ、これだけ歩かされれば普通、い、息も切れますよ始祖様。」

「そう？だってピクニックよ？別に走り通して来たわけでも無いのに・・・。」

「ぴ、ぴくにつくつて言うより、きよ、競歩ですこれじゃあ。」

ヨーンの横で地面に座りこんだノワールが天を仰いで苦しげに喘ぐ。ヴァンスは苦しそうにしているものの何とか大丈夫そうであったが、問題は横で完全に倒れたブッチだ。

汗が顔から滝のようにしたたりおち、水でもかぶったのかと思うほどに服が汗で滲んでいる。

・・・だからダイエツトしろっつて言ってるのよ。

「大丈夫ですか？ブッチさん。はい、お水。」

私と同じように汗一つかいていないクルトは、若干息を荒くしながらもまだまだ体力に余裕があるようで、甲斐甲斐しくブッチの介抱を始めた。

「す、すまんクルトちゃん。」

「いえいえ、気にしないで下さい。お安い御用ですよ。」

クルトは倒れこんだブッチの背中を片手で支え、口元に水筒を近づけて水を飲ませてやっている。

その様子をみたヨーンが、ちらりと羨ましそうな視線を二人に向けた。

状況が状況でなかったら、散々からかってやりたいような行動だ。

可哀想だから私がクルトの真似をして「はい、お水。」と言ってコップを差し出したら、大層な目つきで睨まれてしまった。

「なによ、つれないわねえ……。」

「……始祖様に釣り上げられたら笑い話じゃすまなくなりそうなんだね。」

「あら、どういう意味かしら？」

ニコツと微笑んで首を傾げるとヨーンは「べっつにー」とごまかしてきた。

足を思いっきり踏んでやったら涙目になって飛び上がったので少しスカッとした。

「始祖様、水汲み、私がしますね。」

ブッチの介抱を終えたのか、いつのまにかクルトが私とヨーンの側まで寄ってきていた。

弟子達曰く激しいピクニックだったらしい散歩のせいで、クルトも大分暑くなっているらしい。質素な衣服の胸元を私が見ても唸ってしまうほど大胆にあけてパタパタと仰いでいる。

ヨーンの方をじろつと睨むと、「バツ」と音でもしそうな勢いで明後日な方向に顔を背けた。
見惚れていたに違いない。

「そう？悪いわねクルト。お願いしちゃおうかしら。」

「いえいえ、いつもやってもらってばかりじゃ悪いですし。それじゃあお水汲んできますね。」

そう言つてクルトは微笑むと、踵を返して先ほど越えてきた小川の方へと小走りに駆けて行った。

「信じられないな……。よく、まだあれだけ動けるもんだ。」

その様子をみたノワールが、呆れたようにため息をつく。

「貴方達がだらしなさ過ぎるのよ。もうちょっと日ごろから鍛えておきなさいよね。」

「普通馬を使うダグラスまでの道を走って移動する始祖様や、6人分の薪を担いで森を走り回って汗も掻かないクルトちゃんと同じようにとはいきませんよ……。」

クルトの支えを失って再び地面に突っ伏していたブッチがそう呻く。

「健全な精神は健全な肉体に宿るのよ。知識を詰め込むだけじゃなくて体を鍛える事も必要だわ。」

そう説教を垂れながら、ここまでヴァンスが担いできた荷物の紐を解いて布を地面に広げる。

男達の中で唯一まだ動けるらしいヴァンスも肩で息をしながら手伝ってくれた。

ヨーン、ノワール、ブッチの三人は私とヴァンスが広げた布の上になめくじの様に這い上がり、早々に突っ伏して動かなくなってしまった。

「もー、邪魔だわ。」

足元に転がるノワールを踏みつけるとグエツと悲鳴をあげるものの、どうやらかなり参っているらしく文句も言わない。

面白いのでヨーン、ブッチを次々に足で踏みつけたが同様にほぼ無反応に終始した。

ひとしきり弟子達で遊んで満足した私は、続けて荷物からブッチお手製のお弁当を次々と布の上に広げる。

干し肉と野菜を挟んで特製のソースをかけたサンドイッチに、魚を干してハーブで焼き上げたものを包んだパイ。

ダグラスで買った新鮮な果物の皮を剥いて、持ってきた皿に綺麗に盛り付けた。

私が用意をしている間にヴァンスが火を起こしてくれたので、これもまたヴァンスが担いできた鍋に、ブッチが空いた酒瓶に詰めてき

ていたスープを注いで温める。

具は来る途中に摘み取ってきた香草とサンドイッチを作るときにあまった肉の切れ端。

大分煮詰めてあるので、後はクルトが汲んできてくれる水で薄めればちょうど良い頃合になるだろう。

「わあ、良い匂い！」

良いタイミングで水を汲んでクルトが帰って来た。

目をキラキラさせながらスープを覗き込むと、広げた布の上で未だに突っ伏している三人を見てクスクスと笑い声をあげる。

「ほら！笑われてるわよ貴方達！」

そう言うてだらしない三人の弟子達を励ますと、三人は尚も呻きながらもしぶしぶといった様子でなんとか体を起こした。

「・・・うまそうな匂いが。」

「貴方達がちつとも手伝ってくれないから随分手間がかかったわよ。ほら、ブッチは料理をしてくれたんだから、ノワールとヨーンも少しは手伝いなさいよね。お皿、クルトが水を汲んでくれたから少し洗って頂戴。」

「はいはい・・・。」

ヨーンとノワールは億劫そうに立ち上がると、荷物から皿を取り出してクルトが汲んできた水桶の片方にそれを放り込み洗い始めた。

ブッチもようやく回復してきたようで、四つん這いになりながら鍋

ににじり寄ると、スープの味の調整を始めてくれた。

「クルト、私達は少し休みましょう。ヴァンス、まだブンパを演奏するには体力が足りてないかしら？」

「いえ、構いませんよ。何を弾きましょうか。」

「そうね、ほっとするような曲だったらなんでも良いわ。貴方のセンスにお任せ。」

ヴァンスは暫く考え込んだ後、ブンパを持ち直して少し前に流行った戯曲に使われた曲の一節を弾き始めた。

確か化け物のような姿になってしまった王子が、国を追われ、逃げ延びた先で出会う一人の少女に恋をする悲しい話だったはずだ。使われている曲にはもの悲しい雰囲気のものが多かったが、ヴァンスが弾いたのは王子と娘が森の中で語り合うときに使われていたもので、今にぴったりの曲調だった。

「いい曲だわ。」

ヴァンスの弾く曲にうつとりとした様子で聞き入るクルトにそう言うのと、クルトも頷いて笑顔を見せた。

「素敵ですね。ほんわかします。」

私もクルトに微笑むと、立ち上がって荷物の方へと向かった。

荷物の中から、クルトに用意してもらった物をいくつか取り出す。どれも術を行うときに媒介とするものだ。

その中の髪を切るときに使う銀製のナイフを持ってクルトに声を掛ける。

「クルト、少しだけ髪を分けて貰っていいかしら？」

「・・・？髪ですか？別に構いませんけど・・・。どうしてです？」

不思議そうな顔をするクルトに悪戯っぽく微笑んで

「余興に術を使いたくてね。あなたの髪を媒体にしたいの。」

と言うと、クルトは再び微笑んで「構いませんよ。丁度切りそろえたいと思っていましたし。」と快諾してくれた。

私はクルトの後ろにまわると、まず髪を結んでいた紐を解いて櫛をその髪に通す。

腰の辺りにまで伸びた美しい銀髪は、手のひらにサラサラとした感触を伝えて心地良い。

ヴァンスの弾く曲と、頭を撫でられる事で気分が良いのか、クルトは曲の旋律を鼻歌でなぞりながら僅かに体でリズムをとっている。

私はクルトに一声掛けると、その髪先端を切れ味の鋭いナイフで慎重に揃えていく。

食事の用意を終えたヨーン、ノワール、ブッチがもの珍しそうにこちらを眺めている。

「少し短くしてしまつて良いかしら？」

「はい、始祖様にお任せします。」

クルトの了解をとって、少々長めに髪を切り落とす。

髪他の部分も、不揃いにならないように気を使って整え、しばらくして私はクルトの髪を切り終えた。

「終わったわよ、クルト。」

そう言うとクルトが振り返り「ありがとうございます」と微笑んだ。

「どう？ ヨーン、可愛いでしょう？」

ヨーンに向かって私が意地悪く微笑むと、ヨーンは顔を僅かに赤くしながら「はあ」だの「まあ」だの喉に引っかかったような声で呻いた。

不思議そうな顔をするクルトに「ちよつと髪を清めてくるわね。」と耳打ちしてから私は切り落とした髪を集め、弟子達から少し距離をとるようにして森の茂みの中に入った。

広場の方を振り返ると、皆が髪を切ったクルトの事を褒めているらしく特にこちらに注意を払っている様子は無い。

私は懷から、先ほどナイフを取り出すときに一緒に手に取った、液体の入った小瓶のふたを開けて、切った髪の中で一際長い一房にそれを振りかけて馴染ませた。

私が調合した特殊な染料を落とす効果のあるその薬品にさらされ、本来の色を取り戻した、長く、美しい髪にしばし私は目を奪われた。

どれくらい久しく、この髪を見ていなかったのだらう。

日の光りを受けて、静かに輝くその髪の色は――青。

私はその髪の水気を切ると、小瓶を遠くへ投げ捨てて代わりに懐へ
としまいこんだ。

媒介はそろった。

場所も、術を行うには申し分のない条件が揃っている。

やったことは無いけど、まあなんとかなるだろう。

ドラゴンのたてがみには、想像を絶する魔力が込められているから。

全員の、記憶を消す。

躊躇など必要ない。

必要な覚悟は、とうに固まっている。

貴方達を巻き込みはしない。

私に、任せておいてね。

愛しているわ、私の可愛いドラゴン。

クルト。

お母さんの全てをかけて

お父さんの一族と、お母さんの一族を争わせたりしない。

私はフランドール

魔法の始祖にして、ドラゴンと人を繋ぐ糸

ドラゴンの尖兵・大太刀使いのウルバ（前書き）

読み飛ばしても、良いかも・・・。

ドラゴンの尖兵・大太刀使いのウルバ

鮮血が頬を使う感触が、全身を粟立たせるのを感じる。

そろそろ死ぬか？

まだ死に対して現実感の伴わない今ならば、それほど恐れずに逝けるんじゃないか？

それにしても、ファネルだっけ？阿呆かつつの。

シャルルの話だと一人で200人以上切り殺してるらしい。

人間じゃねえだろそれ、絶対。

ゴランの六の団、ほとんど壊滅じゃねえのかそれ？

阿呆みてえ。

会った事もねえけど、テメエ死んでんじゃねえよ。

なんで俺がこんな事になってんだよカツコワリィ。テメエがやれよな、早々に死にやがってちくしょう。

てめえみたいな人外と違ってこっちゃんあ限界があるんだつつの。

それでも頑張っただろ俺。

何人？

ここまでで30人くらいか？

バラックの坊ちゃんやるじゃねえか。ちゃんと誘導出来てるよ。

ああ、つか名前なんだっけ？

バルガ？

まだ殺してねえよな？どこだ？

まあ、良いか。

それよりもさ。

「よう、助けに来たぜ？—— フリル。」

ユジンがボルドへ向けて出発してからというもの、バラックは始終そわそわとして落ち着く事が出来なかった。

認めるのは悔しいが、あの老宰相が陰となり日向となり支えてくれる事に、いつもの自分がかかり依存している事は疑いようの無い事実だった。

「はぁ……。」

せかせかと部屋の中を歩き回っては、自分の態度が威厳の欠片もないものになっている事に気付いてため息をつく。
落ち着こうと思って酒のグラスに手を伸ばし、はたと気付いた、これでもう何杯目になる？

「くそつ。」

こんな所もユジンにおんぶにだっこか……。体の管理くらい自分で出来ると言っておきながら、小言を言われなくてはいつもの倍以上のペースで飲んでいる。

周りの者はわかっているのだ。こういう自分の幼さを。

きつと行動のいたる所に青臭さが漂っているに違いない。

それが分かっているても尚、自らの行いを正す事が出来ない自分が不甲斐ない。

「はぁ……。」

今日、何度目になるかもわからないため息を一つ盛大につくと、結局手に取ったグラスを下ろす事も出来ずにおお、バラックは深々とソファ―にその身を沈めた。

「……ユジンは、そろそろボルドにつく頃だろうか。」

ユジンがダグラスを離れてもう一週間になる。道中で何か不測の事態でも起きない限り、既にダグラス領は抜けている事だろう。

ユジンの安否を思うバラックは、目を閉じながら、ユジンにダゲラス行きを命じたときの光景を思い返していた。

自分としては熟考の末の決断のつもりだった。

きっとユジンには反対されるだろうと覚悟はしていたものの、目に浮かぶのはユジンのなんとも表現しがたい複雑な表情。覚悟を肩透かしされたような、そんな気分にはさせられた。

いつも通り理路整然と自分に意見はしてくれたものの、何を考えてか、結局ユジンは大した文句もいわずに自分の決断にしたがってボルドへと旅だつて行った。

あの老宰相は何を思つて自分の意見に従つてくれたのか。

自分の意見が通つたら通つたで、バラックは何とも言えぬ不安な気分にはさせられていた。

「卑屈になりすぎだな・・・。」

そうつぶやくと、バラックは頭を振つてやおら立ち上がり目の前の机においてあつたベルを鳴らした。

すぐさま部屋のドアが開き、年老いた王付きの侍女が顔を覗かせた。

「フリル殿付きの者達から、何か報告は上がっているか？」

バラックは出来るだけ平静を保つように自分に言い聞かせながら、侍女にそう尋ねた。

「はい。フリル様、シャルル様共におくつろぎ頂けているようです。先日殿下がお贈りになられた花もお部屋に飾っておられたと聞いて

おります。」

「そうか。」

「何かまたお贈りになれますか？」

「いや……。」

「……？」

バラックはにこやかに佇む年老いた侍女に、柄にも無くいらついた。そうではない、聞きたいのはそんな事ではないのだ。

ここ数日というもの、自分を落ち着かせない原因の一つについて、バラックは侍女から聞きだしたくて堪らなかった。

別に、自分が指示した事なのだから聞いてもなんら問題は無いはずだったが、フリルへの想いを自覚している身としては、なんとなくその行為が後ろめたいもののように思えて仕方がなかった。

「……もう下がって良い。」

そう告げて、不思議な顔をする侍女が、しかし何も疑問を口にする事無く静かに退室すると、バラックは改めて盛大にため息をついた。

ウルバというあの男、相当な使い手ではあるらしい。

フリルとシャルルに護衛をつけよと、ダグラスで一番の剣の使い手をつけよと命じたのは自分だ。今更その事を取り消すつもりは毛頭無い。

しかしバラックにはどうも、そのウルバという男の軽薄な態度が気に入らなかった。

その思いの中に、浅はかな嫉妬がいくばくか含まれている事は否定のしようが無い事実で、それでも王という柵に捕らわれている自分にはどうしようも無いもののように思えた。

こんな時にユジンがいたら。

そう思うたびにバラックはまた始めの回想へと立ち戻っていく。

ここ数日というものの、バラックは夜が長く感じられて仕方が無かった。

「よーフリル！元氣か？」

私が嫌いな、不必要に大きな声をあげて部屋に入ってくる若い男に、私は盛大に眉をひそめてやった。

その男は私の表情に一瞬遅れて気が付くと、これもまたわざとらしく目線を上に上げてヤレヤレといった様子で肩をすくめて見せた。

「なんだよ、シャルルはいつも魔物みたいな表情してんだな。一度教会に行つて悪魔祓いでもして貰ったらどうだ？」

「悪魔がついているとしたら、それは目の前にいる失礼な男の事だと思つわ。大きな声出さないでって何度も言ってるでしょう。フリルが怖がるわ。」

そうつつけんどんに言い返してやると、その男はニヤニヤと下卑た笑いを表情に浮かべながらフリルの方を見つめた。

「そんな事ねえよなフリル？」

「は、はい……。」

突然話の矛先が自分に向いて驚いたのか、少し怯えたようにして下を向くフリルは、膝の上で手を固く握っている。その様子は明らかに怯えているように見えた。

「あんたの目はどこについてんのよ。どう見たってフリルはあんたの事怖がつてるでしようが。バラック様じきじきに指名しての護衛だから仕方なく側にいる事を許可しているけどね、本当だったらあんたなんかすぐにも解雇してやりたい所だわ。」

「なんだよおい。嫌われたもんだな？まだ会ってから3日と経ってないんだぜ？俺の事をシャルル嬢に理解してもらえる程、濃密な時間を過ごした覚えはないんだけどな。」

そう言つてその男は、やはりニヤニヤとした表情のまま今迄立ち尽くしていたドアの側を離れ、フリルが座っていた大きめのソファの空いている部分にドカッと音を立てながら豪快に腰掛けた。

「そういう失礼な態度が嫌いだって言つてんのよ。勝手にフリルの側に座らないでくれない？あんた護衛が役目でしょう？客人に対して失礼がすぎるんじゃない？」

「客人？馬鹿言つな。捕虜の間違いだろ？護衛を”してやってる”」

「んだよ俺は。」

ムカツときた。

「随分な言い草じゃない？捕虜なんて。あんた牢屋の看守にでもなつたつもり？まあその職業に関しては下品で学の無さそうなんだにお似合いだとは思うけどね。」

「あの・・・シャルルさん。私は大丈夫ですから・・・。」

フリルが私とその男との罵り合いを見かねたのか、おずおずと言った様子で声をあげた。

「ほらみる、フリルもこう言ってるじゃないか。冗談だよ冗談。そうカリカリすんなよなシャルル。」

「フリルは気を仕える良い子なのよ。アンタと違ってね。例え嫌いな相手だとしてもあんたみたいに下品な態度で嫌がらせなんかしてこないの。」

「嫌ってる？誰が、誰を？」

「私達がアンタを、と、アンタが私達を。」

そう言うとその男は大袈裟な態度で天を仰ぎ、盛大なため息をついてみせた。

「馬鹿言つなよ。百歩譲ってそっちが俺を嫌っているのは認めたとしても、どうして俺があんたたちを嫌うなんて事ができるんだ？大事な護衛対象だぜ？しかも二人ともとびきりの美人ときたもんだ。」

まだまだ日は浅いが、ここに足を運ぶのが楽しみで仕方ないんだぜ？」

「ダグラスの銀竜騎士団において三位の席に付き、実力は折紙つき。本来ならばバツカス様の直属親衛隊の隊長を任されても良い様な地位なのに、回ってきたのはこの馬の骨ともわからない小娘二人の護衛。素行不良で上に目をつけられて腐っているところに与えられたツマラナイ押し付け任務。いやねえ、自分の実力に自惚れて与えられた任務もろくにこなせないようなガキって。」

鼻で笑いながら昨日の晩に侍女たちから聞きだした情報を羅列して言い放つてやると、その男は一瞬で今までのにやけた表情を引っ込めて、怒気を含んだ鋭い視線を叩きつけてきた。ざまあみろ、と思う。

「てめえ誰のこと喋ってんだ？調子に乗るのも大概にしるよ踊り子風情が。殿下に客人扱いされてるからって、そもそもてめえは俺なんかとは口を聞くのも不可能なほどに身分がちげえんだよ。勘違いしてる痛々しい自分に気付けよ。」

「あの！！！」

フリルが突然大声をあげてソファアからその身を起こした。

「あ、あの……。ウ、ウルバさん……。あなたが護衛についてくださる事、とても感謝しています……。バツカス様が私達に護衛をつける時に、ダグラス一腕の立つ者をつけるように言葉添えしてくださったと聞きました……。ウルバさんみたいな凄い方が、私みたいな怪しい人物を護衛しなければならなんて本当は嫌なんですけど……。でも……。その……。」

そこまで言ってフリルは言葉を繋げなくなったように俯いてしまった。

特に何を言いたいわけでもなかったのだろう。

私とその男、ウルバと呼ばれたその男が罵倒しあう事が純粹に耐えられないようだった。

「あ、あの……。」

フリルは懸命に繋げる言葉を探しているようで、右に左にとせわしく視線を動かしながら慌てふためいている。

ウルバはその様子をポカンとした様子で眺めていたが、やがて静かに目を閉じて大袈裟なため息をついた。

「はぁ……。馬鹿馬鹿しい……。おい、シャルル。お前がどう思っているか知らないがな。別に俺は今回の任務を不満に思ってるわけじゃねーよ。何がお前を怒らせてるかしらねーけどな、俺の態度がきにくわないってんなら諦める。こりゃー生まれつきだ。あと、おい、フリル嬢。」

「は、はいっ。」

突然名前を呼ばれてフリルは体をびくつかせながら上ずった返事をした。

変な声になったと思ったのか、返事の直後に顔を僅かに赤く染めている。

「……悪かったな。別に怖がらせるつもりでお前に気安く声かけたつもりじゃねーんだけどな……。どうもその怖いお姉ちゃんにはそう映ったらしい。もしお前もそう感じてるんなら、謝るわ。」

「・・・いえ。私はそんな事思っていませんし、シャルルさんも同じです。」

フリルはウルバの言葉を受けて、微笑みながら穏やかに答えた。

少し首を傾げたその仕草はとても可憐で、肩から流れるように垂れる髪がサラサラと音でも立てそうな様子で揺れる様は、女の私からみてもとても魅力的なもののように思えた。

「どうだかな・・・、廊下で警備に立ってる。何かあったら声掛けしてくれ。」

フリルに一瞬見惚れるような表情をしたウルバは、脇に置いていた身の丈ほどもある細い大太刀を小脇に抱えると、入ってきたときは対照的にそそくさとした態度で、逃げ出すようにして部屋から出ていった。

それを見送るとフリルにしては珍しく、少し怒ったような顔をして私に口を開いた。

「シャルルさん、どうしてウルバさんと喧嘩しちゃうんですか？」

私は舌を出して降参のポーズで固まる。その様子を見てフリルが呆れたように小さく息を吐いた。

「初対面から二人してずっと喧嘩ばかり。一緒にいる私まで息が詰まっちゃいます。シャルルさんはウルバさんの何がそんなに気に喰わないんですか？」

「うーん・・・。何がって言われてもねえ・・・。」

「理由も無いのに嫌いなんですか？」

「別に嫌いって程じゃ・・・、いやあ、嫌いなのかしらねえ・・・。」

フリルの珍しく強気な態度に私がしどろもどろで答えていると、フリルはまた小さな子どもを叱るような目つきで私の事を見つめてきた。

「ウルバさんだって自分から望んで護衛の任務についてくれてるわけじゃないんです。シャルルさんがそんな当たり前の事をわかってないはずないじゃないですか・・・。確かに私の態度もよくなかったと思います・・・。声が大きいので・・・、少し苦手ですから・・・でも、私はウルバさんは良い人だと思いますよ？馴れなれしい態度でシャルルさんは言っていましたけど、私には気を使わないように気さくに声を掛けてくれているように映りますし。」

フリル、それは良く言い過ぎよ。と喉まで出掛かって危うく堪えた。珍しくフリルが饒舌になっっているのだ。余計な事を言っただけ以上怒らせたくはないし、何より珍しいので遮るのもおもしろい気がする。

「私は、折角護衛について頂けるなら気兼ねの無い関係になれば一番だと思います。少なくとも今はウルバさんに嫌な感覚は抱いていませんし、変に気を使わなきゃいけないって意識もありません。それもウルバさんが一貫して気さくに声を掛けてくださっているからだと思います。私、臆病で根性無しだから初対面の人とあんまり上手く話が出来ないけど、ウルバさんはそんな事にせず話かけてくれました。会ってからまだ三日しか経っていないけど、なんだかもつと前から知り合いだったような錯覚すらするんです。」

確かにフリルにしては珍しく、ウルバに対して彼女はあまり警戒心も見せずに初めから自然な態度を見せている。

素直に声が大きい事に怖がる様子も、それを我慢してしまうほど気を使っていない事の証拠だろう。

「んーそうねえ……。まあ私の態度も子どもっぽいものだったとは思っわ。だけどねえ……。」

「だけど？」

だけど、初めて会った時のウルバの態度が未だに私にとっては許しがたいものだったのだ。

よりによつてあの男。フリルの事を口説きにかかった。

いきなり顎に手をかけて顔をフリルに急接近させ口説きに入るものだから、思わずその頭を側頭部から引つ叩いてしまったのだ。

当のフリルはというと、よく現状が把握できていなかったのか、ポカンとした表情に終始していたが、その時一緒にいたブラック殿下は、よくみたら剣の柄に手をかけていた。

考えて見れば王直々に一刀両断にされていたかもしれないのだ、感謝されこそすれ、いちいち嫌な態度を取られるなんてたまったものではない。

「ん……。まあ、良いわ。わかったわよ、私も悪かった。」

そうフリルに言うと、フリルは一瞬にしてにこやかな表情になった。まるで雲が晴れて太陽が顔を出したみたいね。

私にとってはフリルのこの表情の変化の豊かさが最近の楽しみの一つでもあった。

とにかく感情が素直に顔に出る子なのだ。

その髪に直接触れるとまるで自分のものの様にフリルの感情が流れ込んでくるが、それがなくてもフリルの心の内を読むのはたやすい事だった。

感情が隠せないのはフリルの性格ゆえなのか、それともドラゴンの特性なのか。

どっちみち、ウルバみたいな人物を簡単に信用してしまう事同様、人との騙し合いには到底不向きなように思える。

「後で、ウルバさんと一緒に食事をしませんか？」

そう微笑むフリルに笑顔で頷きながら、その食事の席でまた喧嘩にならないようにしようと、私は密かに決意を固めた。

「食事？ いやまずいだろ。そんな事許可されてねえし。」

そう目の前の青い髪の少女に言い放つと（まあ少女といっても大して歳も離れていないだろうけど）見るからに残念そうな、なんとも言えない表情をされた。

どう思われているかは知らないが、さすがに任務中に護衛対象と食事を楽しむなんて軽率な行動はまずい。

浅はかな行動をするやつと認識されているとしたら声を大にして異論を唱えたいところだ。

「そう落ち込んだ顔をするなよ。そもそも俺の役目はお前らの食事中や睡眠中に安全を確保することだろう？その俺と一緒に食事に興じてたんじゃ世話ないわな。食事の毒見ぐらいだったらいくらでもしてやるけど、帯刀もせずのにんびり飯を食ってて緊急事態がおきました対応できませんでしたなんて冗談じゃねえよ。」

「そうですね・・・。」

俺の言葉を受けて、フリルは目に見えてシユンと落ち込んでしまった。

そういう反応はまずい。苦手だ。

内心では相当焦りながらなんとか、なんとかフリルのご機嫌を取り繕おうと躍起になって言葉を紡いだ。

「にしても何でいきなり食事なんだよ。話したい事があるならいつだって聞いてやるぜ？それともなんか別の理由があるのか？」

「いえ・・・、ただ仲良くできたらなあって・・・。」

ああこいつ、さっきのシャルルと俺の口喧嘩を気にしてんのか、と遅ればせながら頭にフリルの行動の理由が浮かんだ。

律儀な奴だと、思わず苦笑がもれそうになってしまった。

確かにさっきはシャルルのトゲトゲしい反応にカチンときてしまったが、あの程度の罵倒なら、軍所属の自分にとってそう珍しいものでもない。いつまでも引きずっているほど重大な事件というわけではなかった。大方、シャルルにしたって似たようなもんだろう。育ちが良いんだらうかコイツ？そう思っただけで目の前のフリルを眺める

と、なんとなくからかってやりたくなってきた。

「おいおい、仲が悪いのか今？へこむなー。俺はこんなにフリル嬢が好きだってのに……。フリル嬢はまだまだ心を開いてくれないんだな……。」

「や、そ、そんな事ないです！」

フリルは慌てたようにそう言って手を左右にブンブンと振る。

「一目みた瞬間からフリル嬢の美しさに心奪われちゃったんだぜ俺は……。なのにフリル嬢ときたら……。未だに食事もろくに出来ないほどの仲としか認識してくれていない……。」

「あ、あの！え、えと！」

好きだの美しいだの、手放しに褒められた事に対してなのか、それとも親しく思っていないという事を否定したいからなのか、とにかくフリルは耳まで真っ赤になりながら「うー」だの「あー」だのうめき声をもらしている。

「ショックだ……。ショックだわぁ……。会話の節々に宿るフリル嬢の優しさに、君を護衛できる事の幸せを噛み締めながら歩哨にたっていたってーのに……。」

「あ、あ……。うあ、そ、そのっ……。」

「良いんだ……。どうせ俺なんて軽薄で軽率で、フリル嬢の友人認定を受けるには生まれなおしてくるしか方法が残されていないよ。うな男だもんな……。」

「そ、そんなことっ！」

「氣を使わないでくれフリル嬢……。君の優しさが……。今は心に響く……。」

「き、氣を使つてなんかいませんよ！本当です！」

「よしてくれ……。氣休めの優しさなんて、辛いだけさ……。」

「き、氣休めなんかじゃありません！私はウルバさんの事を信頼しています！」

「たった三日でかい？」

「う……。」

時間の経過は圧倒的な力を持つ。信頼を勝ち得る事にも、感動や信仰が薄らぐにも、負った傷を癒す事にも。

三日という言葉がある種キーワードにでもなっているかのようにして、フリルはたった一言で言葉が喉につつかえたような反応をみせた。

「ほら……。それが君の本音さ。言葉ではいくらでも信頼なんて示せるのさ。」

「そ、それは……。」

「ああ、いや、誤解しないでくれ。フリル嬢の事を卑下した訳ではないんだ。……。それが人としての当たり前の反応なんだよ。三日

という短い時間の中で、人の信頼を勝ち得る事は非常に困難だ……」

「で、でも……。」

「ただ……。」

「え……？」

「ただ、たった三日でも人が信頼を勝ち得る事が出来る方法を、一つだけ俺は知っている。」

「そ、それは一体どういった方法なんですか!？」

息を呑む、という表現がぴったり当てはまるような反応で、フリルは面白いくらい素直にこちらの話に食い付いてきた。正直、わかってやってんのかと突っ込みたくなるような反応だ。

「……君には到底無理さ。この行いをするにはとても強い覚悟と、相手を信じようとする揺ぎ無い意思が必要になる。」

「わ、私、覚悟ならあります!」

フリルはフンフンと音のしそうな勢いで息巻き、決死の表情でもってこちらに詰め寄り始めた。

……正直ここまで気合が入るとは予想していなかったので、こちらの方が若干引きかけるがなんとか踏みとどまる。こんな真剣な展開を望んだわけではなかったんだが……。

そう、「えー? やっだーウルバさんてばあ」
「くらいのポジションを狙いにいくつもりだったのに……。」

わかった、もういいや、・・・襲おう。

「そうか・・・それ程の強い決意でいるんだな・・・。」

「はい！」

「では、今夜、夜10時頃に僕の部屋にキタマへ。ソコデ大人が如何にしてお互いの信頼を勝ち得るのか、その方法について君に伝授したいと思う。あ、クレグレモ一人デ来ルヨウニ。」

「え・・・？・・・。は、はい！」

一瞬逡巡したような表情を浮かべたフリルではあったが、ちよろい心に浮かびかけた疑惑を、わざわざ自ら振り払ったようにして再び決然とした表情をその顔に浮かべた。

「場所八、ワカルカネ？」

そう言いながら、フリルの目の前に紙切れをひらつかせて、自分の部屋への道順を書こうとしたその矢先だった。

「おい、クス。」

背中に投げつけられた言葉は、標高の高いダグラスにあって尚その冷たさが身に染みるほどの冷徹さをその中に含んでいる。

「ちい・・・。」

ギギギ、と回したくもない首を、砕けよとばかりの圧力で持って両

側からしめつけられ回されたその先には、悪鬼のごとき形相で持つてこちらを睨みつけてくるシャルルの姿があった。

「なにを……してんのかしらあ？」

無理に唇の端を釣り上げらせたらしいその表情は、はっきり言つて死神にしか見えない。
咄嗟に死を覚悟した。

「い、いや……。フリル嬢が……。俺と仲良くしたいっていうもんだから……。」

「ふーん、仲良く、深夜の男の部屋で、なにをするって？」

「やだ……。シャルル嬢ったら下品なんだから……。」

「死を持って詫びろ。」

お前踊り子とか嘘だろ。と胸中で絶叫しながら、俺はシャルルの繰り出した光速の鉄拳を顔面へ受けた勢いで地面へと崩れ落ちた。

「い、いて、いてえええ！な、なにすんだよっ！？」

「何するんだじゃないわよ！あんたフリルに何を吹き込もうとしてんのよっ！！」

シャルルがその額に血管を浮かび上がらせながら大声を上げる。耳をつんざかれるかと思うほどの高い金切り声に、頭を打ち抜かれてグワングワンと視界が揺さぶられた。

「ちよつ、お、おい、大声だすなよな！？う、うるせえ！」

「どの口がそういう事いうわけっ！？あんたフリルの素直さにつけこんでこの子慰み者にしようとしたでしょう！？」

「げ、ちよ．．．！」

フリルは一瞬シャルルの言葉の意味がわからなかったようで、ポカーンと口を開けて呆けた表情をしたが、しばらくしてボンと音のしそうな勢いで首まで真っ赤になった。

「お、おま．．．、冗談に決まってるだろ！」

「どうかしらねえ．．．？フリル、こっちへおいで、害虫の側にいると病気がうつるわ。」

シャルルの呼びかけに、顔を真っ赤にしたままのフリルは素直に従って、その背中へとサササッと隠れてしまう。

「お、おい、フリル嬢．．．？」

「．．．知りません。」

先程までの素直な態度はどこへやら、真っ赤な顔のフリルは唇を盛大に尖らせてプイツと横を向いてしまった。

「おいおいおい？冗談だぜフリル嬢？今の、まじで冗談なんだぜ？」

「これ以上話かけないでくれなしかしら、この人畜有害奇天烈野郎。」

フリルの純真な魂がダークサイドに堕ちてしまっわ。」

「て、てめえシャルル……。」

「フリル、わかったでしょう？ 私がこの寄生虫を訳も無く敬遠していたわけじゃないってことが。」

「……はい。」

「寄生虫とか認めちゃうわけフリル嬢!？」

「ウルバさんがそういう事考える人だとは思っていませんでしたから!」

フリルは真っ赤な顔のまま、ギョツと目をつぶって盛大にアッカンベーをかましてくる。

「ば……、おま……、無茶な事言うんじゃないやねえよ!! 可愛い女の子前にして一瞬たりともそういう事考えない男がこの世にいるもんか! 甘い夢は捨てる!」

「やっぱり冗談じゃないんじゃないですか!」

「な!？ おま……、い、今は、こ、言葉のあやだ!」

おかしい、さっきまでは完全にこちらがペースを握っていたはずなのに、いつのまにかフリルに発言を誘導される始末だ。

シャルルはというと勝ち誇った様子で満足げにこちらを見下してくるし、そのシャルルの背中に完全に顔を隠してしまったフリルには最早取り付くしまも無い。

なんとかせねばならん。このままでは、俺がただの下衆野郎と勘違いされてしまうではないか。

「いいかフリル？確かに今の会話の流れには少々強引なところもあったかもしれない。だがな？さっきも言ったが、可愛い女の子と少しでも親密な関係になりたいと思うのは世の男のサガというもんだ。例え、その場で何をするつもりでなくともだ。」

「騙されちゃだめよフリル？虫の羽音は精神に重大なストレスを与えるわ。煩わしい音を聞く前に耳を塞いでおしまいなさい。」

「虫って……。ま、まあ良い。そ、それよりもだ、つまりだな、俺が言いたいのは、フリル嬢の事をすくなくらず淡い気持ちで見てもうのはだな、それだけ君の美しさに心引かれているからなんだぜ？君がとても女性的で素晴らしいという事の証明だ。恥ずかしがったり軽蔑するなんてとんでもない！むしろ名誉に思っても良い事なんじゃないか？」

こちらの言葉を受けて、フリルは少し戸惑ったようにしてシャルルの顔を覗きこんだ。良いぞ。動揺しているらしい。このまま押せば

「うわ、なんて自分勝手な解釈。良い迷惑よこの勘違い野郎。あなたの自己中心的理論でスケベな目を向けられるなんて固くお断りだつての。なんでアンタのいやらしい目で見られる事が女のステータスになってる訳？馬鹿なの？ほんと、いつぺん死んできたら？あ、フリル、口を手で覆いなさい。同じ空気を吸っては駄目。」

——ちくしょう！

「て、てめ……。い、いいか？世の中の男なんて皆そんなもんだ。俺が特別って訳じゃないんだぜ？そう、バラック殿下だつてきつと同じだ！男なんてな……。男なんて……。みんなスケべなんだよ！！」

「余がどうかしたのか？」

背後からかけられた声に、一瞬で冷や汗が体中から吹き出る感覚を味わった。

内心で「ぎゃあああああああ！！！」と絶叫するものの、体はちぐはぐで凍ったように固まり、ピクリとも動かす事が叶わない。

やばい。

やばいやばいやばい……。

「あ、バラック殿下。ご機嫌麗しゅう。」

「やあ、シャルル殿。フリル殿も元気そうで何より。で、余がどうしたというのだ、ウルバ。」

「……。あ、そ、その。」

顎から一滴、汗がぼたりと床に落ちる。いまだシャルルに怒鳴りつけた時の姿勢のまま、顔の向きすら直せないでいた。

「殿下、この騎士殿がお答えできないようなので、私めが代わりにお答えいたしましょう。あのですね……。」

「やめろおおおお！！！」と、呪縛から解き放たれたように体の

コントロールを取り戻した俺は、絶叫しながらシャルルの口をふさぎに飛び掛った。

瞬間、一閃、動揺していつ抜いたのかも把握出来なかったバラックの剣先が喉下へとぴたりと据えられた。

「どうしたのかなウルバ？彼女らは私の大切な客人だ。礼を失するのであれば、それ相応の処罰というものをお前に与えなくてはならん。」

「で、殿下……。あ、あの、剣……。あぶない、ですよ？」

「危ないのはあんたの頭の中身よ。」

ためえこらシャルル黙ってる！と叫びたい衝動を必死に抑え、無理やりに引きつった笑顔を顔面に固定する。

「シャ、シャルル嬢。何か誤解があるようだ。僕らは今、護衛する者と護衛される者との確かな絆を築く方向性を探る話をしていたんじゃないかね？」

「護衛？なんかさつき、どっかの誰かが私達の事を捕虜だとか何とか……。」

「シャ、シャルルさん。貴女程素晴らしい女性を俺は見た事が無い。君の背中に何故か隠れてしまっているフリル嬢にしてもそうだ。どうだろう、ここは一つ、城下の超がつく高級レストランで手を打たないかい？」

喉下に突き立てられる剣の冷たさに冷や汗を流しながらシャルルに

許しを請うが、シャルルは心底意地の悪そうな笑みを浮かべて「シャルル様、ではなくて？」と言い放ちやがった。

正直、後で引つ叩いてやろうと思う。女だからとて容赦するものか。うん。

「シャルル殿、フリル殿。余の臣下が無礼を働いた事、私から謝らせていただく。望みとあらば護衛の任務を他のものに任せるように取り計らうが……。」

バラックはそういうとため息をつきながら剣を鞘に収めた。

「あら、ですってよフリル。どうでしょうか？」

ちい……。まあいい。正直、お前らの護衛などこちらから願ひ下げだ。王城内の庭園の草むしりでもしていたほうがまだ気分も晴れるだろう。はいと言え、はいと。

そう思いつつフリルの方にちらと視線を向けると、意外な事にフリルは少し戸惑ったような表情をして俺の事を見つめてきていた。

……。なに？

なんでそこで悩むわけ？

「あ、あのバラック様……。」

「なにかなフリル殿？」

おずおずといった様子で、フリルは僅かにその身をシャルルの陰から出すと、俯きながら暫くモジモジとしてから、何事か決心したよ

うにその顔を上げた。

「無礼など、とんでも御座いませぬ。ウルバさんはよくやってくださっています。私は、護衛をウルバさんにして頂いてとても感謝しています。」

「あら？」と子首を傾げたのはシャルル。

「しかし……。」と渋い表情をしたのはバラック。

「はい？」と呆気にとられたのは、俺。

「先程ウルバさんを食事に誘ったんです。」

「む……。」

バラックが訳がわからないといった表情を浮かべる。
同感だった。

「……何が言いたいんだ？」

「私、ウルバさんがさっき仰った通り、折角護衛して下さるのなら仲良くなりたいと思っていました。だから、よく考えもせずに誘ってしまったんです。ウルバさんはバラック様からの命を受けて任務中だっというのに……。」

「ふ……む。」

「でも、ウルバさんは真剣に私達の護衛の事を考えて下さっています。怒りもせずに、私達の事を守らなければならぬ自分が不意な行為はできないとやんわりと教えてくださったんです。」

「むう……。」

「それに……。」

そういつて、バラックに向けていた視線を一瞬だけこちらにチラリと向け、フリルはすぐに照れたようにして下を向いた。

「何か話があるのならば、いつでも聞いてやるよって仰ってくださいっただんです。任務中なのに、周りを警戒しながら、話を聞いてくださるって……。」

「……。」

「フ、フリル嬢……。」

感動した！感動したよフリル嬢！！

君は……、君は本当に素晴らしい女性だ！！

俺は、俺は今決心した。

任務など、とんでもない。

与えられたものではなく、自らの意思として君を守り通す事を今声高らかにドラゴンに誓おう！

そう、この命尽き果てよう——「でも、会話に夢中でバラック殿下の接近に全然気付いてなかったわよね」——台無しだよシャルルてめえ！！！！

確かに、とバラックは力強く頷いて見せた。

フリルもハッとしたように目を大きく開き、困ったような表情になっ
てしまう。

「あ・・・で、でも・・・うーん。」と頭を抱えてしまうフリル。

オウケイ。フリル嬢、君の事は全力で守ろう。てめえこらシャルル、
覚えとけよ！てめえなんざ知ったこっちゃねえからな！

と内心で叫びながらも、俺は冷や汗を流しながら苦笑いするしか出
来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786j/>

ドラゴンのフリル

2010年11月6日23時21分発行